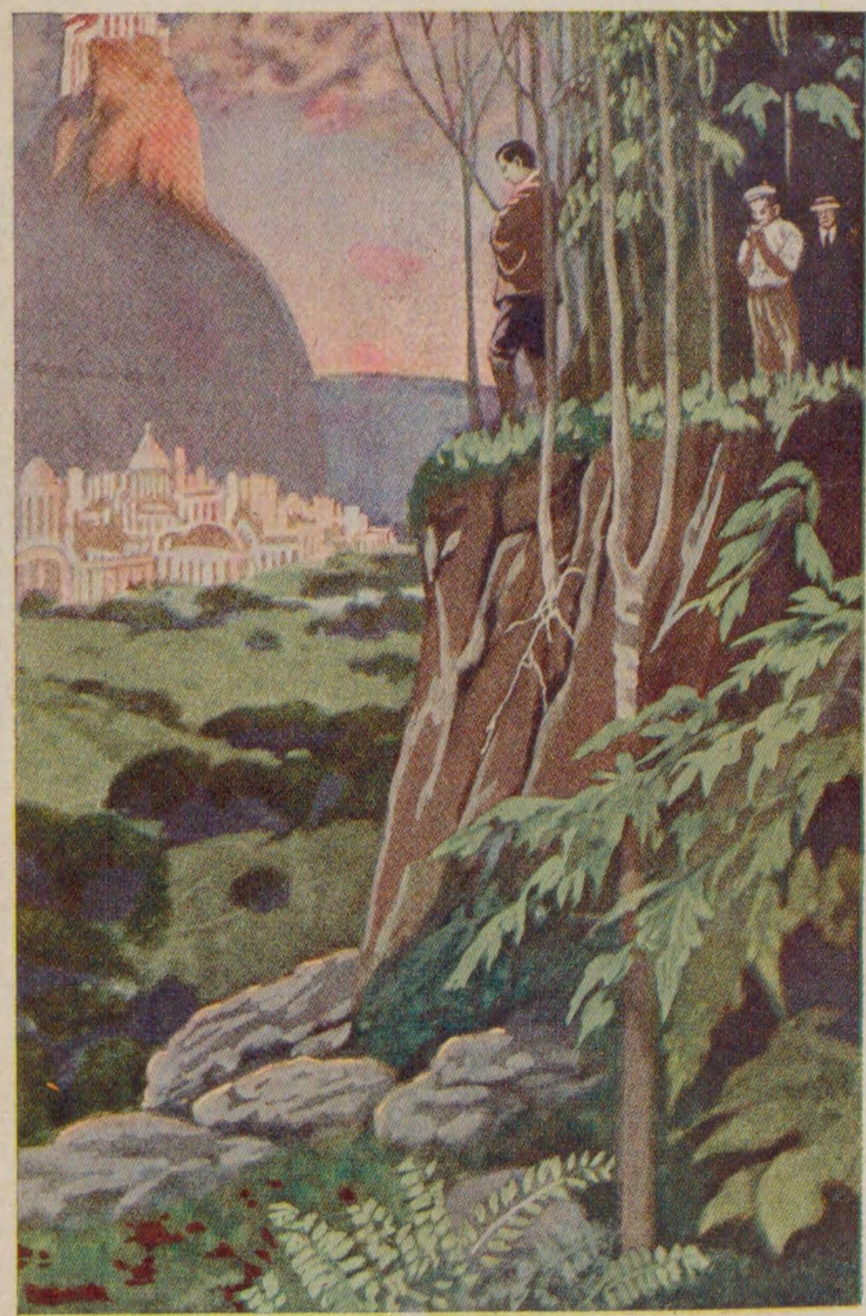
569-61
1200501298441

世界大衆文學全集

幻島ロマンス

野口米次郎

改造社



大河内は眼下の景色に夢を見てゐるのではないかと疑つた。（一八四頁參照）

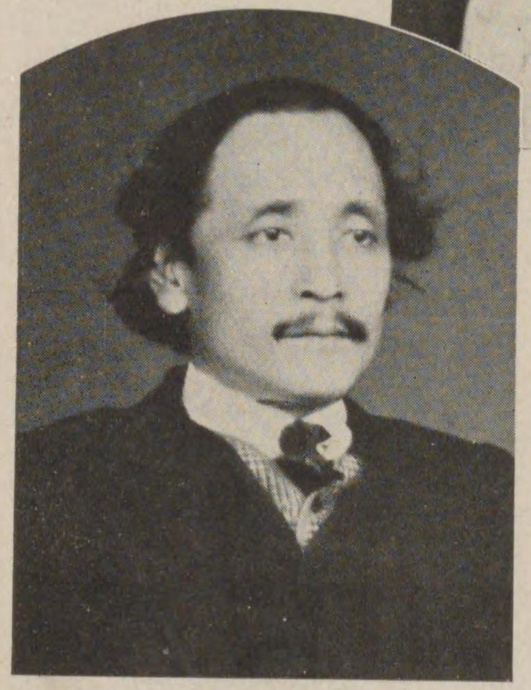
569
61

國立國會圖書館藏書

I 種
W

1200501298441

ルイゲ・ナゾ



氏郎次米口野

序文

私の詩に「雪の日」と題して本小説の原作者ゾナ・ゲール嬢に關したものがある。これは十年前私が渡米した時彼女の客として一兩日間を共に暮したことが、その折の一場面で追想して書いたものだ。いふまでもなく降雪の日の場面で私は彼女の書齋で跌坐をかきながら、手當次第に書棚から拔いた彼女の小説を讀んでゐる。彼女はいつの間にやら私の側に立つてゐる。（彼女は少しも音をさせずに歩む女だ。）私は彼女を見あげ彼女は私を見下した。

「私は彼女の顏を下から見上げる、
彼女は嫌な物を見てぞつとしたやうな顏をしてゐる……
私は心のなかで感じる『あはあ、僕の頭の天邊を見てびつくりしたのだな……
それにしてもゾナの髮の毛はどうだ、半分も灰色になつてゐる。』

私は彼女と離ればなれに立上り、
窓から外を眺め、
『よく降る雪だね』と私がいふ、
彼女が答へる、『まだ四五日は續くだらうと思ふ……』
最後に紐育で分れてから最早や十七八年にもなるわね。」

私のゾナ・ゲール孃の追憶は三十年も昔へと溯らねばならない。誰も彼女の二十四五歳當時を忘れることが出來ない。彼女は女作家に最も稀な美貌の持主であつた、そしてその絢爛な才氣は珠玉のやうに光つた。彼女は愛の人であると同時に近代的理性の人であつた。ノヴァリスの言葉に「愛人を初めて瞥見した時の思ひを記憶する人は魔法を信じない譯にゆかない」とあるが、ゾナ・ゲール孃も魔法の信者であつた。そしてしかも彼女が本小説に於けるやうに第四次元を語るとき、彼女は理智を戀愛の背景としようとした。しかし戀愛そのものこそ第四次元の世界であると喝破して、彼女は純白無垢の魔法信者であることを滿足してゐる。彼女が本小説を私に贈呈したとき、見返しの餘白に「亞米利加のゾナ・ゲールより亞細亞のヨネ・ノグチに……しかし道は一筋だ、東もなければ西もない、君はこのことを知つてゐる」と書いてあつた。實に戀愛の四次元世界に東西南北の區別はない。

本小説は飜譯でない。實際に私がゾナ・ゲール原作「ザ・ローマンス島」を飜案したもので、舞臺も全部亞細亞へ持つて來た。ゾナ・ゲール孃とヨネ・ノグチの合作である。

昭和四年七月末日

野口米次郎

目次

第一章 晩餐會 …… 八
第二章 紙切れの文字 …… 三一
第三章 不二子孃 …… 五四
第四章 伯爵タビット …… 八一
第五章 不二子孃の提案 …… 一〇四
第六章 二人の一寸法師 …… 一三六
第七章 海上 …… 一五三
第八章 ヤクキ島上陸 …… 一七〇

第九章「王國中の貴婦人」……一九九
第十章婚　約……二三五
第十一章食堂の椿事……二六〇
第十二章救　助……二九三
第十三章王城の表玄關……三〇七
第十四章月下の王城……三二七
第十五章戀の通夜……三六六
第十六章宮殿の捜索……三七四
第十七章墳墓の地下室……三九二

第十八章朝の訪問……四一五
第十九章帝王の間……四三〇
第二十章タビットの沒落……四五五
第二十一章歸　航……四七七

幻島ロマンス

幻島ロマンス

第一章　晩餐會

この物語は横濱で始まる。

いな、横濱埠頭の水上で始まるといつた方が正確だ。時は青葉の五月も末の午後四時すぎ……灣の水はゆつたりと午睡から目覺めたもののやうに、一段の新鮮を湛へてゐる。今はや初夏氣分のなかに、水は嚴肅な束縛を離れて解放の自由を味つてゐるやうに感じられる。その寛かな音律を聞くと、水はどんなに濁つても自然の純性は決して汚れないといふ感が深い。

苟も日本の表玄關を承つて居る横濱灣のことである。いふまでもなくここに群集する船舶の種類大小は千差萬別である。恰も都會を作る家屋に本通りを辱めない立派な洋式の大厦高樓もあればまた六尺道路の裏道に居並ぶ三軒長屋があるやうに、そのなかに幾萬噸といふ恐ろしい大きな定期航海の郵船もあれば今に沈みさうなぼろぼろの漁船もある。この驚くべき船の雜沓を無遠慮に掻き分けながら、如何にも輕快な近代的の姿を顯はした一艘の遊船がある。譬へると一羽の金絲雀が烏や鳶の間に降りたやうなもので、その輕裝した清々しい形は胸のすくやうに心持がいい。この米國式遊船の持主は誰か。

實際に私の物語はこの遊船を以て始まるのである。

遊船プロハ丸の所有者は青年成金の大河内洋三である。彼は自慢の遊船で横濱埠頭へ乘り入つた時その船首に突立ちあがり、傳聲器を通じて精一杯の大聲で叫びたいやうに思つた。

「遠からぬものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、われこそは清和天皇の後裔源氏の嫡流……どつこいさうでない。昨日まで一文なしの素寒貧大河内洋三であつたが、今日は諸君の御覽の如くこの遊船の所有者たる光榮を有するものだ。御希望とあらば如何なる人にも本船をお見せする。自慢ではないが諸君を歡待するに足る特別上等の葡萄酒も用意してある。」

然し彼に人竝すぐれた謙讓の美德があつた譯でないが、この大膽な宣言をぢつと堪へた……彼は自家廣告は少々だらしが無いといふことを承知してゐた。彼は船のボーイを呼びだし、綺麗に塗つたボートを下ろさせ、輕くひらりと乘つた。そして彼がこのボーイに「急いで漕げ」と命じた時、彼は心のなかで「一年も前にはかういふボーイと肘を交へて簡易食堂で十錢の食事をぱくついたこともあつた……然るに今はどうだ、僕は成功者だ、運命といふ奴位不思議なものはない」と思つた。そして彼は「この運命に迎へられない間は人間の努力も無駄だ。然し運命の順風に帆さへ張れば天下に成らざることなしだ……實際に僕の富は自分の力で作つたものでなといつていい。運命が偶然に僕に與へたのだ、僕は夢にも見なかつた拾ひものをした譯だ。」としみじみ思つた。

彼は棧橋でボートを捨て、町の自動車を呼んで飛乘り、櫻木町へと急いだ。彼は電車内の人となつ

てもなほも過去五六年間の追憶に耽つた。彼は「成功者に取つて過去の苦い悲しい追憶位喜ばしいものはない。」と思つた。

彼はいつも自分が成功した時三つのことを是非共實行しなければならないと思つて居つた……その第一は郷里にゐる母親のことで、彼女に一軒の隱居所を新築することであつた。彼はこれを實行した。彼の母親は建築に氣むづかしい趣味を持つてゐたので、總ての材料を嚴重に日本品に限つた……木を木曾の檜にした、襖の紙一枚も外國品は使はなかつた。それから彼は巨大な花崗石の燈籠と手洗鉢と、素敵に立派な高野槇と幾株の八つ手を庭へ植ゑて彼女を喜ばした。彼の叔父は郷里の小さいお寺の住職であつて、食ふには何の不足はなかつたが一生なに一つ贅澤といふことをしたことが無かつた。彼は少年時代にこの叔父から受けた注意や親切に對して手厚く報いねばならないと思つた。そこで彼は彼のお寺の修繕を始めた……寺の本堂の天井を直し疊替をして、見事な金鍍金の天蓋や瓔珞を寄附した。そして更に彼は母親と叔父を喜ばせるため、金を湯水のやうに使つて京都見物をさせた。この時彼は三つの希望のうち二つが仕遂げられたので殘る所は米國式遊船の問題だけであることを知つた。

大河内洋三がどうして遊船を買入れてその成功を實現しなければならないと思ふに至つたか……それには理由がある。言ひ後れたが大河内は十年間も米國に住んで、難艱困苦の有りたけを經驗した。彼が紐育にゐた時代に有名なブルークリン橋近く、俗に新聞社町と言はれるパーク・ロウの高い建

物に雇はれて窓拭きをしたことがある。彼は見下すと眩暈しさうな程高い部屋の窓を拭いてゐた時、いつも遙か下を流れるイースト・リバーを眺め、夏の季節であると其處へ集つた遊船のいくつもを注意しない譯にはゆかなかつた。彼は金にあかして建造されたそれ等の遊船が如何にも爽快な男性的な感じを與へることを思つた時、彼の金錢慾は空の雲のやうに高まるのを感じた。彼は今日本にゐて立派な遊船の所有者となり、昔の夢を實現させたのであるが、決してこのことは彼の歸朝當時に實行されさうに思はれなかつた。

彼は渡米した時とほぼ同じ狀態で日本へ舞ひもどつて來た……彼が歸朝した時、彼の粗末なトランクのなかに大學卒業證書の一枚もなければまた銀行の貯金通帳もなかつた。彼の母親がそのなかに着古したシャツと安全剃刀のみを見出した時、大河内洋三は正に祖先に顏向けのならない失敗者であると思つて私かに悲歎の涙を流した。彼は其日から何とか衣食の道を講じなければならなかつたので、ある友人の盡力に依つて、東京日東新聞の一記者となるに至つた。彼はもとより文章家でなかつた、また文章家にならうとも思はなかつた。彼が社會部に勤務することに定つた時、社會部長横井勉は彼に言つた。『社會部といふ所は他の部とは異つて文章などはどうでもいい。その替りにジャンと鐘を聞くと直ぐ飛びだし、この上どの方角だか感じて知る位の敏感性がなくてはならない。君は米國で苦んださうだが、まさか新聞社の皿を洗ひ窓を拭いたのでもあるまい……これから記者生活の第一頁が始まるのだ。呉れぐれもいふが、社會部では文章の力より機敏を要するよ。」然るに横井はその後し

ばらく大河内の文章の下手なことを、編輯部のみんなの人の前で大きな聲で怒鳴つた。

「一たいこの文章は何だね、まるで家賃の受取りみたいなものだ……これぢや活字にされない。文章といふものは借金の言譯のやうに書かなくちや……書きなほし給へ、十五分に仕上げるのだ。」

大河内が社會部から家庭部に移らされた時、彼はほつと一呼吸ついたの感があつた。彼は米國で十年間苦んだがため、自然に世慣れた一面があつて、これが彼に他の家庭部記者に比して一日の長ならしめた。彼は上流社會の婦人を訪問して相手次第で、外國夫人の服裝まで語つて彼等を喜ばした。また彼は所謂新婦人を訪問して、米國に於ける婦人の活躍を物語つて彼等を有頂天にもした。彼は別に特殊の研究や知識があるのでなかつたが、元來が相當に利口な男であつたから美術も談じ文學も語ることが出來た。然し彼は家庭部にも長く止らずに今度は經濟部へ移され、株屋通ひをさせられるに至つた。

運命といふ奴は、前に大河内がいつたやうに不思議なもので、彼はこの時それに愛撫され接吻され頬ずりされに至つた……といふのはある株屋の老爺が彼を見込んで、彼に金を自由に貸して投機界の一六勝負に乗りださせるに至つた。しかしてその結果たる、讀者諸君の先刻御承知のやうに、彼をして三つの希望を實現させるに至つたのである……事實、彼は立派な遊船の所有者、新進成金として少くとも日東新聞社の編輯部を驚駭させたのである。

彼の電車は今品川驛を過ぎ新橋へ近づかんとしてゐる。彼の追憶の喜びは破れた……彼は欠伸を洩

した。そして心のなかで思つた。「若し自分が新聞記者でなかつたならば、かういふ運命が自分に花咲かなかつたに相違ない……それにしても懐しいのは日東新聞社の編輯部である。僕は記者時代の同僚を忘れてはならない。」彼は電車を有樂町で降り、帝劇の裏通りに彼が持つてゐた自分のアパートメントへ急いだ……彼は今晩日東新聞社の有力な記者を招いて一夜の宴を張ることになつて居つたのである。

彼のアパートメントは食堂居間應接間、それに寢室三間と浴室と下男の部屋に勝手を入れて都合九室といふ小規模であるが、その裝飾萬端に美を盡してゐる。もち論であるといつても決して外面的なぎらぎらしたものでなく、しんみりと落着いた感じの美で、これも彼が紐育のリバーサイド・ドライブ最寄のアパートメントを理想とした結果である。彼はまだ獨身者であるが、その實際の生活狀態は彼のアパートメントのやうに清潔である。……この點は殊に現代稀れな例として賞讃に價する。彼は二人の下男に對して極めて丁寧親切である。その一人は料理番で他は食堂の給仕並びに小間使の役をする所謂バレーである。大河内はこのバレーを友人扱をして決して奉公人と思つてゐない。なぜならば彼は彼の市俄古時代の友人で、彼等は同じ家に働いて同情心に薄い主婦に追ひ廻はされたことさへあつたからである。大河内は彼を米國時代に於いてのやうに、ジョウジと呼んでゐる。ジョウジは嘗てある美術店の番頭を働いたことがあつて、その間に彼の美術趣味が培養されたものか、大河内のアパートメントは彼が主となつて裝飾したものである。そしてジョウジの最も得意とする裝飾觀は

食堂と居間に發揮されてゐて、大河内とジョウジはしばしば食後どつかと居間の安樂椅子に腰を埋めて、米國の古い話に耽ることがあつた……「ジョウジ、米國生活はつらかつたが今では愉快な追憶の種だな。」と大河内は叫んだ。

ジョウジは戸のベルを聞いて飛びだして來た……大河内がアパートメントへ歸つて來たのである。

「誰からも不參の電話はかからなかつたか？」と大河内はジョウジに尋ねた。

「はい、どなたからも。」

「そいつは結構だ。」といつて、大河内は帽子をジョウジに渡した。そして彼はいつた。

「酒の用意は十分かね……日本酒の方はどうでもいいが、葡萄酒は極上等のものでなくちや駄目だ。それから例の葉卷を澤山居間のテーブルに出して呉れ。今晩の客人は飲むとふかすことにかけては皆な剛のものばかりだ。それから食堂の電燈は消して、蠟燭の火に替へて呉れ……きつと食堂が落着いて、談話が工合よく元氣づくだらう。」

「承知いたしました、葡萄酒も葉卷も蠟燭も十分に用意がしてあります。」とジョウジは答へて、大河内の面前を退いた。大河内の方からはジョウジを友人扱にしてゐるが、ジョウジはどこまでも奉公人であるといふ内氣な柔和な態度を忘れなかつた……この點が大河内には嬉しい美點と感じられた。

大河内は自分の部屋へ行き、洋服を捨てゝ日本服に着かへ、食堂の用意はどうかと思つてそこへ入つて來た。食堂の大きなテーブルの四隅には、彼が命令して置いたやうに、大きな銀製の臺蠟燭が置

かれて居つた……これに薄桃色の笠がかぶされてゐて、いふに言へない綺麗な影を眞白に洗つたテーブル・クロースの上に投げてゐた。そしてテーブル・クロースの上には既に銀製の食器が行儀よく配列されてゐて、バター皿には玉になつた小さいバターが四つづつ置かれ、その側に燒いたピーナッが添へてあつた。大河内はこれを見て、につこり微笑み「結構だ」と獨語した。

今大河内の風采如何にと見るに、餘りに脊は高くないが、どことなく成功者らしくがつちりとしてゐる。孔子の言葉に、「視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」とあるが、大河内がその以す所その由る所を觀、その安んずる所を察する場合に彼の眼光はぴかりと光る……この眼光さへ見ると彼が尋常普通の人間でないことが知れる。また「巧言令色鮮矣」といふのも孔子の言葉である。大河内は多くの場合に餘りに粗雜の感じを人に與へる位にぶつきらぼうな點がある。然しそれも人に彼の信頼される人格を說明するものだとも言へる。要するに彼は如何にも男子らしい男子である。渡米前彼が日本で受けた教育は取りたてゝいふ程のものでなく、米國に於いても大學へ入つて勉强したといふのでないが、彼は修養の男だと思はれる美はしい雰圍氣を持つてゐる。若し健康と鋭敏とを代表する青年があるとすると、確に彼もその一人たることが出來る。彼は日東新聞に奉職中、社會部長の横井勉から如何にも不出來なやくざ物のやうに罵倒された。然し彼は、自分が必ずしも新聞記者として成功する男でないと思つてゐるだけで、横井に對してどう恨んでゐるのでもない、寧ろ心のなかで彼を尊敬してゐるのである。彼は時々横井が「文章は借金の言譯のやう

に書け」といつた言葉を思ひだして「人間の處生術も正にその通りだ……借金の言譯をする態度で實際の社會にぶつつかることだ」と獨語することさへあつた。この横井勉が今晩客人として大河内のアパートメントに來るのである。

ベルが鳴つた……大河内はそれを聞いて飛び出さうとするジョウジを止め、「僕が出るから」といつて、入口の戸を開けた。やあ、失敬」と言ひながら社會部長横井は入つて來た。

横井は自分の家へでも歸つたかのやうに、或はまた自分の編輯室へ入つたかのやうに、極めて自由闊達な態度ですつと大河内に導かれるまゝに居間に入り、並んでゐる椅子を見廻はして一番氣に入つたと思はれるものに腰を下した。彼は必ずしも他を睥睨するといふ惡習慣があつたのでないが、自然に周圍の環境を支配するといつたやうなものを持つてゐた。彼が無意識に吐きだす言葉を毒舌だと非難するものがあつても、彼はたゞ笑つて、自分では人生の批評だと濟してゐる。彼は所謂腕一本の男で、學校の卒業免狀や親の七光りのお蔭で今日の地位を得たのでない、彼は少年時代に給仕ボーイとして日東新聞の編輯部にはひつたものだといふ、自分で自分を築き上げた新聞記者に相應しい歴史の所有者だ。そして、彼は苦勞人であるだけ、人を使ふことが上手だ……「君に限るな」などゝ煽てあげて置いて、手下の青年にうんと働かせる呼吸をよく飲み込んでゐる。今では大河内を嘗て散々罵倒したことがあつたことなどは、けろりと忘れてしまつて、彼の今日の成功を心から賞讃してゐるのである。

二十分許り以前から居間に坐り込み、夕刊新聞を拾ひ讀みしながら他の客人が來るのを待つてゐた外字新聞飜譯部の加藤逸三は、社會部長が入つて來たので、立ち上り、につこり笑つて彼を迎へた。加藤は大河内と同鄕であり、その上鄕里の中學で同期生であつた所から大河内とは殊に親密の間柄である。彼の親は立派な外交官で、今現に歐羅巴の小國に公使として赴任してゐるが、親の厄介にならずに新聞記者として生活費を生み出し、どうにかかうにか自分の家族を維持してゐる……家族といつても妻と二人の子供だけに過ぎない。それから彼が大河内を得としてゐる理由は外ではない。大河内の米國に對する知識が彼の飜譯上少からず便利を與へる場合があつたので、しばしば理解し難い英文の箇所や問題にぶつつかると、彼は一應大河内にその意見を聞くやうにしてゐる。彼は極めて穩健な好青年である。社會部長が加藤の側の椅子に坐ると、すぐ後から戸を排して入つて來たのは人見といふ海事記者と後藤とふい運動記者である。海事記者は相當の年輩者であるが、後藤は若い……慶應の野球選手で隨分鳴らしたことのある美男子である。人見と後藤とにつづいて日東新聞社の國寶とさへ言はれてゐる老探訪高田憲が入つて來た。

高田はどこから見ても牛飲馬食の人間といふ風貌を供へてゐる。外面的からいふと野蠻人の域を漸くにして脫した人間に過ぎないの觀ありだが、精神的にはなかなか複雜な美點を多分に持つてゐる。彼が大酒家である證據は眼が赤味を帶び鼻の先が眞赤になつてゐる所にある。彼はつひぞ滿足に襟飾をつけてゐたことがなく靴も汚いのを穿いてゐる。それでも今晩は彼は綺麗に髮を撫でつけてゐるの

で、彼の友人はこれはまたどうしたことかと疑問の眼を見張つた。彼の探訪振りはいふまでもなく天下一品で、ものの祕密を嗅ぎ出す鼻の感じは驚くほど鋭敏である。この高田と一足後れて大河内の晩餐會へと乘り込んで來たのは那須といふ男である。那須は社會部に屬してゐるが主として特種を讀物風に書いてゐる記者である。彼は電話で四行位で書ける種を手に入れると、それを少くも二欄の讀物として提供することが出來、讀者を隨意に笑はせたり泣かせたりする手段を悉く心得てゐる。この男も日東新聞社で有名な人物として珍重されてゐる。

それから勝本といふ訪問の記者が入つて來た。彼の訪問記は日東新聞の特色の一つであつたが、彼の書く所が眞實であるや否やを、だれも研究したものがない。勝本につづいて電報記者の片岡が來た。それから後れて論說記者木村順次が入つて來たが、この男の地位が然らしめたであらうが、社會部長横井でさへ立ち上つて彼に敬意を拂つた。いふまでもなく彼の新聞社に於ける部屋には、綺麗な敷物がついてゐるばかりか次ぎの間附きといふ强勢振りである。彼は一緒に小說欄擔任の小柴といふ男をつれて來た。

小柴は大河内を見るやいきなりい言つた。

「やあ、しばらくでしたね……君の成功振りは實以て浦山しい。」

「何かで一つ當てるだね。然し小說などでは間尺に合ふまい。」と老探訪高田は口をさしはさんだ。

「日東の古記者ぢや家賃も拂ひかねる。」と後藤運動記者は高田に向つて言つた。小說家の方が遙に

增しだ……小說だからとてお釜を起さんとも限らない。」

「近頃ぢや圓本で一擧に二三萬圓儲けた小說家は少くない。」と人見海事記者は相槌を打つた。

小柴は再び大河内に話しかけた。

「小說家の二三萬圓は君のやうな生活は出來ない……所で君は愉快かね。」

大河内が直に返事をせずに居るのを見て高田が再び口を狹んだ。

「隨分野暮なことを聞く奴だな……嬉しい感じがさう長く續くものか。勿論大河内でも富を握つた最初は有頂天に嬉しかつたであらうが、今では何でもあるまい。大河内君、さうだらう……君は再び日東へ歸つて、もう一度社會部長にこき使はれた方が面白いと思はないかね。」

「社會部長がここに居ります。お手柔かに願ひます。」と横井勉は椅子をぐるりと廻はして叫んだ。

「社會部長の手荒い部下の操縱法は天下周知のことだ、それはここで論ずる必要がないとして、僕は一動議を提出して諸君の贊成を得たい……卽ち大河内洋三君を再びわれわれの社會部へ迎へるといふ動議だ……」かう小柴が喋つた後を受けて、横井は葉卷を捨てゝ言つた。

「そりや小柴、君の動議は駄目だ。第一僕が大河内を迎へない、彼は全然墮落してゐる……それが君に見えないのかね。二十五錢の親子丼で我慢が出來ない人間は、最早や如何なる新聞記者にも成る資格がないぢやないか。然し大河内君が儲けた全財產を捨てゝ來れば僕だつて話に乘らない譯ではないがね。」

この時みなのものが賑かに笑つて言つた。
「こいつは大河内君に取つて大問題になつて來た……何もそんなにして新聞記者になりたがる馬鹿もゐまい。」
大河内洋三も皆のものにつられて大きく笑つた。
彼は心のなかでかういふ氣の置けない率直な連中はいつまでも自分の友人として置きたいと思つた。そして彼等を招いて宴を張つたといふことは大出來の催しだと思つて、彼は嬉しく感じた。
今まで無言でゐた論說記者木村順次は口を開いていつた。
「大河内君を再び新聞記者にするといふことは將來の問題として、今は兎に角われわれの同僚からかういふ有望の富豪を生んだといふことは天下に誇つていゝと思ふ……大河内君の現在を祝さうと思ふがどうだ。」
「贊成、贊成。」といふ大きな聲が、皆のものの口から響き渡つた。
この瞬間に大河内のバレー並に給仕のジョウジは居間の戸を開け、跫音をさせずに入つて來た。彼は主人に耳打ちをした……いふまでもなく食事の用意が出來てゐることを報じたのである。「さあどうぞ食堂へ」といふ大河内の聲に應じて、九人の日東記者は一齊に立ち上つた、そして横井勉を先頭にたてゝどやどやと食堂へ入つた。彼等の席順は他人行儀に定められてゐなかつたので、彼等は得手勝手に坐つたが、それでも食卓の一番いゝ場所は横井と論說記者木村に與へられた。大河内はナフキン

を膝の上兵古帶の間にはさみながら、横井が今しも麵麭を二つにちぎらうとする手の樣子を眺めた。彼は心のなかで思つた、「あの神經質に振へる指先を見ると、彼が山のやうに積れた原稿を大急ぎに撥ねて、鉛筆で消して行く樣子が思ひだされる。」
横井は今食堂に漲る沈默を破つて、賑やかな生氣を注ぎ込む責任が自分にあるとでも思つたものか、頭をあげて喋り出した。
「諸君はお茶の水事件をどう思ふかね……その眞相が上らないとすると、確にそれは日東新聞の恥辱だといつて差支がない。これまでわが日東はしばしば祕密事件に關係して、隨分功名手柄をしたものだが、今回のお茶の水事件では全く閉口してゐる……」
「お茶の水事件とは何かね？」と大河内は口をさしはさんだ。
「これは驚いた。」と横井の部下の那須は笑ひながら叫んだ。「大河内君は三ケ月間も新聞を讀まないやうだね。」
「富豪となると新聞などは讀んでゐられないかも知れない。」と例の老探訪高田はまたぞろ皮肉な半疊を入れた。大河内は如何にも宴會の主人らしく、柔和に上品に横井勉に尋ねた。
「實際那須君のいふ通り僕は三ケ月以上も新聞に御無沙汰してゐる……お茶の水事件とは何か一つ話して呉れ給へ。」
社會部長横井は語りだした。

「昔といつても二三年前のお茶の水はよく殺人事件の背景となつた場所であつた……僕は少年時代に橋の上から下の谷水を眺め、その陰鬱幽怪な光景に打たれぞつとしたといふ追憶がある。昔は夏になると螢が幽靈のやうに飛んで、魔の住家であるといつたやうな物凄い感じを人に與へた……」

「そんなお茶の水の昔語はどうでもいい、早く本題に取りかゝり給へ」と木村論說記者は横井を冷やかすやうに叫んだ。

「話には順序といふものがあることを知らないね」と横井は木村に輕く應酬して、顏をまともに大内河に向け言葉を續けた。「今日ではお茶の水も驚く程明るい場所になつて了つた。然しそれでも殺人事件の背景として決して惡くないといへる。もとより今回の事件が殺人を目的としたものかどうかは研究の餘地があることはいふまでもない……那須と高田が本事件を擔任して調査してゐるのだが、事實は四分の一もあがつてゐない。事件は本鄕側の電車通りに立つてゐる文化アパートメントで起つたことだ……これも今日のお茶の水で起つた事件として近代的の感ありといつていゝ。このアパートメントに不二子孃といふ娘さんが伯母さんと一緒に住んでゐて、眞黑の女に襲はれ殆ど半死狀態にまで突刺されたのだ。眞黑の女は娘さんをエレベーターまで追ひつめた。若しエレベーター・ボーイが娘さんを助けなかつたならば、恐らく彼女は殺されてゐたであらうといふのだ。もち論狙擊した女は直に警官に引き渡されたが、不思議なことにこの女は一言葉も吐かない。この女は日本語を全然知らないとさへ思はれる點がないでもない。或はまた知らない振りをしてゐるのかも知れない……兎に角こ

れが疑問だ。それから警官の語る所によると、この女の身體檢査を行つた時、みなのものが驚いたことは、この女が巨額の寶石を身につけてゐたことである。野蠻的な裝飾の言葉を使つてもいゝ位に、警官などが未だ嘗て見たことのないやうな寶石であつたといふことである。それから不二子孃の誓言に依ると、彼女はこの女を全然知らない、また誰かにも聞いたことがないさうである。話の大體はまづこんなものだが、君はこの事件を何と鑑定するかね。」

「こいつは素敵な事件だ……驚くべき種だ。」と大河内は叫んだ。そして彼は那須に向つて尋ねた、

「君はこの眞黑の女を見たかね。」

社會部の那須は頷いた。

そして彼は言つた。

「そりや見たは見たが、一言葉も語らせることが出來なかつた……變な女だ、ただ歎息して頭を横に向けてしまつた。」

「君は不二子孃といふ娘さんに會つたかね。」と大河内は那須に尋ねた。

「會つたといふ譯ではない少くも僕は彼女に口を聞いたことがない。」と那須は大河内に答へた。「僕はこの事件が起つた時に、偶然そのアパートメントに居合はしたのだ……」

「この位の特種はまたと無いね。」と大河内は叫んだ。そして再び横井に向つて、「その不二子孃といふ娘は誰かねと尋ねた。

横井は答へた。
「不二子嬢性は酒井、東京の人……莫大な金持の上に美人と來てゐる。この位舞臺裝置の完全な女主人公はないぢやないか。何でも嬢はお茶の水のアパートメントで伯母さんと一緒に一年半も住んでゐるといふことだ。」
横井の言葉が終ると誰も無言で、食事の沈默を破るものがなかつた。暫時して小說欄擔任の小柴記者が、この問題をこのまゝ打切つてはつまらないと思つて、
「人間違ひで不二子嬢が酷い目に會つたのかも知れぬね。」といつた。
すると訪問記者勝本がそれに引續いていつた。
「二ケ月以前にも下女が女按摩を御主人と間違へてピストルで擊つたといふ事件があつたぢやないか。自分を按摩と一緒にするとは無禮千萬だとあつて下女を牢屋にぶち込んださうだが、この奥さんも振つてゐたね。」
「人間違ひぢやてんで特種にならない。」と加藤飜譯記者は叫んだ。
「それだから」と老探訪の高田はいつた。社會部長は是非共特種まで漕ぎつけようと頑張つてゐるのだ、確に特種になると信じ切つてゐるのだ……それでわれわれが苦心慘澹してゐるのだ。」
「お嬢さんを狙擊した眞黑の女は日本人でないかも知れない……日本人でないとすると、一體どこの女だらう。」と電報記者の片岡が、だれにいふともなしに尋ねた。

「布哇の土人かも知れない。」と加藤は答へた。
そして彼は言葉を續けた。
「お嬢さんは布哇に居つたことが無いかね……僕に想像させると、不二子嬢は布哇で生れて、嬢を襲つた眞黑の女に育てられたつまりその女は嬢の昔の乳母だ……然るに嬢は乳母にこつそり隱れて日本へ歸つた、乳母は狂氣のやうにそれを悲んだ、そこで到頭日本までやつて來て嬢の行方をさがし廻つた、そして嬢にお茶の水でめぐり合つた……この僕の想像はどうかね。」
「それにしても嬢を半殺しにするとは殘忍すぎるぢやないか。」と木村順次が大きな聲で言ひながら笑つた。
「僕ならかう想像するね。」と小柴は言ひだした。「この不二子嬢は極めて教養の深いモダンで、卽ち新しい女だ……それで深川や本所の貧民窟廻はりをして歩く、病氣で寢てゐる子供達に菓子をくばつたりお伽噺の本を讀んで聞かせたりしてゐる間に、一人の子供が急にぱつたり死んだ……その母親は氣が狂つた。これは不二子嬢が魔法を使つたからだと信じた、そして嬢を狙擊した……」
「眞黑の女を長屋の嬶にしても日本語を一つも喋らないとは變だな。」と木村が再び口を開いた。そして彼はいつた。
「いつそのことかう想像してはどうだ……問題の狙擊者は不二子嬢の母親で、長年の間巢鴨の瘋癲病院にとぢ込められて居つた。所がそこを逃げ出して、自分の娘卽ち不二子嬢を襲ふに至つたのだ……

つまり餘り可愛いいから殺してしまふといふ心理が無意識に働いたのだね。」
「この説には一理窟あるねと。」片岡が大きな聲で叫んだ。
すると社會部長横井は無遠慮な咳拂を一つして言つた。
「そんなに諸君がいろいろと想像説を出したとて仕方がない……僕は諸君を批判しないが、社會部の立場としては事實の報告でなくちや駄目だ。新聞は詩集でも無ければまた小説集でもない。夢のやうな頼りのない無責任の新聞ぢや誰も買はない。事實が想像を裏書しなくちや中學生の作文同様だ……高田君さうぢやないか。」
探訪記者高田は輕く横井勉に頷きながら、椅子を少しずらして背延びした。
大河内はしばらく無言でゐたが、今横井の方へ顔を向けて尋ねた。
「不二子嬢はだれかと婚約をしてゐるかね。」
「おいおい、大河内君、見ぬ戀にあこがれるとは餘り早過ぎるぢやないか?」と高田は、大きな聲で半疊を入れた。
「男振りは上等、それに金はうんとある……大河内と不二子嬢は好一對かも知れない。大河内、一つ當つてみるんだね。」と加藤逸三は相槌を打つた。
大河内は心持ちほど顔を赤らめた、そしていつた。
「僕はこの事件に非常な興味を感じてゐる、いな、感じ始めてゐる……もち論僕の興味が狙撃者の女

にあるかそれとも不二子嬢にあるかは明瞭でないが、兎に角僕は興味を持つてゐる……何とかして眞相を發き出したいものだ、そして東京の諸新聞をあつと驚かして遣りたい。」
「さうだ、君は新聞記者として餘り成功しなかつた。所で今度の事件を引受けて、名譽回復と出るのだね……實際今度のやうな機會はまたとない。手に唾して躍起すべしだ……」と小柴は煽て氣味に喋つた。
そして彼は更に續けた。
「若し君が事件の眞相を立派に探訪して名記者の名を得る、そして最後に不二子嬢と目出たく結婚するとなると、これ位結構な大團圓はない……目出た目出たの若松さまよで終結すれや、昭和の殺人事件も愉快な喜劇として申分なしだ。」
もち論大河内は小柴の煽動に乘つた譯ではないが、斷然と決心する所があつたかのやうな顏付で高田と那須と等分に眺めながら、言ひたした。
「僕は君等二人に相談がある……一週間僕は君等二人と入れ替りたい……長いことは言はない、一週間で澤山だ、その間に僕は殺人事件の眞相を摑んでみせる。君等二人は僕の遊船を乘り廻して、日本近海調査としやれ込み給へ……高田の好物の葡萄酒も十分に積まして置く、那須は那須で朝寢をしたい放題して、晩飯に好きなものを料理番に註文するのだ……君等の返答はどうだ。」
「こいつは浦山しいな。」と一同のものは聲を揃へて叫んだ。

那須は大河内を眺めていつた。
「僕等の返答より社會部長の意見を聞かなくちや……」
大河内は横井勉の方へ向いていつた。
「部長、今度の事件を僕に任せては呉れないかね……實は腕がりんりんと鳴つてゐる。お聞きのやうに僕は高田那須の兩君と一週間を期して入れ替りたい。きつと成功して見せる確信がある。」
横井は葡萄酒の杯を右の手で弄りながら考へてゐたが、「よろしい」と大聲で叫んだ、そして言葉を續けた。
「大河内も金の社界に飽いたと見える……それは結構だ、それでは僕は高田と那須と一週間休職させて君を臨時に雇ひ入れることにする。大河内君、君がふたたび僕の部下になつた以上、僕の命令に服從しなくちやならないことはいふまでもない……さあ、手打ちだ、高田、那須、大河内、コップを上げ給へ。」
横井の言葉通りに直に彼等三人はコップを持つて立ちあがつた、そしてお互ひにその縁をかちんと音させた。
「ああ、愉快だ……古巣へ戻つてひと働きするのだ。」と大河内は子供のやうに興奮して叫んだ。
「これから遊船の所有者の氣分がどんなものか味はへる……夢のやうだな。」高田は那須を見ながら叫んだ。

溫良平和な奉公人ジ■ウジは、恰も影の人間であるかのやうに靴の音一つもさせずに、食卓の周圍を廻つて酒を注ぎ通しであつた。彼はそつと懷中時計を出して見ると、食事が始まつてから丁度四時間にもなることを知つた……卽ち今は十一時である。小柴と木村論說記者は明日早くから仕事をひかへてゐるといふので、誰よりも早く大河内の家を辭した。木村は立さり際に大河内の肩をたたき、皮肉のやうな激勵を浴せかけた。「君は醉狂なことをやり出したものだ、然し君の好奇心に近代的生命の躍動を見る……自愛して呉れ給へ。」木村と小柴と入れちがつて日東新聞の演藝記者が、今帝劇と歌舞伎をのぞいて來た歸りだといつて、食堂へ坐り込んでホキスキーを二つ立てつけに飲んだ。彼は辭し去らうとするが加藤人見後藤勝本の面々を見て、「まだ宵の口ぢやないか、君等のやうな道德家はてんで話にならない。」と怒鳴つた。そして彼は大河内が一週間日東の社會部へ戻つて問題の殺人事件を擔任するといふことを聞いて、如何にも喜ばしさうにいつた、「さうなくては人生は面白くならない……大河内君、偉い、わが黨の士だ。」
社會部長横井は高田と那須と連れ立ち、演藝記者の腕を引張りながら立去らうとした。そして彼は大河内にいつた。
「成金の道樂仕事だと思つて懶けられては困るよ。朝は時間通りに出社して命令通り仕事を果たして呉れなくては……」
「無論のことだ。」と大河内は答へた。

「事實に於いて君は社外の人間だ。」と横井は言葉を續けた。「社外の人と一週間にしても編輯に關係させることは僕の責任だ、だから僕を苦境に落入らせるやうなことをしでかしては迷惑だよ、十分注意して呉れ給へ。」

大河内は頷いていつた。

「僕は最善をつくして君に滿足を與へる自信がある……心配無用にして呉れ給へ。所で那須から話の大體は聞いてゐるが……あの眞黑の女は今どこにゐるのかね。」

「あの女は、目下東中野をさう遠く離れてゐない、東郷感化院にはふり込まれてゐる……醫者達が醫學上から彼女を研究するといふやうなわけで……しかしだれにも彼女を見せないといふことを聞いてゐる。」

「では明朝九時に出社します……遊船の用意はいつでも出來てるから、高田と那須の兩君は隨意に乘り込んで呉れ給へ。」

「隨分御馳走になつた……では失敬。」

今日東新聞社のすべてが立去つてしまつた後、大河内は獨り居間の安樂椅子に體を埋めて、ジョウジが命令に依つて探し出して來た日東新聞を一枚一枚丁寧に見て、今日までに顯はれた殺人事件の跡を辿つた。

彼は靴をスリッパに穿きかへた。彼はジョウジに「お湯の用意」を命じた。

第二章　紙切れの文字

大河内はジョウジの與へた戸のノックで朝七時に眼を醒したが、直ぐ飛び起きなかつた……彼は起きる前の二十分をふかふかの蒲團のなかで味ふといふ習慣がある。彼は今朝もこの習慣に服從して、昨夜のことをいろいろと考へ、何だか怪奇なロマンスの世界が眼前に浮びでて自分だけがその祕密を開ける鍵を握つてゐるやうに感じた。そしてその世界は自分の來るのを今や遲しと待つてゐる、山雨來らんとして風堂に滿つといふ言葉があるやうに、自分の現出を迎へる雰圍氣が既に濃厚になつてゐるとさへ思つた。もとより今度の殺人未遂の問題を解決して明瞭にすることはさう容易でない、或は不可能かも知れないといふ疑念もないではなかつたが、その不可能を突破する所にいふに言へない快感があると思はざるを得なかつた。彼は自分に「ロマンスとは何だ」と尋ねた。そして彼は自分に答へた、「不可能を可能ならしめる　これ卽ちロマンスなり……ロマンスは可能と不可能から生みだす道程の記錄に外ならない。」

彼は七時半の音を聞いて寢臺を飛び降り、寢卷のまま浴室へ行つて顏を無造作に洗つた。彼が部屋の洋服簞笥を開けると綺麗な服がずらりと竝んで引掛つてゐる……中から彼は一番粗末なセビロを拔いて體に着けた。そして帽子も變色しかかつたやうな烏打ちをかぶつたまま、彼は朝飯も取らずに急いで外へ出た。彼は新聞社最寄の安いレストランでオムレッと珈琲一杯の食事を取らないと、社會部

記者の心持になれないと思つたからである。日東新聞社は京橋に近い銀座の裏通りにあつたので、彼のアパートメントから歩いて二十分とかからない距離の處にある。彼は豫定通り簡單な朝飯を記者時代馴染のレストランで食べ、ステ　キを振りながら新聞社の階段を上つた。

彼は今暫くめに社會部の編輯局に入つたのであるが、彼の鼻をついた印刷インキの臭氣が「よく歸つて來た」と耳語するやうに感じた。彼はこの臭氣こそ生きた世界の肌から出るのだと思ふと、彼の脈搏が不思議な新鮮味を加へて來るを感じた。そして彼は、以前衣食のためここへ出入した時とは打つて異つた新しい感じを覺えて、今更ながらこの變化に驚かざるを得なかつた。彼は今初めて記者生活の快感を味ふのだと心の中で思つた……ここそ日本といふ世界の主腦部で、日本人生活の罪惡も善も直に響いて來る最も重要な本部であると思つて、假令一週間といふ短い間でもここに座席を持つといふことは愉快であると自分を祝つた。彼は編輯局を見廻はして、高田と那須の兩人がそれぞれ自分の席を綺麗に取り片附けて置いたのを見出した。彼はそのいづれの椅子に腰を下したらよいかと思つてゐると、部長の横井勉が部屋へやつて來て彼に聲をかけた。

「昨夜は御馳走でした……すぐお茶の水事件に着手して呉れ給へ。僕は君の手腕に信頼してゐる。編輯長のこの事件へ力の入れ方は非常なもので、今少し前に誰が擔任者だかを聞いた位だ。僕が君を見込んで臨時雇につたと答へた時、編輯長は滿足の微笑を洩した。なかなか困難な事件だが、いふまでもなく骨折りがひがある。君、努力して呉れ給へ。」

側にうろついてゐた少年の給仕は、「部長がまた例の手で部下を煽ててゐる。」といつたやうな顔付でにやりと笑つた。少年給仕は編輯長が近頃ゴルフに熱中してこの數日間は鎌倉のリンクへつめ切つて、とんと社へ顔出しをしないことを知つてゐるのである。大河内も横井が出鱈目を連發して働かせる癖があることをよく承知してゐたが、かう話しかけられたことを嬉しく思つた。

「もち論大馬力をかけて着手します、安心し給へ。」

彼はかういつて、前記の少年給仕に命じて電話帳を持つてこさした。彼は東郷感化院の電話番號を調べた……無論彼は問題の眞黒の女に面會することは容易に成功しないことを知つてゐる。然し機會や運命といふ神祕的な奴は、不思議な一寸見て詰らないと思はれる一角から顯はれないものでもないと彼は思つた……そこで彼は無駄だとは思つたが、先づ手初めに東郷感化院を訪問しようと決心した。そしてその前に電話をかけて、どういふ樣子だか探つて見るのも必要だと彼は思つた。彼は電話帳で調べた番號を呼んで感化院の事務室をよび出した。

「もしもし、あなたは東郷感化院ですね。あなたの所の面會日はいつですか？」

「火曜日です。」と事務員は答へた。その聲は打切棒であつた。

「僕は日東新聞社の大河内といふものです。僕は重要な用件があつてあなたの所の患者……或は宿泊人かも知れませんが、兎に角あなたの所にゐる人に面會したいのです。」

「それや誰のことですか？」と事務員は答へた。

「あなたも御承知でせうが、新聞に出てゐる眞黑な女の人なのです……一つ會はせて呉れませんか？」
「駄目です、面會謝絶ですから……」
「どうあつても駄目でせうか？」
「くどいですね、日東新聞社では面會謝絶のことを承知してゐる筈です。」
「それや承知してゐますが……あの女が一言葉も話さない、或は日本人でないかも知れないといふのだから、此方から世界各國の話に通ずるものを送つて、一つ話させて見たいと思ふのですが。」
「そんなことをしたとて無駄です……今非常に忙しいからこれで失禮、左樣なら。」
かういつて東郷感化院の事務員は電話を切らうとしたので、大河内はあわてて、
「もしもし一寸……親戚のものでも訪問は許されませんか？」
「親戚のものといつて、あの女の身内をいふのですか？」
「さういふ譯ではないのです……あなたの所の一般の規則としてですね。」
「許可證を持つた親戚のものと、聖書朗讀會の人々だけが許されてゐます。」と事務員は面倒臭いといつたやうな聲で答へた。
「所でその聖書朗讀會ですが、それは何曜日ですか？」
「今日と土曜日、午前十時……何にしろ忙がしいのですからこれで失禮します。」
「左樣なら。」

大河内は今聖書朗讀會の會員が東郷感化員へ今日午前十時に訪問するといふことを聞いて小躍りせんばかりに喜んだ。彼は少くもこのことだけでも最初の成功と言へると思はざるを得なかつた。

彼は煙草を二三本ふかして後自動車を東京驛へ走らし、東中野への切符を買つて車内の人となつた。そして彼は今後の作戰計畫をいろいろと心のなかに描いた。

彼は東中野停車場へ着いた、そしてここが恐ろしい變化をしてゐるのに驚いた……停車場の擴大されてゐることと、その周圍が近代的に都會化してしまつたことを見て、彼が十四五年前にこの邊を二三度歩いたことのあつたことを思出し、「かうも郊外が變化してゆくとは思はなかつた。」と獨り囁いた。彼が十四五年前に見て置いた停車場最寄の生垣は一つもない……その替りに文化式安い西洋館まがひの商店が軒を竝べてゐる。彼が昔この邊を歩いた時は丁度今時分の季節であつたが、麥が青々として見渡す限り青疊を敷いた海のやうであつた。然るに今は家賃四五十圓がらみの住宅が竝んで、以前立派な木だと見上げた巨人のやうな欅の林も倒されてしまつてゐる。彼は東郷感化院への道を聞いた……教へられたままに落合の火葬場の前を過ぎた。道を眞直に取り坂道を上つて、一度來たことのある哲學堂への廣い道へ出て三四丁もずんずん行くと、右手の畑のなかに目振す感化院の建物が立つてゐたのである。

建物は黑赤の煉瓦三階造りで、堂々と周圍の平たい畑を支配してぬつくと立つてゐる有樣は決して好感の持てる代物でない。然し入口の門から建物への歩道は優に一丁もあつてその兩側に、今を盛り

と咲いてゐるチュリップがお伽噺の仙女のやうに列を組んでゐる。そして建物を左右にさしはさんで、見事な女松が幾本もすつきりとした姿を竝べてゐる。大河内はこの光景を眺めて、これは日本離れをしてゐると感じた……「ああ、いい場所だかういふ所に精神病者を置くのは勿體ない。」と彼は思つた。然し「彼等もかういふ場所で靜養したならぼ普通の狀態に復するであらう。」と彼は思ひかへした。所で彼は今入口のベルを鳴らしてからかういふものだと名乘つたならぼ、門前拂ひを受けることは知れてゐると思つて思案に吳れた。

すると入口の重い樫か欅で造つた大きな一枚戸がぎいと開いた。そしてなかから古風な老人が顏を顯はした……大河内は咄嗟の思付で彼に接近し、如何にも馴々しい聲で彼にいつた。

「お早う御座います、もう聖書朗讀會は始つてゐますか？」

大河内は老人に彼が如何なる人間であるかを考へる餘裕を與へなかつた……實際に、彼も聖書朗讀會の會員であると思ひこませたに相違ない。老人は戸を廣く開けて彼をそのなかへ入れた。大河内はどきどき打つ胸を推し靜め、極めて平然たる樣子を作つて靜かな歩みを運びホールに立つた。この時彼はこの建物が如何にも靜寂としてゐることを感じた……そして次の瞬間に、二階の部屋から洩れて來る聖歌の合唱の聲を聞いた。彼は既に朗讀會が始まつてゐることを感じて、眼前に立つてゐる老人にいつた。

「時間に少々おくれたやうですね……部屋はどこですか？」

「あなたは會員で御座いませう。」といつて、老人はよく見えない眼を瞬かせながら大河内を眺めた。

「忘れちア困りますね、よく以前はお目にかゝつたものですよ。」

「ああ、さうでしたか……もう耄碌してゐますから人樣の顏もはつ切りとは記憶しませんので……」

「どうして、お前さんはいつも御壯健で結構ですよ。」

「壯健どころか、體の節々は傷むし、もう駄目ですよ……今年取つて八十ですからね。」

「八十ですて……七十位にしか見えませんよ。」と言ひながら、大河内はポケットのなかから一圓紙幣を三枚取りだして老人に摑かました、そしていつた。

「何か買つてこようこようと思ひながらつい失禮してしまつて居ります。どうかこれで菓子なり林檎なり買つて下さい。」

老人は有難う御座いますといつてお辭儀をした、そしていつた。

「それでは突當りの段々をお上りなすつて、左手の最初の部屋へお入り下さい……そこで皆さんがお集りになつてゐます。私は御案内が出來ません、何分にも脊骨が傷んで仕方がありませんから……」

かう老人は言ひすてて入口の戸をぱたんと閉めて、外へ出て行つてしまつた。

大河内は今拔足さし足して、恰も餌食に忍び寄る豹か何かのやうに靜かに靜かにとホールを階段の方へと歩いた。彼は入口の側にある事務室から誰も飛びだして來て彼を咎めなかつたことを思つて、

「全く天の助けだ。」と喜んだ、そして「こんな奇蹟はまたと有るまい。」と心のなかで叫んだ……彼

は階段をしづしづ上りながら「兎に角この不思議な事件の第一關門を目出度とつ破することが出來た。」と思つた。そして彼は自分ながら自分の大膽な行爲に驚くと共に、思つたより自分の態度に餘裕があることを喜んだ。

彼は今階段を上り切つた……左手最初の部屋の戸が廣く開いてゐる。彼はその中をそつと覗いた。彼の目は今しも部屋のずつとの奥から竝んで出て來る婦人連とばつたり出會つた……彼等は二階の部屋で聖書を讀んだり讃美歌を合唱したりする仕事を終つて、その最後の部屋から出て來る所である。これ等の婦人連のなかには一二人若い女がゐないではなかつたが、概して三十五六から四十へかけての不器量の奥さんばかりであつた。中以下の耶蘇氣違ひの連中であることはいふまでもない。彼等は神の力と讃美歌の功德で精神病を直してみせると力んでゐるお目出度屋である。今その先頭に立つて連中を引卒して來る女は、もち論その指圖者とでもいふのであらう、年も一番上なれば容貌の不器量さ加減も頭拔けてゐた。然しどこか人好きのするやうな柔和の感じを與へる婦人であつた。

大河内はこの婦人に接近していつた、

「奥さん……」

彼は大膽にもかう彼女を呼びかけた、そして先方の出やう一つで、どうとも臨機應變にやつて退けようと思つた。彼は相手を飲んでかかつてゐる。彼としてはこの場合これ以外の方法がなかつたのである。

「ようお出下さいました、ほんとに嬉しう御座います……私はすつかりあなたをお見それ申しまして どうぞお許し下さい。」と婦人は早口に答へた。大河内は心のなかで、「誰かを待つてゐてその男に僕を間違へたらしい。」と思つた。

「私は大河内です。」と彼はいつた。

婦人は直ぐ彼を思ひだしたといつたやうな顏付で、彼にいつた。

「ああ、さうでしたか、私は安藤久子で御座います。」

かう大河内と安藤夫人とが應酬し合つてゐると、部屋から他の朗讀會員がごろごろ出て來た。夫人はこれ等の人々へ振りかへつて、微笑みながらいつた。

「皆さんに御紹介いたします、このお方が大河内さんです……」

そして夫人は會員の名前を一々喋べり立てた。大河内は輕く會釋して好加減のお座なりを答へてその場を濟ました。藤井夏子とかいつた一番彼の近くにゐた色の黑い婦人は、如何にも馴々しい言葉つきで、彼に小さい聲でいつた。

「大河内さん、ほんとに今日は結構な集りで御座いましたわ。あなたももう少し早くお出下さるとよう御座いましたのに……だが、三階の仕事はこれからですから、どうぞ御一緒にお願ひ申します。」

大河内はこの時、狐に抓まれたといふ場合の感じはかういふものであらうと思つた。彼はまた「かういふ工合に事柄が都合よく運ばれてゆくのは全く不思議である。」と喜んだ……なぜならば、彼がこ

の會員連と一緒に部屋をぐるぐる廻つてゐるうちに必ずや問題の眞黑の女に出會ふであらうと信じたからである。然しかく自分が耶蘇信者に問違へられて、それに成り濟してゐるといふことは、いふまでもなく彼に大きな苦痛であつた。彼は實際に逃げだしてしまひたいとも思つた。若し彼が逃げだしたならばどうなる……「それでは萬事がぶち壞はしである、何の面目あつて社會部長横井に顏を會はせんやだ。」と彼は心のなかで繰りかへした。然らば芝居をして通してしまふかといふに、それも彼に十分な確信があることは言へない……「どうしたらよからうか！」と大河内は心のなかに惱みながら、會員の最後にくつ付いて三階への段々を靜かに上つて行つた。

彼は「兎に角安藤夫人だけに人間違ひであるといふことを斷つて置かう、萬一ばれる場合があると すると、その方が好都合であらう。」と思つて、階段の天邊へ着いた時、肩を竝べて上つて行つた夫人に、大河内はかういつた。

「奥さん、あなたは人間違ひをしてやしませんか？　私は實際……」

安藤夫人は彼の言葉を遮つて、古風な束髮に結んだ頭を振りながら叫んだ。

「いえ、どういたしまして、御心配には及びませんよ……あなたがお出下さいましてどんなに嬉しいか知れません。」

夫人がかういふ得體の知れない意味の曖昧な言葉を喋つたので、大河内は「彼女は、自分に人間違ひをしたことを感附いてはゐるらしいが、會員の手前知つてる人で推し通したいのだ。」と思つたが、

再び夫人に話しかけた。

「あの實際、奥さん、私は日東新聞の社會部記者なので……」

またもや夫人は大河内の言葉を遮つて彼にみんなを喋らせなかつた。

「そんなことはどうでもいいのですよ、私よく承知して居ります……ほんとにお出下さいまして有難う御座いました、これで私はすつかり安心して居ります。」

そして夫人は側の藤井夏子孃をかへり見ていつた。

「ほんとに大河内さんに感謝しますわね。」

「さうですとも。」と夏子孃は相槌を打つた。

夫人は今會員のすべてが階段を上り切つて最初の部屋へ入らうとするのを見て、「みなさん聖書と讃美歌の本はお持ちでせうね。」と大きな聲で叫んだ。そして大河内の方へ振り向いて輕い會釋をしながら、いつた。

「どうぞお入り下さい。」

「有難う。」と彼は答へて會員の後につづいて部屋のなかへ入つた。

部屋は三十疊以上も敷けさうな大きなもので、床には粗末な赤い薔薇の模樣がついてゐる段通が敷いてあつた。そして壁紙にもまた青や紅の西洋紙を圖案化した模樣が一面に付いてゐた……かういふ言はば惡どい裝飾を部屋に施した理由は、恐らく陽氣な色彩の影響で精神病者の憂鬱を少しでも輕く

しようといふにあるに相違ない。部屋の寄寓者即ち患者の數は十二名であつた……いづれも佛頂面した陰氣臭い女共であつたが、どこか滑稽じみた感じを人に與へた。今どやどやと入つて來た訪問者を見て、彼等は一齊に驚いたやうな眼を見張つたが、その眼が一種異樣の眼でまるで光澤のない硝子のやうであつた。なかで一番年嵩ぶつたでぶの女で、髮に赤い簪をして氣取つてゐる一人が、素早く立つて會員を迎へ大きな聲で「敬禮」と怒鳴つた……この聲に應じて他の者が皆揃つて立ち上つた。そして彼等が敬禮を終ると、なかには鼻歌をうなり始めるものもあつた。また鼻をぴよこ付かし揶揄ひ面を向けるのもあつた。またなかにはぐるつと尻を此方へ向けて、何かしきりに考へ込んでゐるのもあつた……大河内はこの光景を見て、「これは何とも言へない氣の毒な見物だ。」と思つた。彼は小さい人形をしきりにあやしてゐる女を見て、これは子供をなくした結果その氣が狂つたのであらうと想像した。また彼は顏を隱して何かこそこそ書いてゐる女を見て、これは戀人に捨てられ或は死なれてもまだ生きてゐるものと思つてつけ文しようとしてゐるのだらうと想像した。

彼はこれ等の狂女と離れ部屋の一番の隅にぽんやり椅子に腰掛けてゐる女を見た……「問題の眞黑の女だ」と彼は思つて、飛びあがらんばかりに喜んだが、この感情を人に感付かれてはとぢつと平靜を裝つた。この女の體格を見ると、實に驚くべく發達したもので、肩幅も非常に廣く、胸部の豐かさから手足の長さに至るまで尋常の女でないと感じられた。その年輩は恐らく二十五にはなつてゐないであらうと思はれた……歩かして見たならば必ずや柔軟輕快な身振りをするに相違ないと大河内は

想像した。彼はこの女の皮膚が如何にも眞黑で、「眞黑の女とはかういふのをいふのであらう。」と思つた。彼は彼女の大きなぎよろとした眼に注意して、直にこれは日本人でないと感付いた……「不透明無光澤の寶石に比較される眼だ。」と心のなかでいつた。

彼女は大河内をぢつと見詰めた……彼女は彼が自分に特種の使命を持つて來た男だと直感したに相違ない。

「皆さん、讃美歌から始めませうか？」と安藤夫人は叫んだ……その聲は音頭取の聲らしく響いた。

「お祈りは拔きにして？」と會員の一人が大きな聲で、だれにともなく尋ねた。

「ああ、さうでしたね。」と夫人は柔順に答へ「それでは私が、」といつて彼女は喩聲で簡單に神に祈禱を捧げた。そして彼女はいつた。

「さあ、これから讃美歌ですが……どうか皆さんにそれを撰んでいただきたい。だが一寸お待ち下さい……この本には落丁があるやうですから。皆さんの本は如何ですか、一つお調べ下さい。」

會員の連中が讃美歌の本を調べて頁をぱたぱたやつてゐるうちに、大河内は安藤夫人に接近して行つた、そしていつた。

「奥さん、彼處にゐる女に話したいことがあるが、いかがでせう、許して貰へませうか？」

夫人は瞬間的に迷惑千萬なことを仰るといつたやうな素振りをした。然し彼女は自分に話していけないと拒絶する權利がないと思つたものか、どうか御隨意にといふやうな意味を目に言はせた、そ

して讃美歌の本をオルガン臺に載つてゐるものと取替へるため、會員連の場所を離れた。彼女はオルガンの前に腰をかけて歌の止まるのを待つてゐたオルガン彈きの女と話をし始めた……會員は讃美歌の本をぱたぱたさせたり、がやがや話などをしてゐる。大河内は手早くいつの間にか問題の女の側に坐つてゐたのである。

日本人の目でも西洋人から見ると、「驚きを表現しない目だ。」と言はれてゐるが、問題の女卽ち眞黑の女の目と來ると、それはそれは靜寂不動といつてい、目であつた……然し大河内を眺めて、何かしら尋ねて見たいといふ表情が顯はれてゐた。彼女は確に力强い感激を覺えてゐたに相違ないといふのは、彼女が兩手を組んで膝の上にぢつと戴いてゐるので知れた……その兩手の恰好の見事な事は如何なる人をも驚歎させるに足つた。彼の手ばかりでなく、その體全體の形が人に古典的の快感を與へ精巧優美の文字でも批評し盡すことが出來ない。顏がまた感性の鋭敏と生れの氣高いことを物語つて平靜な沈着に滿ちてゐた。大河内は「暮斯敦や紐育の美術館で見る希臘彫刻の感じだ、生氣の驚くべき靜寂味がある。」と感じた。彼はまた心のなかで思ひかへした、「希臘彫刻の感じといふよりは寧ろ印度の佛像から來る感じに近いかも知れない。」然しこの女は印度人でない。また布哇の土人としては餘りに纖細過ぎ理智的に敏感すぎるの感がある……どこの人間であらうか。この疑問には誰も容易に答へることが出來ない。兎に角不思議な女である。人は古への偉大な彫像に接近して立つと異樣な國に直面してびつくりするといふ感じが深いとあるが、正に大河内はさういふ感激に打たれた。

然し彼はこんな工合に彼女の美にのみ打たれてゐてはならないと氣を取り直した。若し彼女が魔法を使つて神祕の網を彼に投げるならば、彼はそれから巧妙に逃げねばならないと思つた。彼はただち實に際問題に取りかかつて事件の眞相を探りださねばならないと決心して、かう彼女に低聲でいいかけた。

「あなたを助けようと思ふ……助けさせて下さい。第一にあなたの名前を聞かねばならない。あなたは誰ですか?」

彼女は無言であつた。

大河内は重ねていつた。

「あなたをお助けします。僕にあなたを助けださせて下さい。」

彼女は眼に困惑といつたやうな表情を見せたが、何の一言葉も發せずにただ眞黑な頭を振るのみであつた。

大河内は更に熱心をこめていつた。

「あなたの名前は、あなたの名前は……どうぞ聞かして下さい。」

彼女は前のやうに無言であつた。

大河内は焦れつたく感じざるを得なかつた……然し怒つてはぶち壞しであると思つてもう一度柔和な聲で、彼女にいつた。

「あなたの家はどこですか？　答へて下さい……なぜ御返答して下さらないのですか？」
彼女は依然として無言であつた。そして眼ばかりぱち付かせ、頭のみ振るだけであつた。
「あなたの家は東京ですか……東京のどこですか？」
彼女はこれに對しても何の返答も彼に與へなかつた。
然しこの瞬間に彼女の眼が異様に光つた。大河内はそれを眺めて驚いた。彼女はこれまでぢつと膝の上に載せて居つた兩手をあげ、何か訴へる所があるやうな表情をした……そして手早く側にあつた讃美歌を取りあげた、そしてその頁の端をベリッと裂いた。彼女はその上に物を書くやうな眞似をした。大河内はそれを見て取つて、ポケットの鉛筆を直に彼女に渡した。彼女はこの紙切れの上に何か書き始めたのである。
大河内は胸をどきどきさせながら、彼女の書き終るのを待つた。
彼は氣がつかない間に讃美歌が最早や始まつてゐたことを知つた……調子の狂つたオルガンは病犬のやうな喩聲を出した。そしてそれが一本調子で不景氣極まる合唱と一緒になつて、全く以て「親不考の音樂」を奏でたのである。彼は「こんな憂鬱な催しで、精神病者が常の狀態に複してたまるものか？」と思つた。更に彼は「普通の人間が精神病者にならないならば、それこそ天下の奇蹟だ。」と思つもた。彼は歌つてゐる會員の顏を見廻した……彼等のあるものは大河内の不思議な行爲を非難するかのやうな皮肉な微笑を洩してゐるのを見て取つた。彼は彼等の歌につれて口をもがもがさせて歌

つてゐるやうな眞似をしてゐる所謂精神病者の方を眺めた……彼等も驚いたやうな顏付をして大河内の顏をぢつと見詰めた。藤井夏子嬢はどうかと見ると、これも非難を浴びせるやうに思はれた。オルガンの側に立つて合唱の音頭を取つてゐた安藤夫人にも、疑ひもなく攻擊の鋭いものがあるのを大河内は見たのである。この時大河内は實際に社會部記者の職務はつらいものだと思つた……「社會部記者は野蠻人でなくちや成功しない、禁止の二字を平凡で踏みにじる勇氣がなくちや何の祕密も摑めない……自分は醉狂にも事を缺いて、何だつてこんな問題に關係し出したのであらうか、賴まれもしないことを自分に買つて出るなんて馬鹿の骨頂だ。」とも思はない譯にゆかなかつた。
今讃美歌は一通り終つた……オルガンの側に立つてゐた安藤夫人は讃美歌の本をオルガンの上に置いた、そして會員の席の方へ歩いて來ようとした。大河内はそれを見て、つかつかと立ち上り、夫人の側へ歩いて行つた。彼は自分は別に人から疑はれるやうな不埒な行爲をしたのでないといふことを立證したいとも思つたか、大きな聲をして夫人にかう言つた。
「實に結構な讃美歌でした。これもあなたの指導の宜しきを得た結果であらうと想像します。何事でも訓練第一です……會員が上手なことは何の不思議でもありませんが、患者までが合唱の仲間入りしましたことは、非常に私を感激させました。」
夫人はこの言葉が當座の追從に過ぎないことを知つてゐたが、それでも惡い氣持はしなかつた。それで彼女の感情は自然に柔かになりそのしかめ面も穩かになつた。所へ當部屋の患者を監督する相當

の婦人がつかつかと大河内の側へやつて來て、だしぬけに叱責がましく彼にいつた。
「あなたは當感化院の規則を御承知でないやうです……如何なる訪問者でも患者とは口を聞いてゐけないことになつてゐます。」
大河内は丁寧にお辭儀をした。彼は頭をかきかき大きく笑つて、何の返答もせずに有耶無耶に胡魔化してしまつた。そして彼女の非難を逃ける積りであつたか、當感化院は米國のそれに比して遜色のないことを誇張的な言葉で喋り立てた。
「私は曾てブルークリンの精神病院を訪問して面白い經驗を得たことがあります。」と大河内は言葉を續けた。「日本に於けるこの種の患者はどうであるかを知りませんが、米國では失戀の結果精神的平衡を失ふに至つた女が多いのです……私の面白い經驗もこの失神病者に追ひかけられた物語なのです。私が今申しましたブルークリンの精神病院を訪問しました所、ある患者が私を見るなり、私に抱きついて私を接吻しました。そして「おお、ジミやよう來て呉れた。毎日毎日お前を待つてゐたわ。」と叫んで、私を離さなかつたのに驚きました……どうしても私は逃げることが出來なかつたので、この狂女に抱かれたまま目をつぶつてぢつと我慢してゐました。」
「それはお困りでしたらう。」と安藤夫人と監督の女は聲を揃へて叫んだ。そして彼等はいつた。それからどうなさいました。」
大河内は答へた。

「いや、この後をお話してはつまりませんからここで打切りませう……所で當院の患者達を見まするとと皆キャラコの制服を着けてゐるやうですが、箇々別々で思ひの着物をきさせてはどうでせう。外國では狂人にも箇性を尊ぶといふのですか知りませんが、隨分氣取つた服を着てゐる精神病者が病院にころがつて居ります。」
すると監督の婦人は大河内に向いてかう言ひました。
「當院では價格の安いことと清潔を主としてキャラコ服を採用してゐます。價格のことは別としまして、服は毎週規則として洗濯することにしてゐます。そして不幸な患者達に清潔といふ意味を了解させるのであります……この清潔といふことを彼等が了解して來ますと、はや彼等の頭腦が常態に複して來たのだといつて差支へがありません。」
「なるほどあなたのお說は如何にも尤もで御座います。」と大河内は彼女の言葉を遮つて言つた。「然しあのキャラコ服はどう考へても美的でありませんね。御承知の如くこの部屋の患者のなかにも中々の美人がゐるやうに見受けます……彼處にゐる眞黑の女を御覽下さい。古代の彫像に見るやうな古典的な美を悉く具備してゐるぢやありませんか。かういふ女に一つ氣取つた服を着せてやりたいとさへ思ひます。所で私はあの女と話しました關係上、一言の挨拶なしにわかれるのも失禮ですから……一寸御免を蒙らさせて頂きます。」
かう大河内は言ひはなつて、つかつかと眞黑の女の側に接近してその手を握つた。彼女はすばしこ

く彼の手を握り、かくして、その中に丸めた紙の切れをそつと入れた。この驚くべき早業をだれも見てゐなかつたのである。大河内は今手のなかにそれを握つたまま、彼女の側を離れた。

彼はこの紙の玉に何か書きこんであるだらうと思つたが、勿論それが想像される筈がなかつた。若しその中に古代の形象文字か何かが書いてあるならば、どうしてその祕密を解すことが出來やう……かう考へて來ると、大河内は折角問題の神祕の扉を開ける鍵は與へられたがその使用法を知らないと同樣であると思つた。彼は一刻も早くこの皺くちやになつた紙を擴げて見たいと思つたが、人々の前でそれが出來ないことを焦れつたくもどかしがつた。

彼は自分の名前が呼ばれるのを聞いて頭をあげた……安藤夫人が會員に向つて喋つてゐるのに氣がついた。

「皆さん、今日は大河内さんが來てお出になつて居ります。大河内さんが讃美歌の獨唱をして下さいますから、今改めて御紹介いたします。」

かう夫人が言ひ終ると大河内の手を引張つて、オルガンの側に立たせた。この時大河内は最初彼が階段の上で夫人を見た時、夫人が「お出下さつて嬉しい」といつた言葉を今初めて了解することが出來たのである。そして今日恐らくこの催しに來る筈になつて居つた男は讃美歌を唄ふ商賣人であつたと感じた。それから夫人が人間違ひをしたことを無理槍に隱して到頭自分を讃美歌の歌ひ手にしてしまつたことを、隨分亂暴だと思つた。然し夫人には恩がある……若し彼女が人間違ひをして呉れなかつたならば、自分が眞黑の女から祕密の紙切れを受取ることが出來なかつたのである。大河内は少くも感謝の意味で、夫人の強ひるままに讃美歌を一つ獨唱しようと決心した。彼がオルガンの側に立つと、會員連は拍子をぱちぱちと送つた。そのあるものはにこやかに微笑し彼の歌ひぶりを想像してゐるやうにも見えた。

大河内は安藤夫人や會員に向つていつた。

「私はとても歌が唄へる人間ぢやないのです……困つたことになりました。實は許していただきたいのですが、是非共といふことならば承諾するより外はありますまい。」

人々はこの言葉を單に彼が遠慮してるのだとのみ考へて、實際に彼が窮地に立つてゐる事を想像もしなかつた。然らば彼が全然唄へない男かといふに、さうでない、彼に多少の自信がないでもなかつた……といふのは、彼が渡米前の一夏を箱根の湖水で催された聖書講習會で暮したことがある。無論聖書の研究が目的でなく、そこへ列席する米國人に接近して英語の會話を勉強しようと思つたからであつた。然るにその結果はどうであつたかといふに、英語の發音などは一つも立派にならずに二つ三つの讃美歌を覺えたに過ぎなかつたのである。彼の聲はバリトンといふものに偶したといつても隨分怪しいものだが、少年時代から唱歌が得意であつた……兎に角豐かな聲の所有者である。そこで彼は今箱根の講習會の昔へ歸へる、夜船を湖水に浮べてたれ憚らず大きな聲を出した古い經驗を呼び起して、清水の舞臺から飛び下りた決心して讃美歌を一つ唄つた。いふまでもなく學校の唱歌じみた歌ひ

振りで、寧ろその唱歌は抹香臭くしたものに近いものであつたが、思ひ切り大膽に唄つたせゐか、聞いてゐる人々はみな感激したらしく見えた。大河内は心のなかで切羽詰れば大慨のことはどうにか遣つて退けられるものだと思つた。

安藤夫人は彼に近寄つていつた。

「大河内さん、大變に結構でした、非常にいい聲を持つておいでになります。いづれ東京の朗讀會本部からお禮狀を差上げるでせうが、私から厚く感謝いたします。今日は生憎本部の書記長がお見えになつてゐませぬが、若しおゐでしたら、さぞお喜びになることと思ひます……ほんとに有難う御座いました。」

「どう致しまして。」と大河内は答へた。

彼は夫人が自分を讃美歌の專門家にしてしまつたことを妙に擽つたく思つた。然し彼は今更自分がそんな人間でなく、日東新聞の社會部記者であると一同に白狀したとて始まらないと思つた。そしてここに愚圖愚圖してゐるより一刻も早く逃げだした方が利口であらうと氣が付いた。そこで彼は一同に輕い會釋をしていつた。

「まことに下手な歌をお聞かせして濟みませんでした。私は一寸用事がありますので、一足先きに失禮させていただきます。」

彼は部屋を出てほつと一息ついた。安藤夫人と夏子孃は彼の後から直ぐ部屋を出て來て彼を玄關まで送りださうとした。大河内は「いえ、それには及びません。」と數度も辭退したけれども、彼女等は聞き入れなかつた、そして彼の後を續いて階段を下りて來た。

大河内は一番下のホールまで來ると、そこで事務室からひよつくり出て來た一人の男に出會つた。

「あなたは何の御用事で。」と彼は大河内を睨みつけながら詰問した。

大河内はどぎまきして卽答することが出來なかつた。

事務員は二度目の矢を彼に放つた。

「あなたは今朝日東新聞から電話をかけた人でありませんか？」

大河内は度胸を据ゑ、冷然として答へた。

「いいえ、私は朗讀會から招かれた歌ひ手です……私は三階で唄つて來ました、今へ歸る所です。」

事務員は怪しい奴だとは思つたが、さりとてこれを否定することも出來なかつた。

安藤夫人と夏子孃は今玄關の戸を開けて外へ出ようとする大河内を見て、ホールから彼に「大河内さん、左樣なら有難う御座いました。」と叫んだ。

「左樣なら。」と大河内は彼等へふり向いて叫んだ。

彼は感化院のとば口の門を出て、もと來た廣い道を走るやうに歩いた……彼は不思議な大成功に自分ながら驚かざるを得なかつた。「ああ、天の助けだ。」と彼は心のなかで二度も三度も繰返さざるを得なかつた。

彼は人の通らない隙を見はからつて道ばたに立ち止つた。そしてポケットから眞黑の女が彼に手渡した皺くちやの紙切れを取りだした。彼はそれを讀んだ……ただ一字の名前と宿所が書いてあるのみであつた。

「深川區新網町十九番地タビ゛ト。」

第三章　不二子嬢

大河内は東中野から東京驛への電車を須田町で下り直に圓タクに乘つた、彼はどこへ行くのであらうか……彼は今深川新網町十九番地が所在してゐるかを確めようとするのである。

彼の自動車は兩國橋から濱町河岸を走る、新大橋を渡つて深川の區内に入つた。彼が以前日東記者をしてゐた時代にも彼にこの區内を踏ませるやうな事件は起らなかつた。實際彼は今初めてここへ入つたのである……彼は眼前に見るごみごみした喧囂な狀態と、昔蘆萩雜然たる水鄕を作つた芭蕉時代のそれとを比較して見た。彼は別に文字通ではなかつたが、普通の日本人並に芭蕉の句集を讀んだが故にふとこの比較論らしいものが彼の胸に浮かんだのである。彼は獨語した。「時代の變化は恐ろしい。昔の塵捨場や寂しい獵師町が今日かういふ雜然たる人間の町とならうとは誰も想像されないであらう……それに現に自分が近代的冒險のため自動車を乘り廻はしてゐることを考へると、四五年この方日本の變化は正に驚くべきものである。」彼はこんなことを獨語しながら新網町のとば口で自動車

を捨てた、そして十九番地を尋ねた。彼は到頭それを探しあてた……この邊は所謂貧民窟で、細帶一つで青白い顏のおかみさんが瓢簞のやうな乳房をたらして泣く子供を怒鳴つてゐる。襁褓や赤いメリンスの腰卷または木綿の襦袢などがひと塊となつて家の勝手口の道を塞いでゐる。然しタビットといふ外國人名の標札が懸つてゐる家はどうであるかといふに、これはまた貧民窟に不似合な二階建の西洋館であつた。この西洋館は必ずしも立派なものではなかつたが、通りへ面する窓にどこから來たとも分らないやうな不思議な模樣のカーテンがかかつてゐた。大河内は「タビットなるものは果して何物だらう。」と心のなかで叫んだ。

しかし彼の目的はただ新網町十九番地にタビットがゐるや否やを確かめるにあつたから、彼は今二安心して、そのまま以前の自動車に乘り、急いで帝劇裏のアパートメントへ歸つたのである。彼はバレーのジ゛ウヂを呼び、狀袋と書簡箋とを取りよせ、不二子嬢の伯母さん福原貞子夫人宛の手紙を書いた。

「未知の私からあなたに手紙を差しあげる自由をお許し下さい。あなたは私がこの自由を決して亂用するものでないことを直に御了解になるであらうと信じます。私は最近にあなたの姪子さんを狙撃しましたあの眞黑の女に直接會つたものであります、そして私は一つの宿所姓名を手に入れましたが、これが恐らくすべての眞相を明かにする唯一の鍵ではなからうかと信じてゐます。然し私は今その宿所姓名を警察へ告げようと致しません。私の希望する所

はそれをあなた或は不二子嬢へお見せ申してこの後の所置を御相談したいと思ふのであります。どうか御都合のいい日と時間を直にお知らせ下さい……出來ることならば、私は直ぐにもお目にかかりたいのであります。そして御返事をこの使ひのものにお渡し下さい。」

彼はこの手紙をジョウジに命じてお茶の水文化アパートメントへ持たしてやつた。そしてジョウジにいつた、「若し御在宿であつたら直に返事を貰つてくるのだ、また御不在にしても、この手紙をアパートメントの事務所にのこしたりエレベーター・ボーイに渡したりしてならない。」ジョウジが手紙を持つて出て行つて了つた後、大河内は部屋のなかをあちこちと歩いた。彼の心はいふまでもなく冒險に對する特殊の好奇心とそれに附屬する不安とで亂れてゐるかのやうに見えた……彼は「福原夫人はどう返事するだらうか」と自らに尋ねた。「もち論直ぐ來て下さい」と答へざると得ないであらうと自分に答へた。彼は部屋の窓の側に立つてジョウジの歸つて來るのを今か今かと待侘びた。

ジョウジは歸つて來た、そして彼に「夫人もお嬢さんもいづれも御不在でした」と答へた。大河内は嚴しい怒つたやうな顏付をしてジョウジを睨付けた。

「ジョウジ、お前は夫人のお部屋まで上つて行つたか？」

ジョウジは簡單に答へた。

「いえ、エレベーター・ボーイが御不在と言ひました。」

「お前は到庭新聞記者にはなれないな。お前は立派な紳士かも知れない……つまり言ふがお前の缺

點だ……」

かう大河内は怒鳴つてから急に顏色を柔げた、そしてジョウジにいつた。

「お前もう一度御足勞だがお茶の水まで行つて來て呉れ。夫人のお部屋の戸のそばまで行くのだ……いいか、若し御不在ならば、ホールのどこかにうろ付いて、夫人の歸つて來るのを待つのだよ、分つたか？」

「承知いたしました。」

「御不在だつたら、いつまでも待つのだよ……分つたか？」

「はい、分りました。」

「四時にならうが六時にならうが、夜中にならうが……いつまでもだよ。」

かうジョウジは大河内に怒鳴られながら周章てアパートメントを後にした。大河内はふかふかの安樂椅子に體を埋めた、そして手に例の新聞紙を取りあげて讀むでもなし讀まないでもなしといつたやうな工合でゐるうちに、昨夜來の疲勞が出てうとうと眠つた。彼が一時の轉寢から目を醒すと、ジョウジはお茶の水から歸つてゐたのである。ジョウジは福原夫人の返事を取りだして、それを大河内に渡した。大河内はいきなりその封筒を破つた。

「だれが出て來たか？　……お前に丁寧だつたかね？」と彼はジョウジに尋ねた。

ジョウジは答へた。

「六十近い御婦人でしたが、何ともおつしやらなかつた。でも大縫物腰のやさしさうなお方に見受けました。」

ジ・ウジは帽子の芥や沙を服の袖で拂ひ、その袖をハンケチで拂つた。そして汚れたハンケチをぐるぐると丸めて彼はポケットのなかに入れた。

大河内は福原夫人の手紙を讀んで、急にそはそはしてゐた心持が落ち付いたやうに感じた。若し夫人が彼の希望を入れなかつたならば、今や彼の高まりつつある冒險的好奇心がどんなに一頓挫したか知れなかつたのである。

福原夫人の返事に、

「私はあなたの親切なお手紙を拜見致しました。私は厚くあなたに感謝いたします。今私の姪は外出中でありますから、どういふ風にあなたのお申出を考へますか不明でありますが、私としましては、若しあなたが今日四時半においで下さるならば、喜んでお合ひいたします。」とあつて、福原貞子と署名してあつた。

大河内はこの手紙から夫人が事務的な女であらう、てきぱき物を處理することの出來る人であらと想像した。彼は時計を見ると丁度四時であつたので、直に自動車を呼びそれに飛びのつてお茶の水へ出懸けた。そして夫人の言葉通り四時半に、彼は夫人のアパートメントを訪問した。

彼は直に應接間へ通された……彼は見廻はした、そして壁に餘りに澤山の繪が懸かつてゐるのを見

た。彼は心のなかで、「自分に繪のことは分らないが、兎に角妙ちきりんな物ばかりで恐らく專門家も批評が出來まい。」と思つた。それにまた彼は餘りに澤山の机があつてその上に種々雜多の骨董品ともいふ事の出來るやうなものが置いてあるのに驚いた。數物にしても無選擇に纂められたものか、その色合もまた寸法もまちまちであつた。何のことはない、この應接間は大河内に西洋の骨董店といつたやうな感じを與へた……彼は愉快な驚異を感じたと同時に、所有者たる福原貞子なる人の人格と趣味に關し少からない疑惑を覺えたのである。

部屋の床を見ると古代埃及の象形文字が書いてあるやうな石の四角な切れで敷きつめてあつて、これ等は古墳から發掘されたものだといつても、人はそれを疑ふことが出來ないであらう。また床を敷き詰めた石と同樣のパネルが幾枚もここやそこに置いてあつた。そして大河内が日本は勿論外國に於いても見たことのないやうな珍奇な骨董品が無數に轉がつてゐるのを見た……珊瑚の胸像といつても差支のない柔かい薔薇色の石から出來たものがある。大理石に似てもつと柔かい材料から刻まれた小さい立像がある、そしてこの純白の石が如何に柔かいかは、一寸觸つた指の跡さへそれに殘つてゐるので知れる。また彫刻した水晶を骨とした不思議な絹の團扇がある、それから寶玉の枠に入つた青銅製の手鏡がある。壁にかかつてゐるタペストリーには、大河内が見たり聞いたりしたことのないやうな草花や鳥が刺繍されてゐる。そして大きな水晶の鉢のなかには枯れた薔薇の花瓣や古い羊皮紙の卷物が入つてゐる。お伽噺の圖の藥品や化粧品の目方を量るかんかんのやうなものもあれば、手の取れ

た素燒のコップもあつて、このコップには桃の毳のやうな產毛が一面に附いてゐる。窓のカーテンを見るとそれがまた不思議な模樣と織方のもので、大河内は未だ嘗てこの種のものを見たことが無かつた。それからここそこに飾つてある動物の毛皮に、孔雀のやうな或は海草のやうな模樣があつて、またある毛皮に手を觸るとその柔かな感じはまるで絹のやうである。

然るにかういふロマンチックな部屋の雰圍氣をぶち破る近代的產物がある……卽ち米國製の置時計とか近頃流行の圓本とか縫物の仕事箱等である。大河内はこの安ッぽい不調和を見て面白くないと思つた……然し他面の豐かな異國情調に觸れて、彼は喜んでその生餌になつていいと思つた。

三四分間たつと次の部屋からこの應接間へ、六十がらみの婦人が出て來た、そしていつた。

「お待たせしまして濟みませんでした。」

大河内は立ちあがつた。

「どうぞお坐り下さい。私が福原で御座います……初めてお目にかかります。」

大河内は福原夫人を眺めた……彼はどういふ印象を彼女から受けたか。彼は夫人が事務的な女であらうとは想像して來たが、これはまた餘りに平凡な女らしく見えるのに驚いた。この應接間が素敵滅法にロマンチックであるから夫人を實際以上平面的に見えさせたのかも知れないが、大河内が應接間から受けた誑されたやうな感じと同じものを、彼は今福原夫人から與へられた……彼は「此應接間の所有者とは受取れない、その相當しくないこと夥しい」と思つた。第一夫人に表情がない、その

顏が鑄型でいつたやうだ。手を見ると兩方にごてごてと驚くべき寶石を嵌めこんでゐる……大河内は「夫人はただ澤山嵌めさへすればいいと思つてゐるらしい」と思つた。彼に夫人が着てゐる日本服の批評は出來なかつたが、少くも彼は「夫人は着物の選擇や着方に盲だ」と思つた。兎に角夫人が身につけてゐる裝飾品がしつこく合はないの感が深かかつた。彼女は長椅子に腰を下して、大河内の顏をじろじろ眺めてゐたが、彼が新聞の社會部記者であらうと內閣大臣であらうとそんなことはどうでもいいといつたやうな態度であつた……つまり彼女は箇人格に無關心な女であると思はれた。彼女に物に對する興味の冷やかな所があると感じられた。

彼女は語り始めた。

「大河內さん……さうあなたは仰いましたね、今回の事件には閉口させられました。あの時私が姪と一緒でしたなら、あんな事件は起らなかつたと思ひます。折惡しく私は姪と一緒に歸へることが出來ず、途中で私の顧問辯護士の御宅を訪問して奧さんの御病氣を御見舞ひしなければならなかつたものでしたから、あんなことになりました……姪を一人で歸へしたといふことは私の不注意でありましたが、姪にも注意の足りない所があつたと思ひます……不注意の隙を睨らまれたのですね。ほんとに都會生活は考へるとぞつと恐ろしく思はれてまゐります。」

夫人は溜息をついた、そして言葉を續けた。

「私はいつも姪にいふので御座いますよ、『不二や注意なさいよ、不注意がもとでどんな事件が起ら

ないとも限らない』……かう申しても、若いものは注意が足りないのですね。東京などに住んでゐますと、自分だけの注意に頼るの外ありません、それが一寸でも御留守になると災難がそれをつけ込んで襲つてまゐります。都會生活位恐ろしいものは有りますまい……實際を見ますと、人々が他人に頼つかかつて生きてゐて、その人々が自分の職責を十分に盡さないのですから、都會に事件の絶えないのは知れたことで御座います……ホホ、さうさう、あなたはあの眞黒の女を御承知なんでしたね。」

大河内は答へた。

「私は今朝眞黒の女に會ひました……」

夫人は彼を遮つて叫びました。

「どこでお會ひでした。」

「東郷感化院へ出かけまして、彼女に口をききました。」と大河内は答へた。

すると夫人は驚いたやうな顏付をして、叫んだ。

「あなたに飛びつきやしませでしたか？　それでも檻か牢のなかへ入れられてゐましたか？　眞黒の女とは一體どんな女でしたか？」

大河内はにやと微笑し、なるべく冷靜な態度を裝つていつた、

「いいえ、別に飛びつきも食ひつきもしませんでした……至つて靜かで、讃美歌を聞いてゐました。」

「讃美歌ですて？」と福原夫人は叫びながら、怪訝な顏をして大河内を見上げた。

「今朝感化院に聖書朗讀會が催されまして、私も會員と一緒になつて眞黒の女の部屋へ行きました。」

「その讃美歌を聞いてゐるといふのが怪しいのですよ、それがああいふ恐ろしい人間のいつもの手なのですよ。」

かう福原夫人はいつて、聲を一段と低くして言葉を續けた。

「私はいつも姪にいふのですよ、『危險人物だからとて亂暴物とのみ限らない、おとなしい人間に注意おしよ』と……實際眞黒の女はそんなにしをらしい樣子でしたか？　全く恐ろしい女ですわね。何か工らんでゐるのですね……さもなければ讃美歌なんて聞いちやいられやしません。」

夫人は少し間を置いて更に言葉を續けた。

「この世の中は工らみの穴ばかりで遣切れませんわね。殺人などはその一番ひどいのでせうが、文明とか文化とかいつて人の珍重するものも畢竟怪しい工らみの結晶なのですからね……それから眞黒の女が何をあなたにお話しましたか？」

「いえ、話したといふのでありません。」と大河内は答へた。「私が何と口をきいても一言葉も返答しませんでした、が、一寸書いたものを私に渡しました。それを今私がここへ持つて來てゐます。」

「さうですか、何か書いたものですて、怪しい呪か何かぢやありませんか？」

かう福原夫人は叫んで、更に言ひかへた。

「ああいふ人間は變な事をしますからね……私の弟も南洋へいつてゐますが、いろいろ怪しい習慣、

のことを聞かされました。姪を狙撃した女が全然日本人でないとすると、南洋の土人ぢやないかと思はれます。」

この時大河内の探偵意識がぴりりと動いた、そして夫人に尋ねた。

「あなたの御兄弟が南洋にお出になるので御座いますか？」

「はい、もう隨分長い間弟は南洋を旅して居ります。」と夫人は答へた。

「あなたの弟さんといふと、つまり酒井不二子さんのお父さんなんですか？」と大河内は熱心に乘りだしていつた。

「さうで御座いますよ、たつた一人の弟なんでして……もうかれこれ三年も會ひませんのです。」

「はあ、さうですか、して最後の通信をどこから御受取になりましたか？　……これが重大な點なのです。」

夫人は何故にそれが重大な點なのだか了解しないやうに見えたが、柔順に大河内に答へた。

「さあ、それは調べなければはつ切りとお答へが出來ません……それに外國の名前なんぞ、到底私には記憶されませんから。何でもヤクヰとかタクヰとか何とか言ひましたけ、一年ばかり前によこした手紙の宿所は……」

「さうですか？」と大河内はいつた。

夫人は自分の弟より不二子嬢狙撃問題のはうが重要であると思つたか、再び眞黑の女に立ちもど

つて、

「所で彼女のあなたに手渡したといふものは何ですか？」と大河内に迫つて尋ねた。

大河内はポッケットのなかから小さい紙の切れを取りだした。そして彼はいつた。

「これなのですよ、多分あなたにはこの町名をお知りにはなつてゐないでせうが……深川區新網町十九番地で、名前はただタビットとしてあります。」

「へえ。」とばかり福原夫人は叫んだ。

大河内はいつた。

「このタビットといふのが新網町十九番地に住んでゐる人の名前だらうと思ひます。私はかういふ番地があるかないかと確かめねばならないと思つて、今日新網町へ出かけました、そしてそこにタビットの家らしいものが實際にあるのを見て來ました。私はその家へ入つて見ようかと思ひましたが、兎に角あなたに御相談をしてからにしようと思つて、そのまゝ引かへして來ました。」

「して見ますとこのタビットといふものが事件に關係がありさうですね……所でタビットといふものは何物でせう。日本人でないに相違ないとしますると外國人であるとなつて來ますが、不二子の狙撃事件に外國人が關係してゐるとすると、問題は隨分重大視されてまゐりませう。ああ、大變なことになつて來ましたわね……どうしたらいゝでせう。私の夫は遠慮會釋のない人でした……今は故人ですから何にもなりませんが、若し私の夫が存命でしたならば、きつと感化院へ出かけて直接あの女に會

ひ、その喉首を摑んで日本語で白狀させるに相違ありません。いつも問題が起るたび毎に私は夫を思ひださないことがありません……大河内さん、あなたはこの問題をどういふ風にしたらいゝと思ひますか？　あなたの御意見を聞かして下さい。」

かう福原夫人はいつた。それに對して大河内は何とも返答をしなかつた。すると應接間へ六十五六歲の紳士が案内なしに入つて來た。彼は腰が少々曲つてゐるやうに思はれたが、中々いゝ血色をしてゐた。顏の皮膚もたるんで居らず眼光にも疲勞の點が見出されなかつた。

福原夫人は立つて彼を迎へた。そして夫人は大河内の方へ向いていつた。

「大河内さん、このお方は後藤さんといふ福原家の顧問辯護士です……」

そして後藤へ振り向いて、

「後藤さん、このお方は大河内さんといふお方です、大河内さんは不二子の狙撃問題に關しお話しいらつしやる所なのです……あの恐ろしい眞黑の女に直接お會ひになつたといふことです。」

それからまたもや大河内の方へ向いて、

「大河内さん、私は後藤辯護士に電話をかけまして、おいでを願ひ、後藤さんにもあなたのお話を聞いていただきたいと思ひましたのです……どうぞお話を續けて下さい、大河内さんあなたはどういふお考へで御座いますか。」

大河内と後藤辯護士とは初めての挨拶をとりかはした。大河内は後藤の聲が辯論式の音聲で、車掌

が停車場の名前を呼ぶ時こんな音をさせると思つた。永年の法廷生活が後藤を極めて事務的な打切棒の男を作りあげたのであらう。彼は大河内に、「あなたが今回の悲しむべき問題に提供なさる材料を拜聽いたしませう。」と開き直つていつた。彼は兩手を結んでそれを行儀よく膝の上に置いてゐた。

大河内は福原夫人に語つたと同じことを簡單に話して、後藤の手に眞黑の女から貰つた紙の切れを渡した。

辯護士は金緣の眼鏡の位地を返し、頭を後へ引き眉毛をつり上げた。彼は大河内から受取つた紙切れを讀んで、

「なるほど……これは自白の性質を持つた通信だ。」といつた。

大河内は辯護士の言葉を受けていつた。

「私は夫人にお話してゐた所なのです、誰かこの宿所へ出懸けて何物が見出されるかを調べなければならない。誰がその任に當つて御出馬下さるにしても、私は喜んでお供いたす覺悟で御座います。」

後藤に限らず辯護士といふ種類の人間は、いつでも意見の持合があるといつたやうな顏付をしてゐて、いよいよといふ場合に爆發せずにぐぢやぐぢやになつてしまふ癖がある。……後藤も今この癖が出て、ぐつともすつとも言はず、たゞ智者らしい顏をして坐つてゐるのみであつた。彼の意見はどうで、何を言はうとしてゐるかは誰も想像することが出來なかつた。この態度は彼が自分が全然無意見であるといふ告白でなく、寧ろ君が話相手として取るに足らないと思つてゐるかのやうに見えたので

ある。

福原夫人は獨語するやうにいつた。

「さあ、私が出懸けなくちやならないか知らん……後藤さんも一緒においで下さらなくつて、あなたが來て下さると好都合だと思ひますわ。それから不二子ですが、さういふ場所へ同行させることは出來ますまいね……あの子は私と一緒についぞ缺かしたことなく買物や散歩などに出懸けてゐるのですがね。」

この時應接間の一番の隅で着物の音がして誰か入つて來たやうな氣色がした。大河内はふり返つてそれが誰だかを知らうとしなかつた。然し彼は輕い靴の音を聞いて、うづくやうな何とも言へない快感を覺えると思つた。彼は直にこの出席者は彼が今取かゝりつゝある冒險の女主人公であると感じた……が、彼はぢつと頭を動かさずに眞直に椅子によりかゝり、呼吸をころして無言を守つて居つた。

「伯母さん、入つていゝの。私の行つて惡い處つてどんな處。」

かういふ若い女の聲が應接間の沈默を破つた。

若い女は陰鬱な薄暗い谷川へ、木の間をしのび下りて來る太陽の清い光線のやうであつた……この女神はいふまでもなく洋裝をしてゐて、上着のボタンに淡紅色の撫子を挿し、帽子のリボンは薄紫色であつた。これを一言で批評すると清楚の二字で盡きるといふことが出來る。福原夫人は大河内を初めて見た時も無關心といふ態度であつたが、今この若い人に對してもさうであつた。彼女は頭を長

椅子の後へ寄せかけたまゝ、机の上に置いてある花瓶の花を眺めて居つた。

「不二子、歸つたの？」と靜かな聲でいつて、大河内の方へ向き不二子孃を彼に紹介した。

「これが私の姪です、酒井不二子です。」

そして不二子孃の方へ向き直つていつた。

「このお方は大河内さんと仰るんで、お前を狙撃した眞黑の女を知つておいでになるのです……今彼女についてお話をしてゐる所だが、私はどうしていゝか全く分らないのよ。いつも私はお前に、必要なことだけをおし、といつてゐるのだが、實際今どれだけが必要で、どれだけが必要以外だか分らないので困つてゐますよ。」

不二子孃は大河内へいつた、

「さう、あなたはあの女に直接お會ひなすつたの？」

大河内は答へた。

「私は今朝東鄉感化院へ行つて女に會つて來ました、そしてこの宿所と名前とは彼女が私に呉れたものです。所で誰かそこへ出懸けて調査しなければならないと今言つてゐる所なのです。」

後藤辯護士は口を結んだまゝ無言で、大河内から受取つた紙の切れを不二子孃の前へさし出した。

孃はそれを一讀して直ぐ辯護士に戻した。

孃は大河内に尋ねた。

「あなたはどういふ興味をこの女に持つておいでになりますか？　何の理由で彼女に會ひにおいでになつたことは人の知る所で御座います。また東京の諸新聞も警察と力を一つにして事件の眞相を摑まうと努力して來ました。御承知でないかも知れませんが、私は臨時に日東新聞に働くことになりまして、この重要な手掛りを掘りだしたので御座います……所で私はあなた方と共力して事に當りたいと思つてゐるのです。」

「おや、あなたは探訪なのですか……驚きましたね。」と福原夫人は叫んだ。

大河内は頷いた。

「ほんとにかう申しては失禮ですが」、と夫人は續いていつた。「私は探訪記者が嫌ひなのですよ。私はさういふお方にお目にかゝらないことに致してゐます……不二子、さうでせう。昨年の夏など私は探訪記者にひどい目に會はされました、鎌倉のホテルでダンスをしたなど書いて私を侮辱したのですもの。」

「これは無斷闖入ですな。」と後藤辯護士も口を開いた。そして彼は膝の上に置いた握拳の兩手を、蟲でも這つてゐるかのやうにうねらした。

不二子孃は喉から頬へかけて赤味を散らしながら正面に大河内へ向いた。孃は美はしく見えたが横柄な所がこんがらがつて、彼に混亂の快感といつたやうな感じを與へた。

「伯母さんの仰つたのは本當なのです。」と不二子孃は靜かにいつた。「私共はどんな新聞記者にでもお目にかゝらないことにしてゐます。それですから不幸に私共は記者のどなたにもお會したことがないのですよ。あなたは誰かを新網町へ送つた方がいゝと仰いましたね。」

大河内は自分の胸がどきどきするのを感じた。彼は今事狀が豫期しなかつた方角へ轉廻したと思つたが、まだまだ危險地帶にゐると感じた。

彼は簡單に再び繰りかへした。

「私はどなたか調査においで下さるならば一緒にお供をさせていたゞきたいといふので御座います。」

福原夫人は額に大きな皺を寄せて、大河内と不二子孃の兩人を交か交るにぢつと眺めた。そして彼女はいつた。

「不二子、よく氣をつけて口を聞かなくちや駄目ですよ。私なんぞは新聞に名の出ることなぞ絶對にいやなのです……また新聞に書きたてられる時はろくなことでない位は承知してゐます。お前の伯父さんは、重大な場合に口をきくにも、一々紙に控を取つて置いた位ですもの……」

大河内は兩眼がほてるのを感じた。彼はそれを上げなかつた。いふまでもなく福原夫人の侮辱は寧ろ無意議に發したもので、決して熟慮の結果でない。不二子孃は問題がいささか紛糾して暗礁に乘り

あげかけてゐることをよく知つてゐる。それで微笑しながら彼女はいつた。

「それでも伯母さん、事實の眞相は知りたいものですね、大河内さんの仰る通り、私共にしましてもこのまゝに打棄つて置く譯にゆかないと思ひますね。」

大河内は不二子孃の微笑を美はしいと感じた。それは薄ぼんやりした心持から出たものでもなく、また愛嬌の安賣からでもなかつた……少くも彼女はその微笑で自分が好奇心に動いてゐることを物語つた。彼女は言葉を續けた。

「私は事件に直接の關係を一番多く持つてゐるのですから、いろいろなことを知りたいと思ひますね……大河内さん、眞黑の女はどんな印象をあなたに與へましたの？」

彼女の深紅の　脣は少し開いて、なかから甜瓜の種のやうに綺麗に並んだ白い齒を覗かせた。大河内は「これは埒らなく見事だ」と心のなかで思つた。彼女が椅子から前の方へ體を跼めた時、その肥つてはゐないが豐饒な感を與へる胸部が動いて、その形が着物の上から有りありと見えた。大河内は「不二子さんは美人だ、何となれば彼女が自然であるからである」と思つた……孃は咲いたばかりの花に譬へることの出來る所謂青春の美そのものである。孃には何等薄暗い陰影といつたやうなものがない。言はば太陽が中天に上つた正午の美であつて、總てが直截で張り切つてゐる、何等狐疑逡巡する所が見出されない。彼女の眼を見ても、普通の若い娘のそれとは違つて落着きが十分で、多少批評的にさへ見える所のするのは嬉しい。彼女は靜かな音律を響かせて語つたが、精神の健全を證明するに餘があると大河内は思つた。一言でいふと彼女は如何なる最高文明國を飾るに足る優秀な一女性であると信じていい。

彼女の顏は彼女が想像的性質の女であることを示し、その澄み渡つたやうに平靜な態度作法は批評力に何等缺く所のないのを物語つた。彼女は感じの柔和な女性でしかも反省的であるやうに思はれた。彼女の立派な獨立心は善良な傳統と正確な趣味のなかゝら養はれたものに相違ない。何よりも彼女に感服する所のものは、彼女の生きいきとして感受性に豐かな點で、彼女は十官の所有者たることであらうと想像された。更に大河内が何物よりも不二子孃に感服したのは、彼女の不思議な魅力であつた。大河内は思つた、この若い女こそ話すに足る女性だ……此方のいふことをそのまゝ完全に理解することの出來る婦人だ。」彼は不二子孃の價値を解剖しようとしなかつた。彼はたゞ彼女に感服したのである。

「大河内は熱心な態度を見せて語りだした、

「お話しいたしませう。私はかう直感しました……もとより何の掛値のないお話ですからそのおつもりで聞いて下さい。この女は實に驚くべき女だ、私共の世界とは違つた世界の人間ではないかと想像しました。お孃さん、若しあなたが直接彼女をよく研究なさいますならば、恐らくあなたは『あゝ古典的美だな』とお叫びになるでありませう……氣違ひでもなければ、また狂人でもありません。」

「彼ばこゝで話に呼吸をすこし入れて語り續けた。

「どういふ種屬の人間であるか私には判斷されなかつたのですが、兎に角高尚な文明國の最も優良な女性であるといふことだけは確かであります。そして私はかう信じたので御座います、あなたを狙撃するに至つた動機には必ずや重大な祕密が潛んでゐるに相違ないと……それであなた御自身のためのみとしましても、是非その實際を發きださねばならないことでありますし、もつと廣い一般的意味から見まするとと、研究の問題としてこれ位人の興味を唆るものは有りますまい。」

「おや、そんなにあなたを驚かしたのですか？」と不二子孃は叫んだ。

大河内は「さうです。」と答へた。

「事件が素敵に面白くなりさうね。」と孃は重ねて叫んだ。

福原夫人は彼女を睨附けていつた。

「不二子、何といふ口のきゝやう、注意おしよ。」

「だつて、伯母さん。」

かう孃はいつて、直ぐ大河内の方へ向いていつた。

「そんなに得體の分らない女とは驚きましたわ。警察では或は布哇の土人かも知れないといつてゐましたが、兎に角狂人にしてしまひました。新聞では寶石で身を飾つてゐたなどと特別の大活字で書きたてましたが、私はそれを信じなかつたのですよ。」

この時後藤辯護士は口をさしはさんだ。

「新聞などはものを誇張するの外何物も知らないのですからね。」

不二子孃は辯護士ににつこり笑つた。彼女はこれまで全然無言で濟ましてゐた辯護士に多少もの足らない感じを持つてゐたのである。彼女は彼と大河内とを等分に眺めていつた。

「この新網町のタビットといふ人間はなんでせうね……無論、日本人ではありませんね。男か女でせうか……」

「男に相違ありません。」と大河内は答へた。

「して深川の新網町てどんな所。」と不二子孃は大河内に尋ねた。

大河内はそれについて彼の知つてゐる所を簡單に孃に語つた。すると福原夫人はいやな顏をして不二子にいつた。

「不二子、お前はそこへ出掛ける氣なの……娘は娘らしくしなくちや困るわ。」

「だつて伯母さんと。」孃は叫んだ。「私に直接關係のある大問題なのですもの。伯母さん、どうしたらいゝといふの……それぢや大河内さんと一緒にみんなで揃つて出懸けちや、どう、伯母さんと後藤さんと私の三人が……」

福原夫人は叫んだ。

「新網といふ貧民窟ぢやないか、そんな所へどうして私達が……」

「別に貧民窟といふわけでもないのですよ。」と大河内は一言說明して、「無論綺麗な所ぢやありませ

んが。」と言ひたした。
夫人は不二子嬢に向つていつた。
「不二子、私はお前にいつもいつてゐますが……必要なことだけおしよ、餘計なことはしてはいけませんと。してお前は新網へ行くのをどうしても必要と思ふの。」
大河内は嬢の返事しようとするのを遮つていつた。
「新網だつて決して危險な所でありませんよ……絶對に安全だといふことを私が誓ひますよ。後藤さん、さうぢや有りませんか？」
辯護士は輕く頷いた。その樣子は肯定するでもなくまた否定するでもないやうな曖昧なものであつた。彼は福原夫人から、あなたも危險でないとお思ひですか？」と明瞭な返答を要求されて、まあ、安全でせうね……奥さんとお嬢さんがおいでになるならば、無論私も御同行いたします。」と答へざるを得なかつた。
大河内は不二子嬢へ向いていつた。
「貧民窟などと一言で貶した所で、深川にも清住公園といふ、もと岩崎の別邸も有るのですからね。さう馬鹿にしたものぢやありませんよ。」
「おや、さう。」と不二子嬢は朗かな聲を張りあげた。新網は清住公園の近くなのですか……私はその公園へ一度いつて見たいと思つてゐた所なのですよ。私のお友達などは隨分結構なお庭だつて褒め

ていらつしやいましたわ。そしていつかそこで會を遣りませうといふお話さへ有りましたの。」
そして彼女は福原夫人にいつた。
「さあ、伯母さん、奮發して頂戴よ、今すぐから出懸けませう。そんなにぐぢやぐぢやしてゐちや駄目よ……伯母さんはまるで冒險心がないのですから、大河内さん、伯母さんのお尻を推して頂戴な。ね……四人揃つて行けや何も恐ろしかないわ。」
「もちです。」と大河内は叫んだ。
そして彼は夫人と後藤辯護士の方に顔を向けていつた。
「御同意でせう……奥さんも、辯護士も。一擧新網町十九番地をついて、祕密の有るかぎりを發きませう。」
彼は冷靜を裝つてはゐたが、心のなかでは隨分はしやいだ感じであつた。
福原夫人は着物をきかへて來るからといつて、奥の部屋へ入つた。後に殘された不二子嬢と大河内と辯護士はしばらくの間無言で竝んで居つた。今しも應接間の隅の窓硝子を通して黄金色の午後の光線は洩れた。そしてそれが不二子嬢の頭の上に落ち、眞黒な髪は一段と綺麗に見えた……部屋の中に明るい感じが溢れた。大河内はふと裝飾的に竝べてある骨董品のなかに、かなり大きな硝子製の額があるのに氣が附いた。それは澤山の小さい不規則な形の硝子板を組合せたもので、その組合せ方が讀めないけれども何か意味のありさうな文字となつてゐる。そしてこれ等の硝子板の中央にスフィンク

スが十字架にかゝつてゐる像が描いてあつて、これを渦巻いた蛇が珠數つなぎになつて取りまいてゐる。この不思議な硝子の額が太陽の光線を受けて寶石のやうに煌いた。殊に蛇の目玉が百近くもあつてそれがみな一齊にぴかりと輝いた有樣を見ると、たゞ物凄いと言はねばならなかつた。

「驚くべき額ですね。」と大河内はわれ知らずに叫んだ。

「さうでせう。」と不二子孃は得意げにいつた。「お父さんが送つてくれましたものです……こゝにある大概のものはみなお父さんが外國から送つたものです。」

「一たい、どこでかういふ硝子の額が出來るのでせう。硝子でなくて、額全部が珍貴な寶石のやうですね。」

かう大河内が感服して語ると、彼女は不意にものを穿鑿するやうな眼付をして彼を眺めた、そして彼に尋ねた。

「何か私のお父さんのことを御承知で御座いますか？」

「いゝえ、目下外國においでになるといふことを福原さんから聞きました……南洋の方面に御旅行中だとかいふことを。」

大河内のこの言葉を直に受けて不二子孃は叫んだ。

「お父さんがどこに今おいでになるか、てんでその居所が分らないのですわ……私どうしたらいゝでせう、心配でならないのですよ。お父さんから十ケ月以上も通信がないの……」

かう不二子孃は叫んでから再び話を硝子の額へ戻していつた。

「ほんとに綺麗な額でせう。それが南洋で出來たものだと聞いてゐます……ここにある宝どすべてのものが南洋から來たものですが、面白いことに、みんなに十字架にかかつたスフィンクスの絵が描いてあります、大河内さん、よく御覽なさいまし。」

「なるほど、さうですね。何か意味が有るでせうね。」と大河内は孃に尋ねた。

「南洋人の表象らしいのですから、無論意味がありませう。」と不二子孃は答へた。

すると後藤看護士は鼻であしらふやうな表情をして、誰にいふともなく獨語した。

「南洋人の表象なんて多寡の知れたものです。野蠻人の粗雜極まる頭から割りだされた粗雜極まる思想に過ぎないのですからね。」

不二子孃はこの言葉を不愉快に感じたらしく見えた。大河内は心のなかで、「粗雜極まる看護士の頭で表象などが理解されて堪るものか。」と思つた。そして彼は熱心に硝子の額を見詰めた。

「東郷感化院にゐる眞黒な女をつれて來て、この額の側に立たせたら、面白い南洋情調の絵になりますね。」

不二子孃は大河内のこの言葉を愉快に感じた……孃は少しばかり頸を傾げて、につこり笑つた。大河内はこの微笑を注意する義務が自分にあるやうに感じたのである。孃は彼にいつた。

「あなたのおつしやる眞黒の女ばかりでなく、美人でさへあれば、誰でもこの額といゝ對照をなしま

せう……硝子や鏡は神祕的なものですわね。」

福原夫人は「下の事務所へ電話をかけて、自動車が用意してありますから、皆さんどうぞ直に。」と大きな聲でいひながら、奥の部屋から應接間へ入つて來た。彼女は體を重さうに飛んであるく蟲といつたやうな感じを人に與へたが、實に鈍重な蟲が女に見えることがあるのである。

今彼等四人は自動車に乘つて深川さして出かけることになつた……大河内は案内役として運轉士に新網町十九番地へゆけと命令した。自動車は滑るやうに走り始めた。

福原夫人は自動車に乘つて走つてゐるにも係らず、容易に不安の心持を靜めることが出來ないやうに見えた。彼女はいつた。

「こんな不謹愼な事をしていゝでせうか？　私は『不必要な事に手を出してはならない』といふのを生活の標語として來ましたが、かうして深川の貧民窟などへ出かけるのは必要なことでせうか……」

彼女は後藤辯護士に「大丈夫、別に危險なことはないでせうね。」と尋ねた。そして彼が、「私が責任を以て引受けますよ。」と答へた時、夫人はやつと安心したらしく見えた。

不二子孃は叫んだ。

「いよいよ冒險の始まりですね……タビットが人間であるか動物であるか知りませんが、タビット狩り面白くなりさうですね。」

大河内は無言であつた。彼は過去七時間ばかりの間に廻轉した事件の廻燈籠を詳細に考へて見た。

そして彼が自分の遊船アロハ丸に乘つて恐らくいゝ氣持になつてゐるであらうと想像される高田と那須のことを考へても、彼は一點羨しいとは感じなかつた。

「社會部長横井にこの場面を一つ見せてやりたいな。」

大河内がかう考へた時、不二子孃の所謂タビット狩りの自動車は深川新網町へ間近く來つつあつたのである。

第四章　伯爵タビット

彼等の自動車はぱたと新網町の入口で止まつた。

「もう來たの？」と不二子孃は叫んだ。孃はこんなにはやく着いては冒險らしくないと思つたに相違ない。

「こゝが新網なんですか、ちつとも危險らしく見えないわね。」と福原夫人も叫んで、自分の豫想が裏切られたやうに思つて半ばの不平と半ばの安心とを感じた。「貧民窟といつても別に外と違つた所がないやうですね……もつと熊のやうな子供や取つて食ひさうな野蠻人がゐなくつちやね。」

「ほんとにさうですね、伯母さん、冒險の背景としては少々綺麗すぎるわね。」と不二子孃は夫人に相槌を打つた。孃はすべてが平凡化して、果は昨夜の夢のやうに消えてしまやせんかと恐れるやうに見えた。孃は大河内の方を向いていつた。

「さあ自動車を下りて、目的の家へ突進しませう。御案内下さい、早くタビットといふものの正體を見たいものですね。」

「大變な元氣ですね。」と大河内は笑ひながら答へた。彼は福原夫人と後藤護士を顧みて、「あなた方もどうぞ御一緒に。」と自動車を下るやうにと促した。後藤は事情上止むを得ないから培遇に順應するといふ犠牲者面をしてゐるやうに見えた。

昔といつても十四五年前に西洋のある社會研究者がこの新網町を一巡した……季節が夏のことで家がすつかり開放され、窓に綺麗な朝顔の鉢が置いてあり、眠つてゐる子供を母親が木版繪入りの團扇で煽いだりしてゐるのを見て、「マホメットのやうに花を愛する貧民は確に御伽噺の貧民だ、繪のついた團扇を使用する貧民は美術の好愛者だ。」といつたさうであるが、今日の新網はそんなに生溫い所でない……福原夫人と不二子孃の想像を裏切つたかも知れないが、どうしてどうして貧民區の資格に何の缺けた所がない。警察の帳簿を調べるまでもなく、前科幾犯といつたやうな無賴漢が箒で掃くほどゐる。唯かういふ惡人でも額にその記號を着けて居らず、又一見すると案外常人らしいから一寸見た位ではその眞實が知れにくいだけだ。十四五年前には花を愛する貧民が澤山ゐたかも知れないが、今日の新網にはそんなしをらしい奴はめつたにゐない……殊にこの四五年間に於けるこゝの惡化は恐ろしいものだと言はれてゐる。不二子孃は一軒一軒家のなかを覗いて歩いた、そして異んの惡臭がぷんと鼻を突くのを感じた。彼女は「なるほどこゝは貧民窟らしい、段々私の豫想に近づいて來

る。」とでも思つたか、大河内を顧みてにやりと笑つた。それでも彼女はもつと物凄い處であつてほしいと心のなかで思つた。福原夫人は子供や母親の肌着無茶に汚いのに注意して、「貧民だつて肌着位は洗濯しなくちや、洗濯するには一文もかゝらない。」の思つた……兎に角この兩人がとんと悄げてない樣子を眺めて、大河内は非常に喜んだ。

夫人も不二子孃もタビットの二階建西洋館を見て意外の感に打たれた。少くも彼等はこの建物が周圍の垢じみて汚い狀態との對照から、實際以上に圖抜けた感を與へるのだといふ點に氣が附かなかつた。不二子孃の好奇心はこの家にかけてある不思議な模樣のカーテンから始まつた。大河内の押した入口のベルはけたゝましく響いた。それに應じて出て來た少年はと見ると、薄羅紗の濃い鳶色の洋服を着て革のバンドをきりゝと締めてゐる……不二子孃はこの上品な洋服の少年を見てびつくりした。少年の髪の毛は眞黑で、事實日本人の髪よりももつと黑いやうに見えた。そして彼は顏全體より眼の方を見て下さいと言はんばかりのぎらぎら光る二つの眼を持つてゐた。これは日本人でないといふことは明かであるが、さりとて何處の人間だか誰も答へることが出來ないであらう。少年は丁寧に御辭儀をして訪問者の用命を尋ねた。そして彼は日本人と少しも違はない日本語で答へた。

彼等は入口を入つて直ぐ左手の應接間へ通された……階下の半分以上が應接間に取つてあると思はれる位に廣い部屋で、例の不思議なカーテンが窓を蔽つて太陽の光線を遮つたためでもあつたらうが、時間が既に六時間近であつたので、部屋のなかは薄暗かつた。彼等がこのなかに入ると應接間の

入口の戸がぱたんと大きな音をして閉つた……彼等は今しんとした沈默のなかに立つた、そして沈默が肌を嘗めるかのやうに感じて「これは薄氣味の惡い部屋だ」といづれも心のなかで思つた。すると四隅の柱から木の枝のやうに腕を出してゐる銀製の電燈器がぱつとついて、赤色の笠を被つてゐたがため、ぼやつと赤味を帶びた光線を床の上へおとした。床の敷物はどうかと見るに、靴で歩いても全然何の音の出ないやうに二三枚の柔かい敷物が重ねてある。そしてその敷物の色は電燈の笠と等しく赤色である。赤色の裝飾品は單にそれ等ばかりでなく、椅子も長椅子も悉く赤色の羅紗で張つてある。そして天井を眺めると、赤色の絹で作つたお寺の天蓋みたやうな細い旗がいくつも垂れてゐて、その間に南洋樹木の葉だと聞いてゐる巨大な圓い電氣團扇のやうなものが、風が微塵もないのに身振ひしたり頷いたりしゐる。それから部屋のこゝそこに置いてある鉢植ゑの蘭も、いふまでもなく南洋樹木で蛇のやうにぬるぬるした恰好をして、白い花が咲いてゐる。

更に四人の訪問者を驚かしたことがある……應接間の中央に一臺の机があつて、その上に大きな銀製の鉢が載つてゐる。そしてその鉢のなかに南洋の沼地に生える蘆のやうな太い草で作つた筆筥に似た形のものが入れてある。彼等はこれは變なものだと思つてゐると、彼等を迎へ入れた例の少年がそつと應接間へやつて來て机のボタンを押した。すると綺麗な水が數十の蘆の穴から高く吹きあがり、その水がぱらぱらと銀製の鉢のなかへ落ちて美妙な音樂を奏でた。彼等は互ひに顔を見合せ「おやこれはどうした手品か」とびつくりせざるを得なかつた。彼等はみな心のなかで、「これは妖魔の部屋

でなくて何であらう」と叫びたいやうな氣がした……少くも彼等はかういふ不思議な家が新綱なんぞの貧民窟内に存在するとは想像することさへ出來なかつたのである。

大河内は前の記者時代に種々の應接間を見たといふ經驗の所有者であるが、未だ嘗てかういふ彼の度膽を拔いてしまふ場所に出會つたことが無かつた。彼は讀物記者の那須がこれを見たならば少くも新聞全頁半分の種にはするであらうと想像した。また社會部長がこれを聞きだしたならば、前代未聞の魔の住家として新聞で煽るであらうとも想像した。大河内は不二子孃を眺めた……孃は花の間を飛び廻る蝶々か何かであるやうな樣子で、部屋のなかを一々調べ廻つた。伯母さんの福原夫人は椅子に腰をかけたまゝ動かなかつたけれども、不思議な好奇心を煽りたてられたことは不二子孃に劣らなかつた。夫人は「この部屋ならば自分の應接間にしても恥づかしくない」と朧氣に感じたが、それは無意識にお茶の水にある自分の應接間とこゝとが一味相通ずる雰圍氣を持つてゐると思つたからであらう……夫人は後藤辯護士を顧みて、「あなたの御意見は如何に」といつたやうな心持でにつこり笑つた。後藤にはこのロマンチックな雰圍氣に同化し得るだけの想像力を缺いてゐた。彼は椅子にもたれたまゝ無言でまだ無關心の態度でぼんやりしてゐた……辯護士といふ種類の人間は由來感激を殺すといふことを、最も重要な商賣道具の一つと心得てゐるらしく思はれる。後藤も正にさういふ心得の人間であつた。

「ロマンチックだわね、夢の國へ來たやうだわね。」と不二子孃は叫んで、嬉しさうに噪いだ。

大河内は不二子孃の喚ぎ工合が氣に入つた。無論彼女はつまらないことを生死に關する重大事件のやうに騒ぎ廻る種類の女でなく、すべてのことに鋭敏に感應する素質を持つてゐるのが喜ばしかつた……この生きるといふ心持も國勢調査員か何かのやうに餘計な穿鑿心にからまると不自然であるが、不二子孃のそれは極めて純性のものであつた。適當のものを味ひ鑑賞するといふことは課税の勘定とは違つて、頭腦であるのでなく心でしなければならない。不二子孃のこの應接間で表現した好奇心の發露即ち生きる力の顯れは、彼女が髪の毛の搖れ工合を語つたのでなく、その胸の動搖で歌つた詩歌である。

應接間の入口が大きな音をして開いた……二十代の青年がぬつくと立つた。彼は脊が高く、婦人にも相應しいやうな花車作りの男で、不思議に考へられたのは年に似合はず頭の髪の毛に白髪が澤山交つてゐたことである。彼は鼠色の洋服を着て、胸部に長方角の青い寶石をぶら下げてゐた。この男の容貌も前の少年と等しく眞黒で、目だけが大きく美はしくまた柔和な感じを與へた。

大河内は口を切つた。

「あなたはどなたか知りませんが、私共四人はある重大な事件に關し調査を進める必要上、こゝを訪問したものであります。私は特殊な機會から一つの宿所と姓名を手に入れましたが、その宿所がこのお家なので御座います。そして私の與へられた姓名はタビットといふものでありますが、私共はそのお方にお眼にかゝりたいと思つて……」

青年は頷いた、そしていつた。

「私が即ちそのタビットです、伯爵タビットです。」

大河内は驚駭を新たにして彼を見上げた……いづれにしてもタビットなるものは相當の年輩者であらうと彼は漠然と想像して居つたからである。不二子孃もまさかかういふ青年ではあるまいと思つてゐたので、不思議な感に打たれてタビットを眺めた。大河内は福原夫人と後藤辯護士とをタビット伯に紹介して、わざと不二子孃をそつとそのまゝにして置いた。すると、大河内の言葉の終らないうちに、伯は不二子孃の前につかつかと進み寄り、丁寧に御辭儀をした、そしていつた。

「お孃さん、あなたにどうお詫びをしていゝか知らないほど私は恐縮して居ります……先日は私の召使があなたを殺害しようと企てました……そのことに對して私は非常に惱んで居ります、どうかお察し下さい。」

かうタビット伯が單刀直入に謝罪的告白を語つたので、四人の人はいづれもたゞ無言で彼の顔を見るばかりであつた。不二子孃は體を少しばかり前方へ曲げて、呼吸を殺して伯爵を見詰めた。

伯爵は言葉を續けた。

「あの朝私は召使の姿を見失ひまして、直に何の目的で彼女が外出をしましたかを知りました時、どんなに驚駭いたしましたでせう。私はあなたのアパートメントへ向ひ、入口にやつと着きました時、あなたはお入りになり彼女の襲撃をお受けになつたのであります。私はどうすることも出來ずそのま

ま引きかへしましたが、私の心は亂れに亂れましてそれ以來惱み通しであります。私はあなたにお目にかかりに上らうかと思つたこともありましたが、それも決行いたさず、御覽の如く惱みつづけて居ります。もうかう何もかも白狀いたしました以上、無論逃げも隱れもいたしませぬ、ただあなたのお言葉を待つてあなたの命令に服するのみで御座います。」

不二子孃は無言であつた。福原婦人は斷然たる言葉つきで叫んだ。

「伯爵、あなたの後悔は時既に遲しの感があります。あなたが召使の行爲に對してお惱みなされるといふことは、恐らく敬服に價するかも知れませんが、そのため私共は何の利益も得ません。第一にお聞き申したいことは、かかる物騷千萬な召使を御使用なされるあなたはどなただといふことで有ります。あなたの召使は今改めて申上げるまでもなく、危險人物で、血に渴き肉に飢ゑる食人鬼ではありませんか？」

かう言ひ終つた時福原夫人は溜息を大きくついた……この溜息は彼女が言ひたいだけを無遠慮にいつて退けたといふ快感を物語るらしく見えた。夫人の聲はかなり大きいものであつた、そのため大河内が彼女の言葉半ばに溜息をついてゐたことに誰も注意しなかつた。彼は何故に溜息をついたか……それは彼が眞黑の女から紙切れを得たがためかういふ工合に事件が進捗した喜びの表情であつたと同時に、今後どういふ風に落付くかといふ心配を物語るものでもあつた。彼は福原夫人がタビット伯をきめ付けてゐる間、部屋に竝んでゐる裝飾品に目を走らせた。そして彼は側にある机の上に兩眼をぢ

つと据ゑた。

彼はそこに三脚臺にのつてゐる青銅製の平圓盤を見出した。それが赤味を帶びた電燈の光線を受けて見事なことこの上なく、如何なる美妙な細工法から作りだされたものかと驚かされた……更に大河内の驚いたことは、彼が盤面の中央に渦卷いた蛇や山羊の角の行列で取卷かれたスフィンクスが彫刻されてゐることである。このスフィンクスが、福原夫人の應接間で見たものと寸分も違はず十字架にかかつてゐたのである。この時大河内の頭腦は雜多な想像と假定で圍繞されざるを得なかつた。それで彼は福原夫人の言葉も明瞭に頭に入らなかつたのは自然であつた。彼は今タビット伯が夫人へ返答し始めたことに氣が附いて、恰も夢から醒めたもののやうに顏を上げた。

「然し奧さん、お孃さんを狙擊したことに就いては一言も辯解の餘地がありませんが、彼女は忠節な女で御座います。どんな事をしましても彼女は私へ信實に奉仕するつもりで遣つて居ります……私は彼女を信じました、決して疑ひませんでした。私は彼女があんな間違ひをしでかさうとは夢にも考へなかつたので御座います。」

かう伯爵が言ひ終ると、福原夫人は悲鳴をあげて叫んだ。

「間違ひですつて、間違ひですつて……これは驚いたお言葉ですね。」

夫人はかう叫びながら後藤を眺めた。その理由は彼に何とかいつて貰つてタビット伯を叱責したいといふつもりであつた。然るに後藤辯護士は法律上の研究問題として心のなかで事件の要項をかき集

めてゐたらしく思はれた。彼は夫人の希望通り伯を怒鳴りつけることをしなかつた。

大河内は極めて明確な言葉でタビット伯にいつた。

「然らば閣下、あなたはあなたの召使が不二子孃を殺害することがあなたへの御奉公だと信じたと仰しやるのですか？」

「殘念ながらそんな結論になります。」とタビットは大河内に答へた。

大河内は沸然として立ちあがつた。彼は立ちあがる時手に机から青銅製の平圓盤を掴んだ、そしてそれを伯の面前にさしだした。

彼は冷靜な言葉で言ひよつた。

「あなたはどこの國のお方かは知らないが、明かにあなたはこの表象を信ずる國の人民であるに相違ない。何故にこの表象に生きる國の人間が不二子孃に敵意を挾むのですか？……何故に不二子孃のお父さんに敵意を持つのですか。」

その時不二子孃は悲鳴をあげた。

「伯母さん、御覽なさい、後藤さんも……お父さんが送つてよこしたものに着いてゐる表象と同一です、十字架にかかつたスフィンクスです。」

かう言ひ終つて、不二子孃はタビット伯に向つて叫んだ。

「あなたは私のお父さんを御承知ですか……恐らく御承知でせう。」

大河内は伯爵の顏が一種不思議な喜びで和らげられ輝き熱するやうに感じた。伯爵は尊敬の意を湛へて大河内を眺め、そしていつた。

「あなたは偉い、あなたの直觀は私を喜ばせる……日本人がかういふ直觀を持つとは思はなかつた。日本人も「不可知」に接近しゆくだけの能力を與へられてゐる……」

伯爵は歡喜に滿つといつて差支ないやうな顏をして再び大河内を眺めた。彼は部屋のなかをあちこちと歩いた。そして彼は不二子孃の側に立つて優しい聲でいつた。

「あなたのお父さんを知つて居ります、洒井照人さんにしばしばお目にかかつて居ります。」

福原夫人は叫んだ。

「照人にお會ひになつた、照人に、ほんたうに……あなたの召使のやうな恐ろしい人間が住んでゐる所に照人が居りますか？」

夫人に意氣沮喪してぐんにやりして見えた。不二子孃は立ちあがり、タビット伯の前へ行つて、震へながらいつた。

「あなたはいつ最後にお父さんに會ひましたか？　御壯健でしたか？　お話のください。」

伯爵は不二子孃をぢつと見てゐたが、その眼を床の上に落とした。

「お孃さん、最後にお目にかかつたのは、」と彼は答へた。「丁度三ケ月前でした。その時お父上は御存命であり御壯健でした。」

伯爵の言葉は冷く大河内の耳に響いた。彼は急に恐怖に捕へられたやうに感じた。彼は伯爵の言葉卽ち「御存命であり御壯健でした」を靜かに繰返して、更に言葉を續けた。

「閣下にお尋ねしますが、何故に不二子孃の死があなたへの奉公と考へられますか？　あなたはあなたの召使が奉公の意味で孃の殺害を企てたと言ひましたね。」

タビット伯は一寸考へ込んだやうであつたが、にこやかに微笑していつた。

「あなたは驚いた人だ。あなたの洞察力は私を喜ばせる。あなたの御質問に對し私は全部を御答へ出來ないが、もとより私は最善を盡してあなたの好意に報います。」

彼が後を振りむくと、その途端に部屋の一番隅にかけてあるカーテンが動いた。すると其處から例の少年給仕が顯はれ、手に大きな銀製の盆を持つて出て來た……盆の上には精巧を極めた金銀細工の皿に奇妙不思議な食物が載つてゐる。伯爵タビットは少年の手からそれ等の皿を受取り、そして不二子孃に向つていつた。

「あなたのお父さんもかういふ美味佳肴を食べておいでになります……あなたもどうか一つ味つてみて下さい。」

彼は机の上にそれ等を一々順序よく竝べたが、その作法の優秀なことを見ると、この人はお菓子を食べたりお茶を飲むのが生活の全部で、人を襲つたり殺したりすることをてんで知らない國から來たに相違ないと思はれた。大河内もかう感じた。「彼は粗雜生硬な地上の事變に觸れない、そしてわれ

われよりもつと高尙な空氣のなかに生きる人間だ。」

今机の上に置かれた皿のなかを見るに、蜂が香氣馥郁たる熱帶の花から集めた蜂密がある、千年間も土藏にしまひこんであつた古酒で味をつけた菓子がある、胡桃や砂糖づけになつた花の蕾がある、日本の松露に似たやうな白い小さい苺がある、珍貴な植木の根から製したお茶がある。かういふ未だ嘗て見たことも聞いたこともないやうな食物が山盛りになつて出てゐる。それから不二子孃を初め、皆の人を喜ばしたのは、タビット伯の歡待振りが如何にも上品であつたことである。長い觸角を持つた蟲のやうに猜疑的で批評的である福原夫人でさへ、眼前にかかる食物を見ては辭退することが出來ないやうに感じた。

「どうぞ御隨意にめし上つて下さい。」とタビット伯は會釋した。そして彼は皿のなかから菓子をつまみながら語りだした。

「皆さんはまだヤクキ島のことをお知りにならないやうですな……」

「それは何處にある島ですか？」と大河内は叫んだ。

「不二子、何だか聞いた名のやうだわね……お前のお父さんがヤクキから手紙をよこしたではなかつたかね。」と福原夫人は不二子孃を顧みていつた。

不二子孃は「さうでしたね。」と夫人に答へた。

タビット伯は言葉を續けた。

「いづれにしてもお知りにならないといつていい。あなた達のヤクヰ島に關すを知識はまづゼロと言はねばならない……もとよりそれもその筈です。この島のことはその存在すら外部に知れて居りません、また私共は人に知らさないやうに警戒さへもしてゐます。いふまでもなく私自身はその島のもので、島を離れたのは今度が初めてです。

彼はかういつて大河内その他の人々の顏を見廻はした。それは彼等の興味が動いたか、どうかを探らうとする談話家の慣用手段であるが、彼もこの骨を心得てゐるのである。彼は彼等が熱心になつてゐるのを見て取つて、につこり微笑してまたもや言葉を續けた。

「ヤクヰ島は遠い南洋にある島ですが、その美麗なことは恐らくあなた達の想像以上であらうと思ひます。今申しましたやうに、私共は外部に知らさないことにしてゐますから、どんな偉い航海家でも島人の水先案内のつかない以上は、到底その島へ達することは出來ないのであります……ヤクヰは即ち神祕の島で御座います。今私があなた達にこの島のことをお話した所で、失禮ではありますが恐らくあなた達は御了解にならないであらうと思ひます。然し一應私共の島の特殊な事情をお話して、どうして不二子孃のお父さんが關係されるに至つたかをお耳に入れたいと思ひます……そもそもヤクヰ島は耶蘇紀元前二千〇五十年から今日に至るまで、一系の王樣で世襲的に支配されて來たのであります。古い古い印度の記錄で棕梠の葉に書いてあるところに依ると、ヤクヰ島一名アルクワとなつて居

「閣下、耶蘇紀元前幾年と仰いましたね。」と後藤辯護士は口を挾んだ。

「二千〇五十年で御座います。」とタビット伯は答へた。

「へい、そんなに古い島ですか？」

「恐らく世界最古の王國であらうと思ひます。」とタビット伯爵は言葉を續けた。「私がこの島のことをお話しすると、あなた達は私が雲を摑むやうなことを語る、詰り萬八の夢物語としか思はれないかも知れませんが、私のお話し申上げることは一々みな正確な事實で御座います。わが王國に傳はる最古の記錄に依りますと、太古時代に於ける印度人の海上冒險はベンガル灣を越えることが出來なかつた……それもその筈です、その頃の印度汗には鰐が空の星のやうに澤山居つて洋上へ出る船も船もそのため粉微塵にぶち破れてしまつたので御座います。然る所耶蘇紀元二千年ばかり以前にカルカッタを出發して陸路海岸に沿つて南下の遠征についたアリバルといふ豪傑がありました。この豪傑の冒險談は印度古代史を飾る唯一の物語であることは人の普く知る所であります。彼は百頭の象と五千臺の車を引卒して遠征に上つたと書いてありますから、その壯途の一班は容易に想像されます。英雄アリバルは今日いふラングンへ着いた時、隊を二つに分けて一部をシャムへ進入させ、自分の指揮した軍隊をぐんぐん南下させてマレー半島全部を制服してしまつたのであります。それから船舶二百五十艘を用意して、ボルネオとジャバの間の海を渡り、ニュウ・ギニヤの南岸に沿つてもボルネシア群島の間を漂泊したのでありますが、私は今その詳細をお話しするつもりでありません。またお話したとこ

ろで、古い昔のことですから、その正確如何は誰も保證することが出來ないでありませう。要するに英雄アリバルの海上冒險談はここで終つてゐるのであります……古い記錄には、彼はポルネシア群島の間で暴風雨のため難船して死んだとなつてゐますが、誰か知らんや彼はヤクヰ島に上陸してゐたのであります……彼と仲間の勇士達が難船したといふことは事實でありますが、彼等はヤクヰ島へ風のために吹きよせられたのであります。彼等が偶然に見出したヤクヰ島は所謂無人島であつたが、それでもその當時既に人間が住んでゐたかといふ問題は、今日なほヤクヰ島に於ける考古學者の間興味ある問題となつて居ります。英雄アリバルがカルカッタを出發して難航するまでに殆んど五十年間を費やしてゐるので、私共は耶蘇紀元二千〇五十年を以て彼のヤクヰ島上陸を記念するとともに、彼が島の王樣として卽位した年としてゐるのであります……かういふ譯で、私共の島は耶蘇紀元前二千〇五十年以來血統の連綿と續いた王樣に支配され、外國人の血一滴も混らずに最近セルベス王の死に至るまで引續いて來たのであります。申すまでもなく島民は過去四千年間何一つの不平不滿を知らずに、極めて平和な狀態に惠まれて幸福な生活を味つて來たのであります、詰り私共の島民は幸福な生活といふ一つを歌ひ夢見て來たのであります。人間で誰も平和の生活を理解し、それを憧憬れない者はないでせうが、その點に於いて私共の島民は他の國の人間に比較して確に一日の長ありといつて差支がないと私は信じてゐます。然し今日事實に於いてヤクヰ島のことを知つてゐる者がない……ただ島民だけが自己の存在を樂しみ誇つてゐるに過ぎません。若し他日この事が全世界に知れ渡る日が來るならば、それこそ天地をひつくりかへすやうに全世界を驚かすに相違ありません。」

「して見るとヤクヰ島民の血は印度人の血で、閣下、あなたも印度人であるといつて差支がないのですか？」と後藤辯護士がタビット伯に尋ねた。

タビット伯は靜かに答へた。

「さうです、四千年の昔は印度人の血でしたが、今日では全然違つた特殊の人間になつて居ります。一言でいふと自然が私共を改造して了つたのです……南洋の自然は海岸に生える蘆だ、この蘆は一本一本樂器となつて澄み渡つた青い空へ音樂を奏でる。また南洋の自然は海岸を賞める蛇のやうな平和な波だ。この波は茫漠千里に擴がる海を越えて夢を運んで來る。誰か南洋の溫かい夏の夜を照らす星の美を見て驚かないものがありますか。私共はそれ等の星を見る時永劫の生命に觸れ、私共の島は四千年の歷史を持つてゐても、これを星の壽命に比較するとまるでお話にならない程短いものです……かういふ自然に養育された人間ですから、私共の島民がどんなにあなた達の人々と違つてゐるで有りませう。印度人は由來哲學的の民と言はれてゐますが、私共の粗先はヤクヰ島に入ると共に、詩と夢の人間になつたのであります。私共は南洋の自然に感謝してゐる理由は主として、私共に平和の美を敎へるからであります。」

かうタビット伯が雄辯に語つた時、大河内は心の中で思つた。「彼がたとへ狂人にしても中々乙なことをいふ奴だ」それからまた「彼のいふ所は新聞一欄を埋めるだけの價値がある」と思つて、自分

が臨時雇の社會記者であることを忘れてはならないと警告した。大河内は伯爵に向つていつた。
「あなたの南洋禮讃は謹聽に價しますが、それは論じないとして、私の特に注意したことは、卽ちアリバル王の血統がセルベス王で絕えたと仰つたことです……それでいつセルベス王は御崩去になりましたか？」
「まだ一年になりません。」と伯爵は答へた。
そして彼は靜かに語り出した。
「王樣の御崩去につづいて後繼者問題が重大であることは申すまでもありません。それで島民の心は一時の間この問題に獨占されてしまつたの感がありました。然しこの騷々しい議論の間にも島民は天から受けた責任を忘れなかつた……それは彼等が人類の文明を保護培養する前衞に立つといふ責任なのです。わが島民は不思議な神祕を握つてゐます。彼等は他の人間の智力以上に廣い範圍に生きて居ります、各世紀に稀れに生れる偉人を除くと、到底夢想だもすることの出來ないものを想像し、またそれを理解します、あなた達の國の哲人や、經濟學者や、科學者が組織的に陳述することの出來ない所を感知することが出來ます……一言で言ひますと、ヤクヰ島民は今後千年の世界を既に今日生活しつつあるのであります。」
「ああ、さうですか、して見るとあなたの島は私共より千年すゝんでゐるのですね。」と福原夫人は叫んだ。「千年たつと私共もあなたの島民のやうに成れるとおつしやるのですか。若し私の姪を狙擊

したやうな女が千年後の世界を代表するとすると、千年後の世界は、決して香ばしいものではありませんね。」
かういつて福原夫人は皮肉の微笑を洩した。然し伯爵タビットは何とも答へずにただ微笑を彼女に與へたに過ぎなかつた。彼はしばらくたつていつた。
「私は王樣の後繼者に關しヤクヰ島民の議論は騷々しかつたと言ひました。王樣の血統に近い人々の數もかなり多數に上つたので、彼等はそのなかの誰を選ぶかに惑はざるを得なかつた。或る一派の人は島の裁判を司る則ち司法大臣を王樣として崇めようと主張しました。然るに他の一派は遙かに理智的であり民衆的でもあつた、彼等は次の王樣は私共に永久動と第四次元の原理を敎へた一族のなかから選びたいと頑張りました……」
この言葉を聞いた大河内はいよいよタビット伯爵はキ印に相違ないと感じた。「ああ、最後の希望の綱は切れた、最早タビットは問題とするに足りない。」と彼は心のなかで叫んだ。そして彼はふざけ半分に伯爵に尋ねた。
「閣下は勿論それ等の二原理をお心得でありませうか？」
「ヤクヰ島民は誰もこれを理解してゐます……恐らくお國の神武天皇が御卽位になつた頃から知つてゐたといつても、決してそれは誇張でありません。」
かう伯爵はいつて退けてじろりと四人の顏を見廻した。そして彼はかう言ひたした。

「この第四次元の理解ですが、これがなかなか偉大なもので、詰りこれがあるために私共はヤクヰ島の神祕を維持することが出來るのです……分りましたか、御了解ですか？」

伯爵は再び四人の顏をじろりと見廻した。大河内は頭の天邊から足の爪先きまで震へるやうに感じた。彼は「タビットは果して信實を語つてゐるのだらうか、若し彼が信實を語つてゐるとすると、實に大變なことが世界に起つて來る譯になる」と心のなかで思つた。

タビット伯はまたもや語りだした。

「王樣の後繼者に關する議論と同時に島内を騷擾の巷たらしめたもう一つの問題がありました。それは島内一部の有力者が主張した所謂開國論でありました。彼等は新しい力は異つた國の人に待たねばならない、若しヤクヰ島が過去四千年間のやうに神祕の存在として推通すに於いては、島民の生命は自然に疲勞し衰弱せざるを得ない、故に今日未だ彼等の元氣の失はれざる時に於いて須らく外人の血を迎へて更新の策を計らねば駄目だといふ議論である。この議論の主張者は、古い印度の棕櫚の葉に既にこの豫言が明記してあるといつて、それを引用してまでも自說を頑張りました……そこで大きな騷動になつたのでありますが、開國論者も、然らば王室にも雜婚を强ひるかといふと、彼等の多數はさうまで徹底的ではなかつた。ヤクヰ島王室と王城の神聖はどこまでも保護しようと誓言して、愛島家の責任を盡すやうに見えましたが、恐らく彼等のなかには外國人を王樣に崇めて差支がないとさへ思つたものが少くなかつたのであります。」

「所で結局後繼者と開國論はどうなりましたか？」と後藤辯護士は、單刀直入に結論に入れとタビット伯に迫つた。

「この二つの難問題はさう容易に決せられる筈がなかつた……そこで全島民は嚴肅な誓言をたてて時機を待たうといふことになりました。彼等は偏見に捕はれない自由な心持で、神樣が機會を與へ給ふ時が自然に來るに相違ないといふことを知つて居りました。機會こそ最善の調停者なりといふことは昔も今も變りがありません。丁度この機會を待つといふ明言をしてから五日目の午後でした、海岸に立つてゐる見張り臺に載つて海上遙かを眺めてゐた見張番が、海岸を去ること一百哩の海上で危險に際會してゐる難破船一つを見出しました。そしてその船の人々は必ずや溺死したに相違ないと想像されましたが、島の内閣は直に潛航艇を派遣して救助せよと命じました……」

「閣下、一寸お待ち下さい。」と大河内はのり出して叫んだ。「一百哩の遠い距離にある船がどうして見えたでせう。」

「第四次元の祕密を握る島民にそれが見えなかつたならば、それこそ天下の不思議です。」とタビット伯は嚴然と答へた。「私はあなたがもつと理解のある人だと思つてゐました。私共の島ではお國の神功皇后三韓征伐時代に既に蒸汽船を使用してゐたことをお耳に入れて置きたい……決して自慢するのではありませんが、私共の島と他の國とは少々桁が違つて居ります。」

大河内はかう言はれて不愉快な顏を不二子孃の方に向け、彼女はどう考へるであらうかと思つた。

彼女は目を一層明快に光らせ、呼吸をはずませてゐた……疑もなく彼女は伯爵タビットの所説に非常な好奇心を傾注してゐたのである。彼女は『不可能の不能』といふことを疑ふほど野蠻人でなかつたのである。然らば後藤辯護士はどうであるかと見るに、彼は皮肉の微笑を謹直な態度に混ぜてゐたが、辯護士の職務として如何なる馬鹿げた話にも謹聽するといふ習慣がついてゐたためで、必ずしも伯爵の說に贊成したといふのでなかつた。福原夫人は正直に叫んだ。

「おやおや、私などは隨分古風な人間で、到庭伯爵のお話は分りさうもありません……伯爵は私共からいふと實際にないことをお話しになります。私の夫などはかなり進歩した思想の人であつたと私は思つてゐましたが、不可能は不能、可能は可能と明瞭に信じて居りました。」

不二子孃は心のなかで、「それは伯母さんの常識論よ」と叫んだ。今日誰も無線電信やラヂオを信じないものはない、如何となれば人々は實際に見つけてゐるからである。恐らく第四次元に對してもさうですから、見せられて初めて納得するやうでは萬物の長たる人間の沽券に關するやうに思はれる……といふのが不二子孃の意見であつた。

伯爵タビットは福原夫人にいつた。

「言葉で以て不可能の可能を說明することは困難で御座います。今假りに音樂の知らない人間が來てあなたにそんなものは存在しないと主張したらどうなさいます。あなたが音樂を知る道を知つてゐる以上、ただそれ等を知つてゐるといふの外はありますまい。然しそれ等の存在を言葉で以てそれ等を

知らない人間に說明することは、恐らく失敗に終るであらうと思ひます。」

「もつともです。」と不二子孃は叫んだ。

福原夫人は孃を輕く睨んでいつた。

「不二子、もう少しおとなしく口をおききよ、娘さんらしく……」

タビット伯は福原夫人に會釋しながらいつた。

「すぐあなたに興味のある事實をお話しいたします……外ではありません、潛水艇は歸つて服命しました、その時たつた一人の生存者を連れて來ました……」

「その生存者は照人でしたらう。」と福原夫人は叫んだ。

夫人の聲に應じて不二子孃も叫んだ。

「お父さんだ、お父さんでせう。」

伯爵タビットは頷いた、そしていつた。

「あなたのお父さんがヤクヰ島へ上陸なされると、島民のすべては不思議な靈感に打たれました……その心持は說明することが出來ないのですが、兎に角、全島民は針が磁石に吸はれるやうに父上の周圍にあつまる、一齊に聲を揃へて、『王樣萬歲』と叫びました。その時私は神樣が私どもに尊い『機會』をお送りになつたのであると感じました。私どもは父上の前に膝まづいて陛下と呼んだのであります。」

第五章　不二子孃の提案

伯爵の宣言は四人を驚愕せしめてしまつた。急轉直下といふ言葉があるが、タビット伯の物語は正にその勢で局面を開いた。

不二子孃の父親照人は何の目的を以て過去三年間南洋を放浪したか……もとより彼は立派な資產家で、自動車を飛ばし、第一流の旅館に宿泊し、食後に高價な葉卷をふかし、一等席にふんぞり返つてオペラを樂みながら、外國の旅行を續けるだけの財力を缺いてゐるのでないが、何故に旅行地を南洋に選んだのであるか、若し彼が倫敦にぶらついてゐる、或は巴里や紐育に遊んでゐるとすると、假令彼に何の目的がないにしても彼を問題とするに足りない。然し彼の旅行地が南洋であつてみると、彼を問題とするだけの價がある……少くも人の興味を引く値打がある。洒井照人は軍事探偵として日本政府から内密に南洋へ送られたのでないか。それとも彼はある日本の有力な財團を後にして商權を掌握せんが爲に獨身南洋へ乘込んだのでないか。殊に近來日本に於ける南洋熱は盛んである。米國の排日は日本人の眼を急に南洋へ向けさせるに至つたといつても不合理でない。恐らく洒井照人はかういふ雰圍氣から生れた一代表者であるといふと、それは漠然たる說明であるが恐らく眞實を缺いてゐないであらう。勿論・不二子孃にしても、彼が何故に南洋へ行つたかを知つてゐない、又彼等はつひぞそれを知らうともしたことがない。彼等は單に彼が妻を失つて身輕になつたのと

生來の旅行好きとが相からまつて南洋へ出かけた位にしか思つてゐない。

また大河内にしても、伯爵タビットの物語が餘りに急激であつたから洒井照人の南洋に於ける目的を想像してみるだけの餘裕が與へられなかつた。彼はただ彼を豹か鰐の革で張つた王樣の席に傲然と構へた人間としてのみ考へたのである。そして若しこれが實際であるならば、これこそ新聞の三面記事として少くも三欄を埋める價値が十分だと思つたに相違ない。

「何ですつて、照人が王樣になつたて？」と福原夫人は叫んだ。そして夫人はつけ加へた。

「王樣に似合ふでせうか？……脊の丈がもう少しほしいわね。」

「伯母さん、靜かにして頂戴よ。」と不二子孃は叫んで、伯爵の方へ顏を向け、「もう一度はつ切りいつて下さい。」と大きな聲でいつた。

伯爵はそれに答へた。

「あなたのお父さんはヤクキ島王照人陛下になられました。」

「照人陛下……すると私も王族になる譯ですね。」と福原夫人はまたもや叫んだ。

後藤辯護士は如何にも顧問辯護士らしい決定的な聲をだしていつた。

「奧さん、それは勿論です、王位に上つたものの一族は皆王族に相違ありません……ブラクストンの法律書に依つてもさう定められてゐます。」

「すると私は不二子内親王殿下ね。」と不二子孃は頓狂な聲ではなつたが感激の喜びに滿ちて叫んだ。

伯爵タビットは靜かに語つた。

「照人陛下七ケ月の治世は極めて賢明であり善良でありました。全島民は陛下の德を稱へるに適當な言葉を知らなかつたのです。彼等は日夜上に英明な王樣を戴いたことに對し神樣に厚く感謝いたしました。浪は平和な音律を奏して海岸を洗ひ、夢のやうな柔和な風は島の樹下に戲れました。丁度この時でした、ヤクキ島の潛水艇が王樣のお手紙と贈物を載せて私かに日本へ送られたのですが、しかしこの冒險は幾多の困難に出會つたがため、將來餘り輕々しく繰返さないことになりました。それ故にあなたに對する陛下の消息がぱつたり斷絕したのであります。」

「それからお父さんはどうなさいました……早く次を話して下さい。」と不二子孃は伯爵を急立てた。

「さてこれからがお話しにくいです……」といつて、タビット伯は躊躇した。

すると後藤は顧問辯護士としての責任を感じたものか、前へのり出して伯に接近していつた。

「それは私にだけお話しなすつては……話しにくいと仰ると何事ですか。」

「後藤さん、それには及びませんよ。」と不二子孃は後藤を止め、伯爵に向つていつた。

「どんな事でも御遠慮に及びません、どうぞ開けつぱなしにお話し下さい。」

伯爵は頭を一寸右へ傾げた。

そして彼は決心したといつたやうな樣子をして、言ひだした。

「かう申してお驚きになるかも知れませんが、實はあなたを探しにはるばる日本へやつて來たので御

座います。」

「私を探しに、」と不二子孃は吃驚したやうな聲を出した。「何かお父さんに問題が起りましたか？」

伯爵タビットは孃に答へた。

「問題が起つてゐなければいいがと思ふので御座います……といふのは、三月前に父上が急に見えなくなりました、これは眞に不思議なことで、どうなされたのかと憂苦措く所を知らずといふ譯で御座います。父上のお行方に關して何の手掛がないので、實は途方にくれて居ります。」

不二子孃は悲鳴をあげた。大河内はそれを聞いて胸が破れるやうに感じた。そして「問題がますます紛糾して來た」と思つた。福原夫人も叫んだ。

「それやどうした譯でせう。誰が照人を連れ出したのか、それとも自分で逃げたのか……いづれにしても照人に相應しくない。」

「奧さん、お靜かに……立派な紳士が姿を隱したことはどこの國にもある例なのですから。」と後藤辯護士は口を挾んだ。

不二子孃は歎願するやうに伯爵に叫んだ。

「もつと詳しくお話し下さい。」

「詳しく話せと言つてもお話しやうがないのです。」とタビット伯は答へた。「三箇月前に王樣を晩餐會にお招きしました所、喜んでお受け下さいました……それはいい晩で、星は金剛石のやうに煌き庭

の樹木は新しい王様の御代を壽く音樂を奏でました。王様の御機嫌殊に斜ならずで私共の滿足は譬へるに言葉なしといふ次第で御座いました。晩餐後の談話は夢のやうに流れました。私共が盡きない談話を打ちきつて王様をお送りしたのは眞夜中近くで御座いました。その時陛下は……」

「陛下は、」と福原夫人は無意識に伯爵を眞似たが、自分に返つた時顏を赧らめざるを得なかつた。

「……御健康に渡らせられて元氣御旺盛に見えました。」と伯爵は言葉を續けた。「然るに翌日午前に開催された御前會議に、どうしたものか王様は御出ましにならなかつた。そしてその時以來島民の誰一人も王様をお見かけしないといふことで御座います。」

「閣下、一寸お待ち下さい、王様の御出御にならない時誰が會議を司會いたしますか？」

かう大河内は伯爵に尋ねた。伯爵は彼に答へた。

「それは司法大臣の役なのです。」

「司法大臣といふと誰が勤めてゐますか？」と大河内は尋ねた。

タビット伯は謙遜な態度で答へた。

「かくいふ私がその榮職を辱めてゐるので御座います。」

「さうですか？」といつて大河内は伯爵を見上げた。彼は「この人が島民の一派から王様にしようと崇められたのだな」と心のなかで思つた。

不二子孃は伯爵に椅子をすり寄せて、聲を一層嚴肅にしていつた。

「あなたは王様の探索に關し、どういふ處置を取りましたか？」

「すべての手段を取りました、實際に有りと有らゆる手段を盡しました。島は決して大きくないので島の隅々まで探索の手を入れました……谷の奥やほら穴の蔭に至るまで、夜も晝も手を代へ手を代へてお探しいたしましたが、今日まで無駄な仕事と終りました。所でここに最も悲しむべく驚くべきことが見出されたので御座います。」

「それは何でしたか？」と四人の人が一齊に尋ねた。

伯爵が直に答へないのを見て取つて不二子孃は叫んだ、

「何もお隱しになるには及びません。」

「それでは、」といつて伯爵は靜かに語りだした。

「わがヤクキ島に一大寶物があります。それはアリバル王以來代々世襲的に傳つた寶石の小さい箱なので、各王様が死の床に横はり最後の瞬間に次の王様へ與へることになつて居つたもので、平日は島の最高議會が管理して來ました。」

「日本の三種の神器といつたやうなものですね。」と福原夫人は口を挾んだ。

「ヤクキ島の八尺瓊曲玉ですな。」と大河内も叫んだ。

「所でこの寶石箱なのですが、」と伯爵タビットは言葉を續けて語るのを躊躇した。

「それがどうしたといふのですか？」不二子孃は伯爵に迫つた。

「この寶石箱がです……」伯爵は決心したといふ音聲でいつた。「照人王が見えなくなつてから二日目に、等しく見えないといふ事が發見されました。島民の驚愕は絶頂に達しまして、その不安の騒々しさは全く語ることが出來ませんでした。」

「見えなくなつた……誰が隠したのでせう。」と不二子孃は第一に叫んだ。

「まるで第四次元が吸ひ込んでしまつたやうですな。」と大河内はいつた。

「全くさうです。」と伯爵は嚴肅に答へた。

そして彼は言葉を續けた。

「寶石箱が失はれたといふことはヤクヰ島民に取つて重大問題なのです、それは勿論申すまでも有りません……直に最高會議は布告を發しました。「若し寶石箱が一定の期間に發見されない場合、各島民は高い臨時税を拂つてその損失を償はねばならない。」といつたやうな布告です。前に申しましたやうにヤクヰ島は溫良平和な人民ですが、重大な臨時税と聞いては不平ならざるを得ませんでした。」

「一定の期間といふと、」と大河内は尋ねた。

「それがもう二週間で切れるので御座います。」とタビット伯爵は靜かに答へた。

不二子孃は叫んだ。

「まあ、どういふことになるでせう、大變な問題になりましたわね。」

福原夫人の顏は青ざめてしまつた、そしてその兩方の手は恐怖のために震へた。後藤辯護士も大河

内洋三もただ無言で、心配さうな顏をしてただ伯爵の顏を見詰めてゐた。

伯爵は言葉を續けた。

「申すまでもなく島民の中に澤山の人が照人王に身命を捧げて居ります。然し王樣に即位の節誰一人異存を挾むものが無かつたのですが、日が立ち感謝の情念が落付くに從つて、中には王樣が外國人であるといふことに氣が附いて來て、必ずしも反對ではないが即位當時のやうな熱誠を失つたものもあります。それに王樣と寶石箱の二つが同時に姿を隱した事が既に重大問題である上に、島民が重税を課させられるといふ危險を控へて、彼等が騒擾を極めたといふことは無理からぬ次第でありませう。今假りに王樣が出ておいでになつて、アリバル王以來の寶石箱を御持參にならないとすると……」

福原夫人はタビット伯に言葉を言ひ終らせずに叫んだ。

「島民は照人を殺すでせうか？」

伯爵は夫人の口から出た「殺す」といふ言葉を聞いて震へた。彼は白い齒で下唇をかみしめた。

そして彼はいつた。

「ヤクヰ島では死罪は想像も出來ません。私共は戰爭を信じないやうに死罪などといふ原始的刑罰を信じません。あなた達はまるで私共の人民を了解になりません。私共はあなた達の本能が古い野蠻時代の習慣のため墮落してゐることを悲しみます、あなた達の文明が支離滅裂になつてゐるのも自然です。私共に對して死は神聖な儀式であります、絶對境に貢納する最高なるもの、また最後の犧牲であ

ります。私共が死すると遠距離崇拜の殿堂へ運ばれ、その殿堂に於いて清められます。私共の島では刑罰の最大なるものを『空中の曝し』として居ります。」

「『空中の曝し』といひますと、」大河内は尋ねた。

伯爵は答へた。

「この最大刑罰に處する場合に、私共は罪人を一定の儀式に依つてその身を清め、しかして後彼を飛行船にのせて大空に放つのです……勿論この飛行船には底荷も砂嚢も與へませんが糧食は十分に積むことになつて居ります。詰り空間の大きな魂魄への生贄として彼の罪を消滅させるのです。」

「ああ、考へても恐しい事だ……若しお父さんが『空中の曝し』に處せられたら私はどうしませう。」

かう不二子孃は悲鳴をあげた。大河内は伯爵にくつて掛つた。

「あなたは死刑を否定しても、結局あなたの島ではそれと同じことを實行してゐるでは御座いませんか？　ただ眼前に斷頭臺の血を見ないといふだけで、舵のない飛行船に載せてつッ放せばいづれは死んでしまふ……『空中の曝し』の刑に處せられて生命に別狀がなかつたといふ例がありますか。然し私は理窟をこねてあなたと爭ふのではありません。ただ私はあなたに願ふ所は、この二婦人に同情を持つていただきたい……ただこれだけです。」

伯爵は大河内の議論に答へなかつた。彼は福原夫人と不二子孃へ向いていつた。

「私はあなた達を驚かせるためにお話したのではありません。私は眞實の尊重者です。ただ私は私

の知つてゐる所をお話したに過ぎません。」

この時大河内は開き直つて伯爵に詰問した。

「あなたの島では人命を取ることが嚴禁してあるとおつしやいました。然らば閣下にお聞き申したいのは、あなたの召使が何故に不二子孃を殺害しようと企てたのでありますか？　これは驚くべき矛盾ではありませんか？　いな自個否定の行爲と申さねばなりますまい。」

「私の召使は島でも特殊部落のものです。」と伯爵は答へた。「彼女の階級は過去幾千年間島で捕へたる動物を殺したりして生活をして來たものですが、中々立派な土地の所有者です。故に島の政府は重稅を彼女の階級に課して居ります。勿論知識的發達に後れてゐますが、烈しく感激的行爲をやつて退けます。わが島民が照人王を戴いて急に外國人に敬意を表したことに對しても少からず不平を抱いてゐました。私の召使もさういつたやうな感情が、生來の野蠻的本能を煽つたのでありませう……然し彼女もお國へ上陸するまで殺人なんどといふことは念頭に持つてゐなかつたに相違ありません。お國へ來てみますと殺人事件は殆ど毎日の出來事のやうです。その記事が日刊新聞三面記事の重要部分を占めて居ります。所で……」

「閣下。」と後藤辯護士は伯爵の言葉を遮つた。その聲は法廷で檢事の論告へ一槍突つこむやうであつた。

伯爵は後藤を相手にせずに言葉を進めた。

「彼女は思つたでありませう、『日本に於いては殺人行爲が是認されてゐる、少くも正義の動機から出た殺人行爲は神様もお許しになる』彼女が懷抱してゐた照人王に對する怨恨……怨恨と申しても極めて感傷的なもので本氣の沙汰ではありませんが、そのため不二子孃に危害を加へるにいたつたものです。」

不二子孃は椅子から飛上つて叫んだ。

「私はお父さんを探しに行きます、ヤクヰ島へ出かけます、伯爵、どうか私を連れていつて下さい。」

この言葉を聞いた伯爵の顏は稱讃の火で燃えるやうに見えた……不二子孃の美はしい姿と大膽な態度は彼を喜ばしたに相違ない。彼は彼女に頭を下げた。その時彼のもぢやもぢやした睫毛は薄黑い頰にその影を投げた。

不二子孃は嚴然として再び叫んだ。

「是非つれて行つて下さい。若しあなたが私を拒絕なさるならば、その時こそ私はあなたのお話全部を發表して日本の隅から隅まで知らせます。」

「勿論です。」と大河内は孃に贊成した。「私は私の新聞を利用してヤクヰ島の祕密を暴露して特殊な存在の出來ないやうにします。その上上野公園の博覽會か何かにヤクヰ館を作つてそれに參加しなければならないやうにして見せる。」

伯爵は靜かに不二子孃に答へた。

「實際を白狀しますと、私がはるばる日本へ來た使命もあなたを島へ迎へるに外なりません。若しあなたの父上が王城にお歸りなさらない時は、當然あなたをヤクヰ島の女王と崇めねばなりません。」

この時大河内はすべてが夢ではないかと訝んだ。そして若し眼前に起つたことが夢であるならば、願くば醒めてくれないやうにと希望した。今假りにジョウジの奴が部屋の外をたたいてお起きになる時間ですよといつたならば、大河内は彼の首をしめて息の根を止めるばかりだとさへ思つた。美はしい洒井不二子孃を食人鬼の島ヤクヰの女王と考へるにはどうしても夢でなければならないと心のなかで思つた。

「私がヤクヰの女王になるんですつて？」と不二子孃は叫んだ。

福原夫人は眉をつり上げ二つの脣を開けてびつくりしたといふ表情をした。「これは了解するに困難だ」といつたやうな心持で、瞬きした。

大河内は伯爵に尋ねた。

「閣下、私はあなたにお尋ねして私の蒙を開いていたゞきたいことがあります。第一にお尋ねしたい……あなたが不二子孃の父上に關してお話しなすつたことが事實であることを、あなたはどうして證明なさいます。」

「その事です。」と後藤辯護士は大河内に力を添へた。「その證明が立たない以上、到底あなたを信ずる譯にゆきません。」

この部屋に例の少年給仕が、手に美妙な細工の輕い楕圓形の手箱を持つて入つて來た。それがまるで虹のやうな見事な色をして、硝子に似たやうな材料から出來てゐた。大河内はそれを眺めた時、そのまぶしい位な幻のやうに非現實的な色彩に驚いて、七色三稜鏡よりもつと多くの色を持つてゐると思つた。

伯爵はこの部屋に大河内の頭のなかを讀んだものか、直にいつた。

「七色三稜鏡はとてもかういふ分光景を出すことが出來ません……どうかよくこれを御覽下さい。私はお國へ來まして、あまりに色の數が少いのに驚いて居ります。私共の島にある三稜鏡では七つの色が肉眼に見えます、そして他の隱れた五つの色は、度の高い顯微鏡を借りなければ見ることが出來ません。」

大河内は無言であつたが、これまで知識を邪魔してゐた不思議な戸が急にぱつと開いて、彼はその戸のなかに入ることが許されたやうに感じた。

伯爵は少年給仕から件の手箱を受取り、直にそれをぱちんと開けた。彼はなかから極めて薄い極めて輕い紙のやうなものを取りだした……それに洒井家の紋章が彫上細工で印刷されてゐた。洒井家の紋章といふと丸に二つ引であつた。この「丸に二つ引」の上に王樣の記號である王冠が飾りとなつてゐた。

伯爵はいつた。

「これはあなたの紋章に相違ありません。照人王は卽位されると同時にこの紋章をすべてのものにお附けになりました。そして幸ひこゝにあなたの父上のお手紙があります……陛下が私にお與へなされた命令が書いてあります。然しわがヤクヰ島では普通に無線通信が發達してゐるため文字が不用になつてゐますが、王樣の文書で絕對の祕密を要する場合はこの限りではありません、卽ちこの御手紙などは特殊の場合を說明する一例であります。どうかよく御覽下さい……洒井さんの手跡に相違ありません。それからヤクヰ島民は島本來の文字を捨てゝ使ひません、丁度波斯アッシリアの楔形文字や古代埃及のコプト文字を誰も今日使用しないと同じです。そして私共は世界各國の文字のなかゝら隨意に撰んで、その好む所のものを使用してゐます。」

「あなたの島は全然他の國と交通關係がないに係らず、あなたはどうして立派な日本語をお話しになりますか、どうしてそれをお學びになりましたか？」と大河内は伯爵に質問せざるを得なかつた。

伯爵ダビットはにつこり微笑した。そして彼は徐に答へた。

「あなた達は知識を漁るけれども細い外面的な比例の境地に彷徨して、絕對の心理に染み込んでゆくことを知らない、自然にものに魅入するの祕密が摑めない……餘りに理窟ぽい事を申上げて濟みません。然し今あなた達は私の言葉を御理解にならないとしても、いつか成程とお思ひになれるでせう。」

「もう少し直接に私の質問に觸れてお答がしていたゞきたい。」と大河内は重ねて尋ねた。

「それやお答した所で無駄です。」と伯爵は答へた。

「どうしてです。」と大河内はうたみかけた。
「かう申しては失禮かは知れませんが、あなた達が私共のやうに進歩なさると、自然に御了解になる……どうして他國の言葉を學ばずに自由に語ることが出來るかを。」
「あなたの島民は日本へ來れば直に日本語を話し、英國へ行けば英語を、佛蘭西へ行けば佛語を自由自在に喋べることが出來ると仰るのですか？」と大河内はいつて、「して見るとあなたの島民くらゐ調法な人間はないですね。」と叫んだ。
「さうです。」と伯爵は簡單に彼に答へた。
不二子孃は伯爵から小箱から出た照人の手紙を手に取つた、彼女はそれをしみじみ眺めて涙に滿ちた。それは確かに彼女の父の手跡であつたのである。
「照人の筆蹟は相變らず惡いわね。」と福原夫人は側から批評した。
伯爵は不二子孃に向つていつた。
「陛下が潛水艇であなたにお贈りになつた品物を私はよく今に記憶してゐます……白い鷺の群集を織りだしたタペストリーがあつた筈です、白い大理石のやうな貴重な石に刻んだ立像があつた筈です、珊瑚色をした石で作つた胸像があつた筈です。それから渦卷いた澤山の蛇で取りまかれ、十字架にかかつたスフィンクスの像が描いてある硝子の額があつた筈です。」
「よく御存じですね……みなさういふものを持つて居ります。」と不二子孃はいつて、不思議さうな

顏をした。
「大河内さん、他に何か御質問がありますか？」と伯爵は大河内に尋ねた。
不二子は感激の叫びを發した。
「最早や伯爵を疑ふ餘地はありません……私はもう十分です、何もお尋ねすることは有りません。私は直ぐにもヤクキ島へ出かけたう御座います……確にお父さんは島に隱れておいでになるに相違ありません、私はお父さんを探し出します。恐らくお父さんは危險な目に出會つておゐでだらうと想像します、私はお父さんを助けなくてはなりません。」
かういつて彼女は福原夫人と後藤辯護士の兩人を眺めていつた。
「伯母さん、後藤さん、私と一緒に島へおいで下すつて？」
「不二子、よく考へなくてわね。」と福原夫人は彼女にいつた。「氣を落付けてお呉れ……兎に角大變な問題だから、さう輕々しく決心してはいけません……さりとて若い娘一人をそんな處へやれやしないし、ああ、どうしたらいゝでせう。」
彼女は引續いて叫んだ。
「この年になつてかういふ大問題にぶつ突かるとは何といふ不幸でせう。もしや照人が食人鬼の娘を娶つて熊の子のやうな子供を持ち、大江山の酒呑童子のやうな生活をしてゐたら何としませう。」
「奥さん、御戯談仰つてはこまります。」と伯爵は冷かに微笑しながらいつた。「私が島の狀態をお

話しましたのにまだお分りになりませんか？」

彼は不平らしい口吻を洩した。

「あなたのお話は承はつて居ります。」と福原夫人は伯爵に答へた。「然し文明に進んでゐるのと後れてゐるのと、結局同じやうな結果になつてゐることが澤山あります……一例を申上げると、婦人の貞操問題の如き……」

大河内は無言でゐた。彼は不二子孃が意を決して親を尋ねに大海をのり切らうとする冒險心に對し深く動かされざるを得なかつた。彼はタビット伯に尋ねた。

「ヤクヰ島はどの邊にありますか。私はその位置をお聞きしたい……世界地圖に載つてゐないやうでは、勿論海底電線もなければ領事館も有りますまい。」

「ヤクヰ島の位置ですか？」と伯爵は直に答へた。「それは前にお話したやうにポルネシア群島を遠く離れて居りません、赤道直下南緯十五度位の處にあります。」

後藤辯護士は懷疑者であつた。如何なる場合にも想像を排斥し、彼はどうしても眼に見える事實の外何物も信ずることが出來なかつた。彼は今懷疑者らしい眼光を放つて、伯爵にいつた。

「お話に依るとヤクヰ島は考古學者や人類學者に對して一大研究資料たるを失はない。また必ずや海上探險者の垂涎措く能はざる所であらう……それが今日に至るまで誰一人知つて居らないとは到底信ずることが出來ない。お話のやうに島が果して世界無二の寶藏であれば、どうして人がそれを見出さ

ずに濟まして置かう……失禮ながら私はあなたを信じない。」

このヤクヰ島否定に對して伯爵タビットは少しも怒らなかつた。彼は穩かにいつた。

「緣なき衆生は度しがたしといふ言葉がわれわれの東洋にあります……詰りあなたがそれなのです。如何に私が說明してもあなたをいかんともすることが出來ない。數學者が口を酸ッぱくして微分積分を新聞賣子に說いた所でしかたがないやうなものでせう……これは少々言ひすぎたかも知れません、御勘辨を願ひます。然しあなた方の文明ももう直ぐ第四次元の祕密を知る程度に達します、そしてあなた方が今理解し夢見ることの出來ない事物をお知りになるのもさう遠い事では有りますまい。その時に於いてヤクヰ島も天下に知れ渡るに至るでせう。私は何も私を信ぜよとあなたに强ひるのでありません。私はたゞ眞實をあなたに語つたに過ぎません。私は今ヤクヰ島の位置を明瞭にお話しましたが、如何なる航海者でも羅針盤だけを持つてそこへ行けません。島民の水先案内がないと到底駄目です……重ねて申しますが、ヤクヰ島は祕密の島なのです。故に私はそれを語つてあなた方に了解を求めることは至つて困難な仕事なのです。音樂のハーモニーや繪畫の色を理解しない人にそれ等の美を說いても、全然效果ないと同じでありませう。」

「まあ餘計なことは他の場合に讓るとして、」と福原夫人は伯爵を遮り、「所で照人ですが、」と言ひださうとすると、不二子孃は側から伯爵に尋ねた。

「ヤクヰ島へ着くに幾日かゝりますか？」

伯爵は答へた。
「私は四日でここへ來ました。私の潛水艇は今横濱埠頭に隱れて居ります。」
「あなたは島の無線通信は完全だとかいひましたが、島の通信がこゝで取れない理由はなさゝうです。」と大河内は質問を發した。
この質問に伯爵はかう答へた。
「地球の屈曲が邪魔するので日本とヤクヰ島との通信は出來ません。實際をいふと私共はこれまで地球の屈曲といふことを考へませんでした。然しこの問題も他の方法で解決する見込が十分たつて居ります。」
「タビット伯。」と不二子孃は呼びかけて、「いつ出發しますか……出發前に用意することがいろいろありますので、」と大きな聲でいつた。
伯爵は孃に頭を踢めていつた。
「いつでも、あなたの用意が出來次第に。」
「明日……明日午後四時と決めませう。」と不二子孃は叫んだ。
「不二子、不二子……いよいよ、明日……お前決心したの。」と福原夫人は叫んで孃を見詰めた。
「後藤さん、あなたもお加はり下すつて？」と孃は辯護士に迫つた。
辯護士は柔順に答へた。

「醫師は私に海上旅行をすゝめて居ります。承知いたしました。」
そして彼は一寸考へてゐたやうであつたが、すぐ、「私の娘駒子もお供させてもいゝと思ひます。」とつけ加へた。
「伯母さん、あなたも行つて呉れなくては駄目ですよ、何もそんなにびくついたり心配することなんぞ有りやしないわよ。」
かう不二子孃はいつて、伯爵タビットの方へ向き、如何にも雄々しい聲でいつた。
「タビット伯、それでは明日午後四時出發といふことにしますから、そのおつもりに……してどこでお會ひすることに致しませうか？」
「私が横濱の海岸でお迎へして船へ御案内いたします。」と伯爵は答へた。……「然しこのことは決して他人に口外なさらないやうに願ひます。」
「承知して居ります、御安心下さい。」と不二子孃は伯爵に誓つた。
福原夫人は不二子孃に、「それではどうしても行かねばならないわね。」といつて、「この年になつて第四次元の國へ出かけるなんぞ恐ろしいやうな氣がする。」と叫んだ。
大河内はだまつて一言も發しなかつたが、「いろいろなことを考へねばならない」と思つた。然しただ一つのことだけは明瞭に心のなかで決して居つた……それは何であるか。若し不二子孃がヤクヰ島へ出發するに於いては、彼も如何なる工夫をしても同島へ出かけるといふことである。

今彼等四人は伯爵タビットの家を辭し去らうとするのである……伯爵は例の少年給仕を呼び、自分も一緒になつて彼等を玄關の入口まで送りだした。彼等は野外に出て日は早やたつぷり暮れて空に星の煌いてゐるのを見た。不二子孃はそれ等の星が何だか南洋の星であるやうに感じた。そして事實彼女は深川の貧民窟を歩いてゐるのであるが、彼女の頰を嘗める風は南洋の蘆の間を渡つて來る風であると思つた。

彼等は無言で二三町歩いた。勿論彼等は彼等が經驗した最も不思議な出來事を考へながら歩いたのである。彼等は一臺の圓タクを呼んで一緒に乘つた。福原夫人は腰を下した時唸り聲のやうな歎息を發した。彼女は兩眼をつぶつて獨語するやうにいつた。

「妙なことが起れば起るものだ。まるで狐に抓まれたやうな感じだ……もう何時頃でせう、時間など分らなくなつてしまつた。早く家へ歸つて熱い珈琲を飲んで、ゆつくり事實は事實、謔は謔と仕譯けをしなくては……不二子、お前の狙撃事件がこんな工合に廻轉して行くとは想像もしなかつたわね。」

不二子孃は何とも夫人に答へなかつた。彼女の頭は實際に渦卷いてゐる……またその渦卷いてゐることに一種の愉快を覺えた。彼女は夢のなかの計畫のやうなものを取りとめもなく考へた、またそれが堪らなく嬉しかつたのである。大河内も不二子孃と等しくいろいろな空想に耽つた。そしてそれが空想でなく實際に顯はれて來るやうに感じた。彼はお茶の水文化アパートメントの前で不二子孃と福原夫人と後藤辯護士の三人を自動車から下した。その時彼は福原夫人にいつた。

「明朝お訪ねしたいと思ひますがいゝでせうね。」

「どうぞおいで下さい。」と夫人は彼に答へた。

彼は不二子孃の方へ向いた。不二子孃は彼に手をさし延ばした。

「ほんとに有難う御座いましたわ。」と彼女は彼にいつた。「ほんとに有難う御座いました。あなたのお蔭でこんな事になりました……ほんとに有難う御座いました。それでは明朝お目にかゝります、左樣なら。」

大河内は彼等三人を下したので車内が廣く寬りしたから、兩足をながながと延ばした。彼は今お茶の水から神田の電燈が瞼しい程光つた町を通り、道を神田橋・取つて帝劇裏のアパートメントへ急いだ。彼の頭は不二子孃のことで滿ちてゐた。彼は自分の手が彼女に觸はられたので今にちくちく感ずるやうに思つた……それは實に嬉しい痛みであつたのである。

彼はアパートメントへ歸るや直に居間にはひつた。彼は居間の裝飾品を見廻はして、これを伯爵タビットの應接間に比較すると何といふ相違であらうと思つた……彼處には空を眞一文字に橋かける虹のやうなロマンスが潛んでゐる、此處にはそれが絕對にない、そしてあるものはたゞ近代的の便利と清潔とのみである。彼處には呪文のやうな詩歌がある。そしてその詩歌が蛇のやうに渦を卷いて不可解のスフィンクスを取りまいてゐる。此處には理智の井然たるものがあつてもどこまでも散文的である。彼は自分のアパートメントを「あゝ詰らない」と一蹴した。そして彼は、もうもう近代の散文化

した所謂文明に飽いた。一刻も早く神祕な託宣に觸れることの出來る永劫の殿堂へ行きたいと思つた。彼はタビット伯のいつた「空中の曝し」の刑罰から「遠距離崇拜の殿堂」のことを考へた……そして恐らくヤクヰ島なるものは確に自分の世界より千年も進歩してゐるに相違ないと思つた。

彼は心のなかで叫んだ。

「かういふ新しい世界があるのを聞いて、どうしてこんな所に愚圖愚圖して居られるものか……ヤクヰ島へだ、ヤクヰ島へだ。」

そして彼は更にかうつけ加へた。

「若し不二子孃が潛水艇でヤクヰへ出發すれば、勿論僕はアロハ丸で彼女を追跡する……これは既定のことだ。」

第六章　二人の一寸法師

翌朝大河内は早くから目醒めた。彼は一晩中眠れなかつた。夢を見通しであつた……ヤクヰ島と不二子孃とに絡まつた夢で、ヤクヰが大西洋上にあつて、なかに銀座通りが走つてゐたり、不二子孃が實在のやうな無いやうな、最初は自分の愛人であつたが遂に娘となつて消えたりした。彼は馬鹿げた夢を見たと思つた。彼は寢室のブラインドをあげ、窓を上へ透して初夏の新しい空氣を入れた。ジョウジが運んで來た輕い朝飯を寢臺の上で取つてから、彼は寢卷を外出用の洋服に着替へた。居間へ下

りて椅子に腰をかけ、一二本卷煙草をふかしがなら朝刊日東新聞にざつと目を通した。

彼は今自分の家を出て日比谷公園を散歩してゐる。時間はまだ七時前で、公園内にぶらぶら散歩してゐるものは彼の外に誰もゐなかつた。彼はこんな猫額大の公園は大都會に相應しくない、殊に產毛みたやうなつまらない樹木が一面に密集してゐるのは面白くないと人にも語り新聞にも書いた事があつたが、今かう朝早くそのなかを散步してゐると意外にも廣いといふ感があるのに驚いた。彼は殊に池の邊は惡くないと思つた……ベンチに腰をかけて正面に向うの土手に生えてゐる大きな樹木を見ると、彼は舊日本の遺物として敬意を拂ひたいと思つた。彼は公園を步きながら清淨な空氣を十分に呼吸し、將に來らんとする活動に用意するのだと思つて微笑した。彼は心のなかで「黃金時代の雰圍氣に生きるといふ感じ」はこんなものでないかと考へた……黃金時代の魂とは何だ。豫期しないものに憧憬れ青春の生氣を味ふの氣分が卽ちこれだ。大河内は新しい日光の世界が彼を待つてゐるやうに感じた。否この世界の門戸のなかに彼は既に入つてゐるとさへ思つた。

昨晩大河内はアパートメントへ歸つてしばらく休憩してから、直ぐ日東社の編輯局に顯はれ社會部長横井はゐないかと尋ねた。横井は帝劇で芝居を見物してゐる筈だといふことを確めたので、大河内は帝劇へ出かけ、劇場の入口で顏馴染の帝劇事務員に會つてこの用件を話した。それは呼びだして上げませうといふことで、大河内は暫時の間入口で待つてゐた。横井は出て來て「これから中幕だ、見ずに捨てるのは殘念だな」と吃きながら、大河内を劇場の小さい應接間へ案内した。大河内は朝から

の出來事を大體彼に物語つた。そして重要な題を殊に詳しく話した。

横井がプログラムの端を嚙みはじめたのを大河内は眺めて、「先生の興味は高まつたな」と思つた……熱心になつて來ると新聞だらうが本だらうが無意識にその端をかじる。これが横井勉社會部長の惡い習慣である。それから彼にもう一つの癖がある。それは彼が無闇と武骨な手で頭の髪を搔き始めることである。今彼は大河内の話を聞きながら、現にもぢやもぢやの頭髪をやたらに搔き始めてゐるのである。

彼は大河内の顏をぢつと見詰めていつた。

「こいつは大變な大問題になつて來さうだな……偉い三面記事だ。」

「僕も全く驚いてしまつたと。」大河内は投げるやうに、横井へ叫んだ。

横井は一寸考へて、そしていつた。

「所で君は、君獨りでこの重大な事件を取扱ふことが出來るかね。」

大河内は答へた。

「それや取扱へるとも言へるし、取扱へないとも言へる……然し僕には自信がある。」

横井は無言で大河内の顏のみ見て居つた。大河内は言葉を續けた。

「一つ徹底的に本事件を取扱つて見たいと思ふのだがね……勿論ヤクキ島まで出かけて調べて來る。かし部長に約束して貰ひたい事は、僕がこの問題を研究する間絕對祕密にして置いて貰ひたいのだ。」

だが……」

横井は額に小皺をよせて「困つたことをいふな」といふ表情をした。

大河内は更につけ加へた。

「福原夫人と不二子孃のことを新聞に書きたてないやうに……非常に新聞を恐れてゐるのだから……兎に角彼等の立場を理解してやつて呉れ給へ。」

「君馬鹿な事をいつちや困るよ。」と横井は怒鳴つた。「君、君が社會記者だといふ事を放棄しちや困るね。日東新聞初まつて以來の大特種を摑んだのだ、それを臺なしにしちや詰らないぢやないか。」

横井は少し間を置いて言葉を續けた。

「君、よく考へて見給へ、今度君が摑んだ事件は國家の一大問題になつて來ないとも限らない……國家が軍艦に兵隊を派遣して、その結果新島の發見占領となる、總督府の新設航路の開始となる、といつたやうな譯で……況んや本事件を最初に嗅ぎ出した日東新聞記者大河内洋三の名譽は申すまでもなしさ、それに引續いて日東記者全部の社會上の地位が一段の高きを加へる……おい、おい、大河内しつかりしろよ、第一に新聞特種興味を尊重することにしようぢやないか。馬鹿は抜きにして仕事本位で行つて呉れ給へ。君が社會面記者だといふことを忘れてくれては困るよ。」

かう言ひ終つて横井は急に顏の色を柔和にして大河内に尋ねた。

「タビット伯といふ奴はどこにゐるのかね……彼は幻ぢやあるまい、僕は彼の宿所を聞きたい。」

「僕は今それを明かす譯にゆかない。」と大河内は靜かに答へた。「兎に角、それだけは一寸待つて呉れ給へ。」

「明かされないつて？」と横井は叫んだ。そして聲を和げて大河内にいつた。

「次の幕が明きさうだからこれで失敬する……明朝九時に出社して呉れ給へ、いづれその上の相談にする、失禮。」

大河内は社會部長がでぶつとした體をふりふり應接間を出てゆく姿を見送つて、帝劇を辭した。そして彼はアパートメントに歸るや否や、ジョウジに「浴室の用意はいいか」と尋ねた……ざぶんと二十分も熱いお湯に浸つた。そして出るや否や蒲團を被つて睡眠についたのである。

然るに彼は安眠することの出來なかつたことは前にいつたやうで、今彼は洋々たる冒險の前途を考へながら日比谷公園を散歩してゐるのである。彼は靜かに歩きながら社會部長と交換した對話を考へ直した。彼は横井の好人物であることは全然認めてゐるが、横井に暴君の一面があることをよく知つてゐる。横井は事苟も彼の本職に關すると何物も假借しない男である。彼は極めて機敏鋭利であるが、編輯局内でその權利を主張しすぎる場合がないのでない。大河内はどうして社會記者としての職責と不二子嬢への箇人關係とを融和させようかと考へた。

彼は日比谷公園からアパートメントへ歸り、二十分ばかり居間で休んでから直ぐ日東新聞社へ出かけた。社會面の編輯部には部長が既に出社してゐて、机の上の原稿らしいものを讀んでゐた。横井は

大河内を見ていつた。

「昨夜は失禮したよ、こゝに君に宛てた那須の手紙がある……逗子あたりから出したらしい。」

大河内はそれを受取つて開封した。横井がいつたやうに逗子から投函した手紙で、今日上陸して老探訪高田憲をつれて歸ると書いてある。そして「高田は陸上では英雄だが海上へ來るとまるで海綿のやうに意氣地がない。」と附言がしてあつた。

「部長、那須が高田を今日連れて歸ると書いてある……高田は隨分船に弱いと見える。那須は高田によく虐められてゐるから、この時とばかりに高田をこき落したらうね。」

かう大河内がいふと、社會部長は大きく笑つていつた。

「僕は高田の水に意氣地がないことを知つてゐる、然し彼は毎日何かしら新聞種を嗅ぎ出さないと承知が出來ない不思議な動物だ。彼は編輯局を離れて一日も生きてゆけない男だ。それで遊船生活につらくて堪へられないのだらう。」

「して見ると矢張日東の國寶記者ですかね。」と大河内は皮肉に微笑していつた。

「さうだ。」と横井は頷いた。

大河内はいつた。

「國寶記者でも彼は陸上の國寶だ。然し今回のやうな事件が起ると憚りながら僕の獨壇場かね。ねえ部長、若し僕が今日出發するとなると、僕は少くも二人の記者は連れて行きたいのだがね……那須と

もう一人だが、小柴は貸して貰へないだらうか知らん。勿論部長自身に行けるとこんな結構なことはない。」

「僕に行けつて？」と横井勉は唸つた。「どうして僕が行けるものか。考へて御覽よ、僕がゐなかつたら、日東社會面はどうなる。」

「それもさうだね。」と大河内は輕く答へて、横井を見あげた。そして彼はいつた。「那須が社へ來たら、正午に相違なく僕のアパートメントへ來るやうに傳へて下さい。そして僕がゐなかつた時は、僕を待つてゐろといつて貰ひたい。」

小說擔任記者小柴勝次は手に大きな鋏を持つて外國新聞の洒落を切りぬいてゐる。彼は切りぬいた英語の洒落を飜譯記者へ廻はし、小說面の空間に入れるためである。彼はかういふ仕事をしてゐる時、小さい愉快な聲を出して流行唄を唸るが、今も何か罪のない小唄をうたつてゐる。大河内は彼の側に歩いて行つて、彼の肩をたゝいた。そして大河内は小柴にいつた。

「小柴、僕は今晩或は遊船に乘つて南洋へ出かけることになるかも知れない。部長は那須と君を同行してもいゝといつてゐる。君は行く氣があるかね。」

「無論同行するよ、僕なんざ出かけるに手間も隙もいつたことではない……三十分で用意が出來る、連れて行つて呉れ給へ。」といつて、小柴はにつこり笑つた。

大河内はいつた。

「それぢや約束濟みだ。然しこのことを口外しちやいけないよ。」

「おつと承知。」と小柴は答へて、唄ひのこした小唄のあとを唸り始めた。

大河内は今日東新聞社の編輯局を飛びだして圓タクに乘り、再び昨日の深川新網町十九番地さして急いでゐる……彼は自動車に搖れながら、再び心にあの驚くべき不思議な伯爵タビットのことを考へた。彼に解決すべき澤山の疑惑がある。彼は思つた、「もう一度彼に會つて話したならば、おそらく彼はそれ等の疑惑を氷解して呉れるであらう」伯爵は大河内に神祕の世界の戸を一寸開けて見せた……この世界は死の世界のやうに現實的知識の彼方に横はつてゐる。そして大河内に不安を感じさせた。驚異と疑念とを浴せかけた。彼は是非共もう一度伯爵に會つてこの世界の消息に親しまねばならないと思つた。

彼はなぜ伯爵が帝國ホテルとか東京會館とかいふ第一流のホテルを避けてかういふ貧民窟を選んだかと考へてみた。彼の使命は絕對的祕密を必要とする。人の評判に上つてはゐけない。それで特に深川の新網町を選んだのであらうと大河内は思つた。そして心のなかでいつた。「貧民階級の人間卽ち勞働社會の人間は自分の仕事に忙しいので、他人の事を疝氣に病むやうな餘裕がない。彼等の注意する所は美人の着物か甘い食物の香氣位のものだ。隣家の主人が南洋の土人だらうが英國の總理大臣だらうが、そんなことを誰も注意しない。彼等に好奇心が缺けてゐるのでなく、實際に彼等は自分だけのことに追はれてゐるのだ。故にタビットはかういふ場所を選んだのだ。彼は賢明だ。新網町にさへ

隱れてゐれば、彼は一年でも五年でも人に注意されずに住んで行ける。」

大河内は昨日のやうに自動車を新網町の入口で捨てゝ、足早にタビット伯爵の家へと歩いた。彼はそれを見上げて「この家に神祕の寶藏へ入る鍵を握つた男がゐる」と思つた。彼はつかつかと玄關前へ進んでベルを鳴らした。何の返答もなかつた。彼は再びそれを鳴らした……前のやうに返答がなかつた。彼は入口の戸をぐいとなかへ推した。戸は開いた。

「おやおや、あき家だ。」と彼は叫んだ。

彼は無意識に家のなかへ入つた……彼はするりと吸ひ込まれたやうに感じた。彼は應接間に入つた……昨日伯爵が七色三稜鏡の分光景のやうなロマンチックの雰圍氣の中で不思議な話をした應接間が何一つもないがらん洞になつてゐるのに驚いた。赤の羅紗で張つた椅子や長椅子はどこへ行つた、柱から下つてゐた銀の電燈器はどこへ行つた。お寺の天蓋みたやうな絹の旗はどこへ行つた、部屋の中央にあつた三脚臺と青銅の平圓盤はどこへ行つた。平圓盤に彫つてある蛇とスフィンクスはどこへ行つた、彼は全く呆氣に取られて開いた口がふさがらなかつた。彼は應接間からその他の部屋を探しても何處の隅にもタビット伯を見出すことが出來なかつた。彼はただ茫然として昨日のタビットが實在の人間でなく、彼が話した物語は空虛な僞りに過ぎなかつたかも知れないと感じ始め、僞り話としては驚くべき破天荒のものであつたと思つた。

彼は實際に狐に抓まれて戸惑ひをしたやうな感じて應接間の床を、靴の踵でたたきながらあちこち

歩いてゐると、彼の目に足許に落ちてゐる紙の切れが映つた。彼はこの皺くちやになつたものを取りあげて見た……それは伯爵が小さい手箱のなかから取りだした洒井家の紋章と王冠とが入つた紙の上に照人が手紙を書いたものであつた。彼はそれを自分のポケットのなかに入れた。そして彼は家の外へ出てしまつた。

彼はその邊に遊んでゐる小供を捕へて「この家に住んでゐた人はどこへ引越したかね。」と尋ねた。子供は大河内に答へた。

「眞黑の顏の伯父さんはね、今朝早く荷物をトラックに載せて何處かへ行つてしまつたよ……どこへ行つたかつて、僕は知らない。」

大河内は新網町の入口に待たせて置いた自動車に飛びのつて、お茶の水へ急いだ。彼は自動車のなかで、若し文化アパートメントで不二子孃も福原夫人も伯爵同樣に消えてしまつて居つたならばどうしようかと思つた。彼は第一に社會部長横井勉に會せる顏がないと思つた。それから彼は横井に「馬鹿げた夢物語を臆面もなく喋べりたてて人騷がせするにも程がある」と怒鳴られるに相違ないと思つて、全身が震へて來るやうに感じた。大河内がお茶の水へ着いたのは十時を一寸過ぎたばかりの頃であつた。彼は心のなかで、福原夫人と不二子孃がゐて呉れるといいと思ひながら、アパートメントに入るや直ぐエレベーターに乘つて彼等の部屋を訪づれた。

彼は直に應接間に通された……この時彼はまづよかつたと思つた。應接間は極めて亂雜な狀態に顚

覆つて、誰が見ても出發用意のためだと受取られた。すべての椅子や長椅子や机には白いリネンの覆ひが被せられ、珍重な骨董品はどこへかしまい込まれ、船室トランクが三つ轉がつて居つた。そしてそれ等のトランクは鍵のついた革帶でしつかり結へられてゐた。

「昨日は失禮しました。」とにこにこ笑ひながら不二子孃は次の部屋から出て來た。彼女の聲はすずしい鈴のやうに大河内の耳に響いた。彼は不二子孃の顏が少し青ざめてゐると感じた……然しその爲昨日よりもつと美人に見えると思つて嬉しく感じた。彼女は昨日のやうに洋裝をして、外出用の帽子さへ被つてゐた。大河内はその帽子についてゐる飾りの花も彼女を一層美花すると感じた。彼女はそこに轉がつてゐるトランクの一つの上に腰をかけた。彼女は部屋のベルを鳴らした……すると給仕の女がお盆の上に珈琲と燒いた麵麭と玉子を二つ載せて持つて來た。そしてそれをもう一つのトランクの上に置いた。不二子孃は大河内を眺めながらいつた。

「今朝飯をいただく所なのですよ、あなた珈琲を一杯おつき合ひなさらない……伯母さんは今齒醫者へ行つて留守なのですよ、もう直ぐ歸つて來る筈ですが……」

大河内は福原夫人の不在なのを非常に嬉しく感じた。

大河内は不二子孃にいつた。

「あなたはいよいよ今日御出發になるおつもりですか？」

不二子孃は頷いた、そしていつた。

「午後四時に出發します。後藤辯護士も一緒においで下さるし、辯護士のお孃さん駒子さんも御同行なさいます……私どんなに氣强いか知れません。勿論タビット伯はまだ駒子さんが同行なさいますことをお知りになりませんが、別に御異論はあるまいと思つてゐます。」

大河内は彼女に尋ねた。

「タビット伯はどこであなたに會はれることになつて居ります。」

「あなた横濱の檢疫所を御承知で御座いますか？　私共はそこで出會ふ事になつて居ります。そして直ぐ潛水艇に乘り込むことになつて居ります。あなた潛水艇にお乘りになつたことがありますか？別に怖くはないでせうね。どんなに早く走るかと思ふと、私心配で堪りませんわ。」

「そりや早いに相違ありません。タビット伯は四日で日本へ來たと言ひましたから。」と大河内はいつた。そして彼は言葉を續けた。

「早いの遲いのと言つちやゐられません。お父さまの一大事に出かけるのぢやありませんか？」

不二子孃は無言で何とも言はなかつた。しばらく立つて、彼女は大河内に伯爵が人を送つて萬事が時間通りに準備してあるといつて來たと語つた。大河内は彼女に彼が新網町へ出かけて家があき家になつてゐたことを語らなかつた。彼はそはそはと心が落付かなかつた。といふのは彼もヤクヰ島を目掛け彼女を追つて行くつもりだといふことを白狀していいか惡いかを知らなかつた上に、彼は今に福原夫人が歸つて來やしないかと恐れたのである。然し彼は不二子孃が彼に福原夫人に關する心配は無

用だと囁くかのやうに感じた。
「珈琲をお飲み下さい。」と不二子孃は彼にいつた。「大河内さん、これが日本に於ける私の最後の朝飯になるかも知れません……ほんたうに私は大變あなたに御厄介になりました。」
「どういたしまして、」と言つて大河内は手を振つて微笑した。「お禮で痛入ります。私は好きで今回の問題に關係したのですから……實際私は我儘ものなのですよ。現にあなたの忙しい中をこんなに坐り込んでるなど、私の我儘には呆れます。」
不二子孃は叫んだ。
「いいえ、少しも忙しくはないのですよ。」
この時大河内は、目前に大遠征を控へながら悠々としてゐる不二子孃の態度は見上げたものだと感服した。彼女は前に潛水艇に乘ることを恐れるやうにいつたが、それは婦人につき物の輕い虛言で、本當の彼女は驚くやうなことを氣樂にやつて退ける女だと彼は思つた。そして彼は「彼女は或は八丈島邊へ出かける位にしか思つてゐないやうだ」と心のなかで思つた。彼は彼女に尋ねた。
「ヤクキ島へ行つてあなたはどういふことをなさるおつもりですか。勿論お父さまを探すといふ大きな仕事があることは申すまでもありませんが、兎に角あなたは不思議な南洋の島へ、よしんば伯母さまと駒子さんとか御一緒にしても、若い身そらでおいでになつてどうなさるでせう。」
かういつて大河内は彼女を眺めた。

すると彼女は眞面目な顏をして彼に向つて答へた。
「私がヤクキへ行つてどうするつて、そりや分りませんわ。ただ私は今どんな事があつても出かけなくてはならないといふことだけ知つてゐます……それだけですよ。」
「私の敬服するのはあなたのその勇氣なのです。」と大河内は叫んだ。
「あら、勇氣なんて有りやしないの。」と、不二子孃はいつて顏を薄ら赧らめたが、直ぐ言葉を續けた。
「女でも切羽詰れば勇氣も自然に出ると自分で驚いてゐます。また神樣も私をお助け下さると信じてゐます……耶蘇信者でもないのに、この場合だけ神樣を呼びかけては神樣も御迷惑でせうが……」
かう彼女はいつて微笑した。
大河内は彼女の言葉の後を受けていつた。
「神樣ばかりでなく私もあなたをお守りします。私はあなたにアラディン式のランプを上げませう。あなたが助けを叫んでそのランプを擦ると、私が飛びだして來るやうにしませう。」
不二子孃は手をたたいて笑つて。
「だがあなたが日本で飛びだしたつて何にもならないわ。」と彼女はいつた。
「勿論ヤクキで飛びだしますよ。」と大河内は彼女に答へた。
すると彼女は彼にいつた。「ヤクキで飛びだして下さるつて……あなたもヤクキへいらつしやるの。」

「ヤクヰだらうがどこだらうが、あなたのおいでなさる所へいつてあなたをお守りします。」
「あらさう、有りがたう。」
かう不二子孃はいつたが、急に眞面目な顏を作つて大河内を眺めた。
「私が南洋へ行つて蘭の實や椰子の露をすすつて日本語や日本のことなどすつかり忘れてしまひ、守護神のあなたさへ見覺えがなくなつてしまつたら、隨分變ですね……實際そんなことにならないとも限らないですね。」
大河内はこの言葉を聞いて愉快さうに笑つた。彼は不二子孃にいつた。
「そんな場合に私は幸四郎の聲色でも使つて帝劇の舞臺をあなたに思ひださせます。私は熊野の一節を唄つて長閑な日本の春をあなたに甦らさせます……どうしてあなたが日本を忘れることが出來ませう。あなたがヤクヰ島へおいでになり島の女王にお成りになつて、あなたの前に千人も眞黑な裸の家來が膝まづき、頭に被つた羽の帽子が動いて柔かい風を起すと、その風に乘つて天麩羅や鰻の香がぷんとするでせう。又あなたが海岸を打つ靜かな波の音を聞いておいでになると、きつと藤原義江の美はしい聲が混つて響いて來るでせう。故鄕忘じ難しといふ言葉もあります……どうして日本が忘れられませう。況んやあなたは第四次元の國へおいでになる。タビット伯がいつたやうに島民は世界どこの國語でも話すとすると、あなたが他の言葉をお話しになつて日本語をお忘れになるといふ理由もありますまい。然し私の見覺えがなくなるかも知れないと仰ると、これは困りものですな……また

その上あなたが家來に命令なすつて『彼の首をはねよ』などと仰ると、愈々大變な事になります。」
かう喋つて大河内は大きく笑つた。不二子孃もそれにつられて笑つた。「あなたの首を切る頃には私が澤山土人の首をはねて修行をして置きますから、工合よく命令をかけてあなたをお喜ばせします……どうか御安心下さい。」
かう不二子孃はいつて重ねて賑やかに笑つた。
不二子孃と大河内は古い古い無邪氣な黃金時代の雰圍氣に包まれ、自分共二人は魔法のなかから生れた小さい人形ででもあるかのやうに感じた。彼等は遠く現實の世界から離れて、所謂不可能の可能の神祕に生きてゐるやうに思つた。彼等は未曾有の愉快な世界にゐると感ぜざるを得なかつた。
「兎に角、不二子さん。」と大河内は自分に歸つて彼女を呼びかけた。「假令あなたが私の首をはねなければならない場合になつても、どうか私を記憶して置いて下さい。」
「あなたの何を記憶して置けと仰るの……あなたの御親切をですか。」と不二子孃は彼に叫んだ。
大河内は熱心な聲で彼女にいつた。
「あなたの成功を誰よりも一番熱烈に希望してゐるものがゐるといふことをです。またあなたの命令さへ下されば直に飛びだす用意をしてゐるといふことをです……私は微力なものですが、あなたのためならどんな仕事をも苦しいとは思はないので御座います。」
「ほんとにあなたは親切なお方ね。」と彼女は靜かにいつて、大河内に感謝した。そして彼女はかう

言ひかへた。
「あなたのこれまでの御盡力だけでも大變なものです。今度の間題を工合よく運んでくだすつたのは全くあなた獨りの助力であると感謝して居ります。」
「どういたしまして。」と大河内は嬉しさうにいつた。そして彼は言葉を續けた。
「あなたの危險な場合に誰かがお助けしなければならない、そしてそれを私が引受けたいのですよ。私はあなたの命令をいつでも待つて居ります……どうか御命令を下してください。あなたは女王で、私はあなたに奉仕する奴隷で御座います。」
「そんなに仰られると私の體が擽つたくなつて來ます。」と彼女はいつた。
「時に午後四時の御出帆ですね……それでは一時と二時との間に來て、あなたを横濱までお見送りいたしませう。」と彼はいつて、不二子孃の返答を待つた。
不二子孃は喜んで彼に同意していつた。
「是非見送つて下さい。伯母さんも私もどんなに嬉しいか知れません……大河内さん、潛水艇といふと軍艦で一番小さいのでせうね、あなたどんな軍艦だか御承知ですか？」
大河内の軍艦知識もさうたいしたものでなかつた。彼は彼女に明確な返事を與へることが出來なかつた。然し彼はこの瞬間にただ二つだけしか考へてゐなかつたのである、卽ち彼が彼女とかうしみじみ膝を交へて話してゐることと、もう一つは彼は今にも福原夫人が歸つて來て彼の樂園は破壞される

といふ心配であつた。
彼の女に對する知識と經驗は左程深く廣いものでなかつた、然し滿更彼にそれを語る資格がないのでもなかつた。彼が幼少の頃田舍の町を走つて歩いた時代、素人芝居の催しが町にあつてそれへ町の婆藝者の娘が出たことがある。彼はその娘に無邪氣な戀を感じて、つけ文しようと思つて藝者屋の家の周圍を三回も四回もうろ付いたことがある。これがそもそもの初戀で、彼は第二回目の戀を矢張り新橋の半玉に感じたことがある。彼はその頃京橋に住んでゐたので、芝の學校へ朝通ふ時しばしばこの半玉が家の前を大きな箒で掃除してゐるのを見掛けた。彼は彼女の細い長い頸筋が如何にも綺麗で食ひつきたい程だと思つた。其後この女が新橋第一流の名妓になるに至つた頃彼は渡米したが、その際彼のトランクに彼女の寫眞を入れることを忘れなかつた。渡米後の戀物語は二三でない……彼は自分を可愛がつて呉れた二十も年上のある後家さんに戀をしかけたことがある。彼はこの老婦人を專有しようと思つて彼女の友人さへ殺してやらうと計畫したことさへあつた……彼はこの事を思ひだして今日でもその馬鹿馬鹿しさとその當時の熱心に身震ひを感じざるを得ない。彼はその後紐育で女文學者と懇意になり、遂にその女と戀さへ語るやうになつたが彼に最後の決斷力を缺いたがため、到底結婚といふ舞を演ぜずにしまつた。然し彼は女に關する過去の經驗を考へて、未だ嘗て心から女を戀したことがあるとはどうしても言へないやうな氣がしてならなかつた。所で不二子孃に對してはどうか……兎に角彼は一方ならない興味を感じてゐる。實際に彼はこの若い娘のやうに寸氣喚發でしかも

近代的な女性は少いと感服したのである。

然るに彼は彼女を知つたばかりで今この數時間に別れなければならないことを考へると、如何にも苦しいと感ぜざるを得ない。彼は少しも長く福原夫人が外から歸つて來ないことを祈つた。福原夫人は平凡の魂である、彼女はロマンスの主張者でない、妖術の破壞者である。若し彼女を女神であるとするならば、これは常識を楯に取つて人の情調に干渉することを辭しない、出しや張り好きの女神である。今彼女はッはッと荒い呼吸をしながら不二子孃と大河内との間に飛びこんで來た、そして不二子孃に叫んだ。

「早く珈琲を一杯頂戴よ、餘りに急いで歸つたから息が出來ない。」

そして大河内の方へ向つていつた。

「お早う御座います。昨日は失禮いたしました。」

夫人は不二子孃がさしだした珈琲のコップを受取り、一口飲んでそれを下に置いた。彼女の手はぐにやぐにやと柔軟で圓々と肥えてゐた。その手首を見ると一本太い皺が紐のやうにぐるつと卷いてゐた。彼女は不自然なあるものが生來の性質の上にくつ附いて、その自然の姿が臺無しになつてしまつたやうである。一見すべてのものを引搔き搖つて歩くといつたやうな女だが、常識が彼女の感傷を平凡化したので多少滑稽じみた所もある。譬へると水の表面を引搔いて飛んで行く鳥のやうでもある。今彼女は大忙ぎで歸つて來たが、椅子にすわつて珈琲を飲んでゐると、何故に彼女がさう忙しかつた

かをけろりと忘れてゐるやうである。彼女は不二子孃が落付きはらつて大河内と對話してゐるのを見て、何とはなしに不平らしく見えた。

福原夫人は不二子孃にいつた。

「齒醫者から例の醫者へ廻はつて頭痛のお藥をいただいて來たの……お醫者は旅行先の氣候もはつきりしないからといつてたが、それかといつてヤクヰ島へ出かけます、とも言へないから困つたのよ。それから着物に蟲がついても閉口するからね、澤山樟腦を買つて來たから、お前にも分けてあげます……しばらく買はないうちに、樟腦の高くなつたこと、ほんたうに驚いてしまつたの。それからいつも買ひたいと思つてゐた耳搔に、よく切れる鋏と、物差一つ、熱い場所で蚤がゐやしないかと思つて蚤取粉二箱に、推出し齒磨、皆揃へて來ました……何か忘れものがあるかも知れないから、お前よく調べてお呉れ。何しろ遠方へ行くのだから色色のものを用意して行かなくてはならないからね。

かう福原夫人は不二子孃にいつたが、孃は別に返事をしようともしなかつた。不二子孃はただ簡單にありがたうといつたのみであつた……彼女も大河内との對談を邪魔されたといふ不平が無意識に働いたらしい。福原夫人は大河内の横濱まで見送るといふことに反對を持たなかつた。

不二子孃は伯母が大河内の見送りに贊成したのを喜ばしく思つた。それで彼女は大河内の方へ向いていつた。

「大河内さん、それでは一時過ぎに來て頂戴……待つて居りますから、どうかお間違ひなく。それか

らあなた花など持つて來ては困りますよ、前からあなたにお斷りして置きます。ただキャンデー位は御遠慮なく持つて來て下さいまし、私頂戴して置きますわ。」

「不二子、不二子、なんだね。」と福原夫人は彼女を窘めるやうに叫んだ。「此方から持つて來て下さいと言はないばかりに……お前は餘りに無遠慮な子だわね。」

不二子孃は大河内に微笑した。彼女は今立ちあがつて去らうとする大河内を應接間の外まで送つて行かうとした。大河内は「ヤクヰ島まで彼女を追跡する覺悟だ」といふことを話してしまつてもいいと思つたが、それを語るならば、いつそ横濱の海岸にしようと決心して喉まで出やうとした言葉を嚙みしめた。

彼はアパートメントの外へ出た時、直に圓タクを呼んで、帝劇裏の家へ急いだ……家へ着いてみると、編輯局で横井勉に言ひ置いたのであるが、那須太郎はまだ來て居らなかつた。彼はジョウジに命じて晝飯の用意をさせた。彼は獨り食堂で簡單な食事を取りながら、向後の策戰計畫を考へた……どうして彼は不二子孃の潛水艇を追跡するかが先決問題であることはいふまでもなかつた。彼はどうしてヤクヰ島への水先案内を手に入れるか。彼は潛水艇に働いてゐる島民の航海に心得のある人間を一二雇はねばならないと思つた。兎に角彼は不二子孃を横濱へ見送り、潛水艇へ孃と共に入り込んでから計畫を即座に決することにしようと心を定めた。然しこの追跡の問題はなかなか實行が樂でないと思ふと、恰も眼前の山がますます大きくなつて登りにくいかのやうに感じた。

彼は食事を終つた。時計を見ると早や一時近いのを見出した。彼は自動車を呼んでそれに飛びのり、お茶の水のアパートメントへ急いだ。

彼はアパートメントへ着きその階段を上り、玄關を入つてエレベーターの所へ急いで歩くと、事務員が奥から飛んで來た、そして大河内に一通の手紙を渡した。彼は開封してそれが不二子からのものであるのを知つた。手紙の文字にかう書いてあつた。

「先刻の御約束を無にするやうで心苦しい次第で御座いますが、事情萬止むを得ませんから惡からず御許し下さいませ。あなたが御立ち去りになりますと直ぐ伯爵タビットが御見えになりまして、出帆の時間を一時半に早めたから直に出かけて欲いといふ仰せで御座いました。私共は伯爵の言葉に從ふより外はないと思ひまして、あなたには實に濟まない次第とは思ひますが、どうかお許し下さい。最後のお別れをせずに、今直に出發いたします、左樣なら。」

大河内はこれを讀んだ。彼は眞青になつたが次の瞬間に眞赤になつて叫んだ。

「タビットにしてやられた……あいつは巧妙だ、づるい、あいつは食へない策略家だ。」

茫然自失とはこの瞬間に於ける大河内の樣子であつた。彼はこれからどういふ計畫に出て活路を開かうかについて何の思案も策略もなかつた。「若し探訪記者高田であつたならばもつと上手に事件を取扱つたであらう。」と思ふと、彼は二度と日東の編輯部を訪れる勇氣がないと思つた。彼は「ああ不手際を演じてしまつた」と自分で自分を呪詛した。

然し彼は大事の玉をなくしてしまつた場所に愚圖ついてゐた所で仕方がないと氣を定めて、文化アパートメントの階段を下りて外へ出た。すると彼はそこで不思議な二人の男に出會つた……彼等は伯爵タビットや東郷感化院にゐる眞黑の女と同じ皮膚の人間で、脊が至つて低い、俗にいふ一寸法師に近い男だが、體の小さい割に極めて大樣な迫らない態度を見せてゐる。彼等は昨日新網町で見た少年給仕のやうな服裝をしてゐる。大河内は彼等もてつきりヤクヰ島の人間に相違ないと思つて、彼等に小さな聲で話しかけた。

「君達はヤクヰ島照人王のお嬢さん不二子孃を探しに來たのぢやないかね。」

二人の一寸法師はびつくりしたやうであるが、靜かに大河内に答へた。

「はい、さうです。」

「最早やここにおゐでにならない。」と大河内はいつた。「少し前に御出發になつてしまつたらしい。僕もお孃さんにお目にかからねばならない用事があつたのだが、かうなつては仕方がない。勿論君達はヤクヰ島のお方だと思ふが、少々祕密にお話を承りたいことがある……どうか僕の家へ來ては吳れないか。手間は取らさないから僕の希望を入れて吳れ給へ。」

大河内はかう言ひながら二人の一寸法師を見るに、彼等の眼は柔和で、下等な人間のやうに猜疑心がないやうに感ぜられた。然し彼等は正直な人間のやうに細心の注意を怠らないと思はれた。

彼等の一人は大河内に答へた。

「かう申しては失禮ですが、あなたは確に不二子孃の御友人でせうね……」

「友人ですよ。」と大河内はいつて、更に言葉をつけ加へた。

「友人でなければ僕がお孃さん達がどこへ御出發になつたかを知る筈がないぢやないか。また僕が君達がヤクヰ島の人だといふことを言ひあてる筈がないぢやないか。僕は今回の事件を詳しく承知してゐるから、君達安心し給へ。」

「ああ、さうですか、全く失禮しました。」

「僕は大河内洋三といふものだ。今自動車を呼ぶから一緒に僕の宅まで來て貰ひたい。」

「それでは參りませう。」と二人のヤクヰ島人は大河内に答へた。

今彼等は一臺の圓タクに乘つた。大河内はこの二人のヤクヰ島人に安心させなくてはならないと思つて、今朝彼が新網町の家で拾つた照人王紋章入りの手紙をポッケットのなかから出して彼等に見せた。彼等は豫期しなかつたものを見せられたから、大河内に恭しくお辭儀をして「失禮しました。」と繰返した。

大河内は帝劇裏の宅へ着いて彼等二人を應接間へ通した。彼はジョウジを呼んで立派な銀のコップへ葡萄酒をなみなみと注ぎ、「まあ一杯飲み給へ。」と彼等にすすめた。そして彼は彼等に尋ねた。

「君達が、酒井不二子孃に面會しなければならないといふ用件はなにかね。僕にそれを聞かして吳れ給へ。」

彼等は葡萄酒を甘さうに飲んだが、語りだすのを躊躇するやうに見えた。大河内は彼等に迫つていつた。

「僕に話したからとて大丈夫だよ……話によつては僕は君達に力を貸してもいい。」

彼等の一人は口を切つた。

「伯爵は不二子孃に何か重大なことを話したでせうか……伯爵はまだ日本においでになるかどうか、あなた御承知でせうか。」

「重大なことつて何かね？」大河内は直に聞きたいと思つて叫んだ。

彼等のどちらも大河内に答へようとしなかつた。これを見て取つた大河内は彼等にいつた。

「エリサといふ伯爵の召使を知つてゐますかね、エリサが不二子孃を狙撃した、然るに目的を達せずに今ある感化院に押込められてゐる。」

それを聞いた瞬間に彼等は驚いて悲鳴をあげた。

「殺害しようとしたのですか？」と彼等は震へながら叫んだ。

「さうです。」と大河内は答へた。「所で伯爵がこの事を知つたので、ある重要なことを不二子孃に話すに至つた。不二子孃と伯母の福原夫人は二人の友人を連れて今時分ヤクヰ島へ潜水艇に乘つて出かけられた筈だ。」

「そんならいい、そんならいい。」と彼等の一人は叫んだ。そして他の一人は白い齒を見せて微笑し

てゐた。「そんならいい」と叫んだ男は大河内を見上げて尋ねた。

「だが伯爵はお孃さんに重大なことをお話したでせうか？」

大河内は一瞬間無言で彼等兩人をぢつと見詰めた。そして彼は簡單に再び尋ねた。

「重大なことといつてそれは何かね。」

彼等は異口同音に彼に答へた。

「伯爵はヤクヰ島全民から不二子孃を探し出して、お父さんの不思議な行方不明をお話して是非お父さんの替りに王位におつきくださるやうにといふ希望をお傳へする使命を受けて、日本へ來られたのです。」

「さうか。」と大河内は叫んだ。

この時彼の頭腦に問題の全部が明瞭になつたやうに感じた……伯爵タビットは口を噤んでヤクヰ島民の希望を不二子孃に語らなかつた。彼は彼女が或はそんな場合に立ち至るかも知れないといふ程度の暗示を彼女に與へたに過ぎなかつた。しかも伯爵は、狙撃事件が起つて後、大河内の案内で不二子孃の訪問を受けた時初めてこの暗示をしたのである。大河内は思つた。「あの眞黒の女が伯爵の命令で孃を狙撃したとも考へられない。それからまた殺人未遂にをはつたがため、伯爵は一變して孃を懷柔しようと計畫したのでもあるまい。兎に角不二子孃は父上の危險を救ふためにヤクヰ島へ出發した……この子が親に對する態度は健氣だ。然し見ず知らずの島へ獨身出かけてどんな災難に出會はない

とも限らない。この大河内こそすべての責任者だ、どうして彼はこの罪過に言譯をするだらうか？」

大河内は唸るやうに叫んだ。

「ほんたうだらうな、タビットが島民の希望を傳達する使命を帶びて日本へ派遣されたといふのは。」

「ほんたうですとも……私共が何のために虚言を吐きませう。私共はヤクキ全島民の使命傳達のためにここへ來ました。私共はアコとジャボといふ兩人ですが、横濱へ上陸する前夜に偶然伯爵が他の人とこそこそ相談してゐるのを立ちぎきしました。彼等は不二子孃に王位を捧げるといふことを言はないやうにしようと相談しました。私共兩人が彼等の密談を立ちぎきしたことを知りました。そして彼等は私共を潛水艇の密室に監禁してしまひました。しかし私共は今朝監禁の部屋からそつと逃げだすことが出來たのであります。勿論伯爵が王位捧呈の件を不二子孃に語つたならば、それでいいので御座います。しかしそれがどうだかは疑はれます……そして伯爵自身は不二子孃を連れて島へ向つてゐます。」

大河内は彼等にいつた。

「伯爵は一言も王位捧呈に渡らなかつた。彼は照人王と島の寶石箱が同時に姿を隱したことを私共に話した……伯爵は今不二子孃をつれ出してしまつた、不二子孃は伯爵と一緒に行つてしまつた。」

彼はまるで官能を失つた人間のやうで、ただもう體を安樂椅子のなかに埋めて動くこともしなかつた。しばらくたつと彼は正氣附いたと感じた時、彼の心は恐怖の深淵の底に沈んでゐることに氣がつ

いた。丁度この時日東新聞の記者那須太郎は社會部長から大河内の傳言を聞いて、社からここへ飛んで來たのである……那須は大河内のアパートメントのベルを鳴らした。

那須は應接間へ入つて來た。

この時大河内は二人のヤクキ島人にかういつて最後の決心を示した。

「それでは遊船で追跡するが、君達はヤクキへ水先案内をして呉れるか？」

二人のヤクキ人は喜ばしさうに笑つた。ジャボといつた方の男は大河内に潛水艇から海圖を盜んで來たことを告げた。

「どんなことにならぬとも限らないと思つて海圖だけ手に入れて置きました。これさへあればヤクキ行は樂です安全です、御心配に及びません。」

大河内は那須を顧みて叫んだ。

「おい那須、用意はいいか、今晩ヤクキ島さしていよいよ出發する、異議はあるまい……」

第七章　海　上

南洋の海は青疊のやうに平靜だ。太陽の熱情的光線に蒸されてうとうと眠つてゐるやうだ……船はその上を、恰も夢路を分けて行くやうに滑る。時には鯱や鯨や鱶が小さい築山のやうに背中を波の間に脹らませたり、越後獅子のやうに蜻蛉返りをうつことがあるが、それはそこを通る船の人々に見せ

る餘興だ、決して人間に對する示威運動でない。ああ、南洋の海くらゐ平和の海はない。波が時には高くまた低く動くことがあるが、それは大空の音樂に調子を合せる音樂師の表情だ。

今太陽は西へ沈んだ。今團扇のやうに大きい黃金色の月はしづしづと東の空を登つて來る……譬へると金欄の袈裟を着けた僧侶が默禱の式を司會するため廣い殿堂へ臨むやうだ。暗黑に包まれた南洋の海は神聖な修行を營む大廣間だ、私共はここに膝まづいてただ祈禱するのみである。もとより祈禱するに言葉を要しない、神樣と羅針盤とを信賴することが卽ち海上の祈禱である。大河内の遊船アロハ丸は運命を神樣と羅針盤とに委ねて幽靈船のやうな船足の早い進行曲を唄つて行く……アロハ丸は何の貨物を積んでゐるのでない、滿載してゐるのは冒險の憧憬卽ち夢の一つである。

日東新聞の小說欄擔任記者小柴は甲板にハムモックを釣り、そのなかにながながと寢そべつて上機嫌になつてゐる。彼の機嫌のいい時はいつもその心持が小唄となつて顯はれる。彼は兩手を頭の下に組み、片方の足をハムモックから甲板の上に下し、その足で甲板をたたきハムモックを工合よく動かしてゐる。今彼が低聲で唸つてゐる小唄を聞くとかういふ文句である。

「月の光に忍び來よ、
お話すべし戀の一曲、
月の光に谷をわけ、
森の彼方に忍び來よ、

お話すべし戀の苦み。」

「相變らず上機嫌だな……だが戀の一曲だけは止めて呉れ、如何に海上でも人聞きが惡い。小柴、油のやうな海を遊船で走る氣分はまた別だ、ほかの日東記者にも味はしてやりたいな。」と那須は小柴に話しかけながら、甲板に椅子を持つて來て小柴のハムモックの側に置いた。那須はそれに腰を下してパイプに火をつけた。パイプの火花が靜かな風に攫はれて船外の波の上に落ちた。

小柴は那須に答へた。

「まつたくだ、船賃一文も拂ふのでもなく毎日甘いものを食べてさ、行手はるかに夢を追ふといふ至極呑氣な冒險旅行だ……天下にこれ以上の愉快はまづ有るまい。かう夜海上を走るアロハ丸を考へると、暗黑の胸に一點の存在といつたやうな寂しい感じはあるが、僕はこの寂しい生活をどんなに希望してゐたか知れない。」

「この生活から日東編輯局を考へると實に隔世の感なきを得ないね。」と那須は叫んだ。彼の聲は感激的であつた。

小柴は那須の言葉を受けていつた。

「海上で感傷的にならない奴は人間でない。僕は出來るだけ感傷氣分に浸つてみたい……感傷的になることが卽ちロマンチックになることなのだ。」

「さすがは小說欄擔任記者だけあるね。」と賑やかに笑つた。

「おい、記者といふ言葉はよして呉れ、僕は新聞を忘れようと思つてゐるのだ。」と小柴は叫んだ。
「いや失敬した、僕もその點ぢや同感だよ。」と那須はおとなしく言つた。
そして那須と小柴の兩人は異口同音に叫んだ。
「兎に角愉快だね。」
彼等兩人はしばらく無言であつた。小柴はまたもや小唄をうたひ始めて沈默を破つた。
「東を破るお日樣は、
荒られた男に呉れてやれ、
月の光に、たれか知る、
甘き耳語あることを。」
「それや君の作つた歌かね。」と那須は小柴に尋ねた。
「さうよ、今僕も十年も若返つた氣分を味つてゐる。」と小柴は答へて、月の光線に打たれて綺麗な波をぢつと見詰めた。
大河内はどこにゐるかといふに、彼は甲板の影になつた暗い處を歩いてゐたが、今鐵の手摺に凭れてゐる、そして彼は自分でないやうな感じを味つてゐる……彼は疑惑の快感といつたやうな心理狀態を喜ぶ男で、彼が古い習慣や事情を遠く離れて、今見もし聞きもしなかつた未知の世界へ帆走りつゝあることをどんなに喜んだであらう。もとよりこれは熱帶的のうねうねした波がアロハ丸の腹を嘗め

たからでもなく、不思議な幻の世界が彼に呼びかけたからで、彼は既にその幻の島に戀の花が咲き、戀の鳥が唄つてゐるやうに感じた。彼は遊船の所有者となつた時、かういふ海上にそれを走らせて白い水泡を掻きわけて幾年も暮したいとさへ思つた。然し今は目的がヤクキ島にあるのだから、航海はそれへ到達する一便法に過ぎない、一刻も早く目的地へ飛んでゆきたいのである。實際今の彼に海を樂しむといふ餘裕がないと思つた。彼の心はかなり落付きがないのであるといつていい。
彼は手摺に凭れながら海上を眺めた……南洋の月光は黃金の波を洗つて、水の音が風の音に交つて彼の耳に響いた。然し彼の心は月に洗はれた波にも風の聲にもなく、「ヤクキ島に於ける彼の運命」といふことに集中されてゐた、そして彼は心のなかで「彼の運命」を「彼と不二子孃との運命」と訂正した。そして彼は彼等二人の運命はアロハ丸を水先案内して行くアコとジャボ兩人の掌中にあると思つた……事實さうである、若しこれ等兩人がゐなかつたならば、彼は不二子孃の追跡を斷念しなければならなかつたのである。
ジャボでもアコでも船がいつヤクキ島へ着くかを語ることが出來なかつた。大河内がそれを彼等に尋ねると、彼等はいつも眞黑な獵犬のやうな顏に大きな眼をぎよろつかせ、短い兩手を上へあげて叫んだ。「神樣にお尋ね下さい、あなたにお約束が出來るのは、船が確にヤクキへ着くといふことだけだ。」大河内はただ彼等兩人を信賴して船の走る音を聞いて安心してゐるより外はなかつたのである。ジャボはアコに比較すると辯舌爽かでよく喋つたが、アコは無口で何を尋ねてもその返答は「はい」

とか「いいえ」といふ言葉に過ぎなかつた。然しヤクキ島特有な叡智を彼等のどちらも持つて居つた。アロハ丸船長加藤只一は彼等を信じなかつた。ある時船長は大河内にいつた。「あいつ等一寸法師は大入道の片足位しか目方が有りませんね、地獄の赤鬼の給仕か褌持にしたら適任でせう。」大河内はこの口汚い罵倒の言葉を聞いて嫌な氣がした。所で船長加藤は遠慮會釋なく水先案内のヤクキ人を人の前で罵つた……實際に彼の氣晴らしは彼等を罵倒することと娘を自慢することの二つに過ぎなかつた。「娘の寫眞を見せませうか、新聞記者などが結婚を申込んでも遣りませんよ」などと那須や小柴の前でいつた。「これが君の娘か、素敵な美人だね、まるで烏が鶏を生んだやうなものだ、今に宮様から結婚の申込が來るだらう。」などと人がからかひ半分にいつても、加藤は眞面目に受けて喜んだ。加藤は日本近海は勿論支那附近の海にかけても詳しかつた。然し南洋への航海は今度が初めてであるのみならず、海圖に出てゐない神祕のヤクキ島行きであつてみると、彼は默してアコとジャポの命令に服從せざるを得なかつた。アコとジャポはそつと自分の海圖を持ち出して、これまで誰も行つたことのない不思議な航路を船長に取らした。人が彼等の海圖を見ようとすると、彼等はいつた。「この海圖が讀めて堪るものか、讀めれやヤクキ島の王様にしてあげますよ。」加藤船長も彼等の命令通りに航路を進めざるを得なかつた。

大河内はアコとジャポと語つて時には氣の鬱ぐやうな感じを持つことがある……彼等は大河内を途方に暮れさせ、疑念のなかに陷れた。さういふ場合に彼はアロハ丸に乘つてゐる總ての人命はまるで海の底にこびり附いてゐる珊瑚の玉一つより價値がないと思ふのである。そして那須小柴を初めべての人々が自分のため犧牲に供せられてゐることを考へて彼は身震ひする程恐ろしく感ずるのである。然し彼はまた、「自分は單に利己主義のためにヤクキ島へ出かけようとするのでない、それは神様も承知だ、必ずやアロハ丸を安着させて下さるに相違ない」と思ひかへして急に元氣を恢復するのである。彼はこんな譯で時には疑ひ、時には安心して鬱いだり喜んだりしたが、船は精一杯の速力を出して波を蹴つて進んでゐた。その有様は恰も瀬戸内海の郵船が下の關をさして進むかのやうに悠々たるものがあつた。

しかる所日本を離れてから十四日目の夕方であつた。船長加藤は例の氣晴らしを出してアコとジャポを罵倒し始めた。「あいつ等を信じてゐたら何處へ連れられて行くか知れたものでない……航海術の初歩さへ知らない癖に變な航路ばかり選りに選つて船を進めるから、あいつ等は確に魔の人間ですよ。」この時大河内は憂鬱にならざるを得なかつた。こんな場合の習慣として彼はポッケットに手を入れてパイプを取りだし、火をつけずにそれを口のなかに推し入れた。そして彼は無言で寂しさうな顏付をして甲板の上を歩いた。那須次郎はハムモックの上に寢そべりながら、大河内の不愉快な浮ぬ様子を眺めた。そして彼は大河内がどんなに心配しゐるかに同情を持ち、また大河内のロマンチックな冒險心の朗かな音律に對し敬意を表した。然し那須は大河内のやうに戀に捕はれてゐるのではないから徹頭徹尾傍觀者であるといつていい。本航海に對する氣の入れ方も彼等二人の間にかなりの隔り

がある。丁度音樂家自身と音樂の愛好家の間に氣の入れ方の熱が違ふやうなものだ。

小柴は那須に話しかけた。

「ヤクキといふ變挺の島は……何れ變挺であらうと思ふが、どこにその島があるのかね。隨分人を待たせるね。」

「さう周章てヤクキヤクキといふなよ、着く時に着くから安心しろ……男子らしく度胸を定めて落付いてゐろよ。君はまだ運を天にまかすといふことを知らないと見える。君は修行が足りない、まだ若いね。」

かう那須に言はれて小柴は笑つた、そしていつた。

「それぢや僕も度胸を据ゑる。社から日頃の勉强が認められて四週間の海上旅行を貰つたと思へば氣が樂になるといふものだ。」

那須はこの小柴の言葉を受けていつた。

「さうだ、正にさうだ、今頃社にゐて見ろ、一時間の休憩さへ容易に貰へない……時間から時間まで汗だくだくの仕事に追ひつかはれる始末だ。それを思ふと大河内に感謝していい。食事に不自由はせず、朝から晩まで用事なしの貴族生活で、その上ヤクキへ着いて、總理大臣と行かなくても内閣書記官長くらゐにして貰へば出世の頂上といふものだ。おい小柴、悲觀するなよ、樂觀するものに神樣がお宿りなさる。」

「さう元氣ばかり出した所で、ヤクキへ着かなけれやどうなるね。」といつて小柴は苦笑ひをした。

「ヤクキへ着かずに鱶の國へ着いて、食はれてしまつた所で本望だと諦めるだけのことさ……僕は覺悟をきめてゐる。」

「僕ももう驚かないよ。」と小柴はいつた。

那須は小柴を見て微笑した。

「おい小柴、例の歌でも唄つて聞かせ給へ、さあ唄へよ。」と那須は小柴をうながした。

小柴は朗かないい聲で歌ひだした。

「月の光に忍び來よ、
お話すべし戀の一曲、
月の光に谷をわけ、
森の彼方に忍び來よ、
お話すべし戀の苦み」

歌が終つた時那須は小柴にいつた。

「かう遠く故郷を離れた海上で、月が皎々と波を照らす時、陸上なれば氣恥づかしくて唄へないやうな歌をうたふのも、また聞いてゐるのも、全く一生の得だ。」

かう那須と小柴が話してゐる所へ大河内がパイプを啣へながら遣つて來た。彼等は大河内に聲をか

けた。
「靜かな晩だね、椅子に腰をかけ給へ。」
それから直ぐ彼等は「靜かな海だね。」と言ひかへた。
「靜かだな、まるで夢のやうに靜かだ。」と大河内は答へた。
彼は椅子に腰をかけなかつた、彼は鐵の手摺の側に立つて空と水とが相接する遠か遠方をあちこちと見廻はした……この時小說欄擔任記者小柴は、月光を幽かに受けた大河内の顏が、加何にも男らしく見事だと感じた。大河内はいふまでもなく心のなかで、「ヤクヰ島がもう見えてもよささうなものだ、實際それが存在してゐるならば、もう今頃顯はれて呉れてもよささうなものだ」と思つたのである。彼はどこにもそれらしいものが見えなかつたので失望したらしく見えた。そして彼は茫然と海上に漲る月の光を眺めた。熱帶の海に吹く風は、吹いてゐるのでなく、吹かずに吹いてゐるといふ方が本當だ……どろつと匂つて、まるで不思議な花が息のやうに吐く香氣だ。彼はそれを嗅ぐでもなく、嗅がないでもなしに、自然に自分がそれに染みこんで行くやうに感じた。
「靜かだな。」と大河内は再び獨語するやうに言つた。
そして彼は小柴の側に近づいていつた。
「君は隨分いい聲をして唄ふね……もう一度唄つて聞かせないか？」
小柴は頭を搔きながら答へた。

「さう何度も唄ふと襤褸が出るから許して呉れ給へ。それに銀座あたりで唄ひながら乞食したかと想像されても困るからね。」
那須はいつた、
「まつたく小柴の聲はいい、新聞記者にして置くのは惜しい、藝人になればよかつた、立派に通れたものを……小柴の唄を聞いてゐるといい氣分になる、僕はセンチメンタルにされてしまつたよ……『お話すべし戀の一曲』と來るのだから堪らない。」
かう言ひ終つて那須は笑つた。
那須の賑やかな笑ひにつり込まれて大河内も小柴も共に笑つた。
大河内は眞面目な顏をして兩人に向いた、そして開き直つていつた。
「君達何と思つてゐるね、すつかり今ぢや後悔してゐやしないかと思ふのだ、かういふ海を目あてもはつきりせず進んでばかりゐては……馬鹿げた冒險の卷添を食つたと後悔してゐやしないかね。僕は自分でいひだしたことだから、どうならうと何とも思つてやしない。然し君達は別の立場がある。僕は君達にすまないことをしたと思ふことがあるよ。」
かう大河内に言はれて、那須も小柴も無言であつた。彼等は後悔してゐるといふことが出來なかつた、さりとて後悔してゐないとは勿論いふことが出來なかつた。小柴は心のなかで自分が那須に後悔がましく語つた言葉を大河内が立聞きしたのではなからうかと疑つた。そして今更「男らしくもない

愚痴を喋つたものだ」と思つて恥づかしいやうな氣がした。那須は那須で、小柴に如何にも元氣らしいことはいつたものの、矢張り小柴と等しく後悔してゐる心持を大河内に見透されたのではあるまいかと思つた。それで兩人は今大河内から言はれても何とも返答が出來なかつたのである。

大河内は彼等が無言でゐるのをもどかしく思つた、實際は多少の不平なきではなかつた。然し彼は彼等を追求して何とか返答させようともしなかつた。彼は顏を背けてパイプに火をつけてそれを吸ひ始めた……その實大河内は彼等から「後悔してゐるよ」とはつきり言はれることを恐れたのである。那須と小柴は椅子を立ち上つて船の手摺の側に行き、波と波との間に破れる月の影を眺めてゐた、ただてれた樣子で茫然としてゐた。

しばらく立つて那須は大河内に向いていつた。

「この一兩日に何とか決るだらう、ヤクキへ着くか着かないか、ヤクキといふ島が存在してゐるかゐないか……所でアコとジャボの兩人は何といつてゐるね。」

大河内が何とも那須に答へないうちに、アコとジャボが甲板に上つて來た。この時天上の月が急に薄黑い雲に蔽はれたので、船の甲板は一面に黑い覆ひで被せられたやうであつた……この暗い甲板をちよこちよこ歩いて來た二人の一寸法師はまるで人間といふよりは寧ろ獵犬のやうに思はれた。この獵犬的人間或は人間的獵犬は革で作つた踵のない柔かい草鞋のやうな靴を穿いてゐた。これがまた不思議な靴で、その頭が尖つて無茶に長くぐにやぐにやと嬲かなものであつた。彼等が歩く毎にその變

な靴がぺこんぺこんと御辭儀をして、どうといふことなしに極めて表情的であると思はれた。大河内はジャボを呼びとめた、そして彼にいつた。

「ジャボ、進行の工合はどうだね。」

ジャボは輕い御辭儀をして答へた。

「極めて結構な進行工合です……すべてが豫定通りにいつてゐます。」

「これは毎度聞いてゐるが、いつヤクキへ着けるかね……まだ島が見えだすのは急な事でないか?。」

「そんなに急いだつて仕方がない……あなた達は神樣をお信じにならないと見える。」

那須は口を挾んだ。

「神樣を信じないといふと、それは僕達が君達を信じないといふ意味かね。」

「まあそんなものでせう。」とジャボは答へていつた。

すると小柴がジャボに向つていつた。

「僕は少くも君等に信頼してゐる、間違はないやうに航路を取つて呉れ給へ。」

ジャボは小柴に皮肉な小さい笑を投げて答へた。

「あなたは船の心配より唄をうたつてゐるがいい……かういふ平和な海へ來て心を不安に苛立たせてゐるやうでは本當の人間でない。波は靜かで月は天に輝く、全く美の世界だ、かういふ世界にゐて疑惑を持つことぐらゐ卑むべきはない。」

この時那須も小柴も針をさされたやうに感じて、自分等の心が淺ましかつたと恥ぢた。

ジャボは言葉を續けた。

「あなた達の耳に響かないかも知れないが、わたしの耳にはは神祕の消息が通じて來るやうに感じます……ヤクキ島ももう間近に見えて來ます、御安心下さい。わたしは今に不可能を可能として見せます……船の進行は申分ありません、御安心下さい。」

かう言はれてみると大河内初め那須も小柴もジャボを信ずるの外はなかつた。大河内は甲板のベルを鳴らしてジョウジを呼んだ、そして葡萄酒を取り寄せた。

「さあコップを上げ給へ、アロハ丸の成功を祈つて乾杯だ、さあ乾杯だ。」

一同が揃つて葡萄酒を呑んだ……沈默が續いたが、それは憂鬱な沈默ではなかつた、喜ばしい希望に滿ちた沈默で、今にも歡喜の叫びに破れる前のしばしの沈默のやうであつた。

彼等は沈默の歌ふ催眠歌にとらはれるやうに感じた。那須を最初としていつの間にやら眠らして了つた。那須に次いで小柴が眠つた。ジャボとアコは船の下へ下りて行つた。後に大河内だけ殘つた、彼はアメリカ亞米利加大陸發見前夜に於けるコロンブスのやうに、獨り傲然として暗い甲板を守つてゆつたりと歩いてゐた。

時間は眞夜中の一時頃であつた。大河内は飛びあがつて叫んだ。

「燈火だ、燈火だ！」

彼は甲板にぐつすり寢こんでゐた那須と小柴をゆり起した。大河内の手は嬉しさに震へた。「早く起きろ、ヤクキが見える。」と彼は彼等の耳許で怒鳴つた。

ずつと遠方に南東に當つて、天と海とが接する所に一點の燈火らしい光が金午宮一星群中の失はれた一つ星のやうに幽かに瞬いて見えた……それが眞夜中の淺霧をつん裂いた、それが踊つて光つた。そしてそれが消えた、また見えた。これで確に月のなかから飛んだ幻の光でもなく、また虚空の生みだした狐火でも無かつた。今やヤクキ島といふ未知の存在が明瞭になつた、確實に不可能が可能となつて顯れたのである……誰か第四次元の世界があるのを疑ふことが出來ようと。大河内の歡喜は容易に想像することが出來る……暗夜の海を漂つて途方に暮れた船が、眼前に陸上の燈火を見出した小持だが、大河内の場合は未だ世界の地圖に出てゐない、即ち第四次元を理解する人間だけが住んでゐる島から、ぴかりと光つた燈火だから、また格別の歡喜を覺えたのである。人に知られてゐる島からの燈火ならば左程におどろくべきでないが、世間の人々がとんと知らない、祕密の島から見えて來た歡迎の燈火であるから、大河内の歡喜は到底言葉で語ることが出來ないのである。彼は甲板を踊つて喜んだ。

彼は早速アコとジャボを呼びよせた。アコは遙か南東の空に光る一點の燈火を眺めた、そして白い齒をむき出した、そして短く一言を吐いた。

「明日です。」

ジャボは大河内に向つていつた。

「あれやカラ山の絶頂にある王城の燈火です……ああ、神様は遂に『可能』をお許しになりました。」

大河内はこの燈火が王様の何殿から光つたものだといふ事を知つた時、感激の喜びで戰慄した……

「果して不二子孃がそこにゐるであらうか」といふ考が彼の頭に直に掠めるやうに感じた。「彼女が來てゐなくてどうするものか」と彼は自分に答へた。そして彼は自分に叫んだ。「大河内のロマンスはこれから始まるのだ。」

船長加藤は後れて甲板へ遣つて來たが直にその燈火を信ずることが出來なかつた。彼のアコとジャボに對する疑惑と輕蔑の態度は如何ともすることが出來なかつた。彼は望遠鏡を取つて、燈火が光つたといふ方角へ向けてぢつと眺めた……如何にも光つてゐたやうに感じたが、加藤が望遠鏡を向けた時にその光は消えて見えなかつた。加藤はジャボに向つて怒鳴つた。

「燈火なんて見えないぢやないか、馬鹿ばかしい。」

「今見えなくても直ぐ見えて來ます……神様は『可能』をお許しになりました。」とジャボは靜かに船長に答へた。

「不可能の可能」を信ずることの出來ない散文的に出來上つてゐる船長加藤は、ふんと鼻であしらつてさつさと船の下へ下りて行つてしまつた。大河内は船長が去つたのを寧ろ邪魔物がゐなくなつたといつたやうな感じで見送つた。

アコとジャボのヤクキ島人は大河内には偉大な魔術師であるやうに思はれた……昔の魔法師は布の風呂敷位のなかに金魚を出す程度に過ぎなかつたが、彼等は普通の海圖や近代的科學を全然無視して未知の世界へ彼を導いて行つたのである。彼等はこれまで知れてゐる航海術と在來の羅針盤を否定して汚い紙一枚の價値に引きさげた。彼等は科學と古代の信仰まで逆に戻らさせた。彼等はここに魔法の世界を開いた。

今や大河内の心はヤクキ島に、殊に同島にゐるに相違ない酒井不二子孃の一つに集中してゐる。西洋のある詩人は「愛人の最初の瞥見を記憶するもの誰か魔法を信ぜざらんや」といつてゐる。大河内に對する不二子孃は實に魔法の存在である。魔法の塊として不二子孃を信ずる大河内が、ヤクキ島の存在を疑ふ理由はどこにも無いのである。

一時間、二時間も大河内を初めとして那須小柴ジョウジはみな船の手摺に一例を作つて、頻々に望遠鏡をのぞいて、見えたり消えたりした南東の燈火を眺めた。然し誰もその確かな存在を疑はなかつた。若しジャボとアコの言葉が信じられるならば、その燈火は王様の都會メッドの町を照らしてゐるのである。

那須その他の人々は大河内の心持を十分に了解することが出來た。彼等は睡い目をこすり始めた、明日を樂みにしてといつて數時間の睡眠についた。後に殘つた大河内の脈搏は歡喜のために震へて踊つた。彼は終夜眠らずに獨り甲板を歩いて翌朝に及んだ。

第八章　ヤクヰ島上陸

ヤクヰ島の燈火が見えたといふことはアロハ丸乗組員全部に對する天來の福音であつた……確かに確かにさうであつた。且つそれがメットの町を照らす王城の燈火であつたから、彼等の歡喜は物凄かつた。實際をいふと船長加藤を初め乗組員の全部はアコとジャボを信ずることが出來なかつた。彼等はこの兩人の命令に從つてアロハ丸を運轉進行させてはゐたが、果して船が何處へ何時安着するかを知らなかつた。彼等は茫漠たる天空の下、波濤萬里に擴つてゐる洋上を目標なしに行くことが、寂しかつた、恐しかつたのである。若し彼等が燈火がいよいよ見えたといふことを聞かなかつたならば、恐らく彼は一揆を起して船の所有者大河内やアコとジャボを海中へ投げ入れたかも知れない、少くもさういふ瀬戸際まで狀態が推し進んでゐたのである。

勿論大河内はそれを知らなかつたのはでない。彼も燈火を見て喜んだのはヤクヰ島へ着いて不二子孃に會へるといふ心持よりは寧ろ船員全部の不平を鎭壓して、彼等の陰鬱に歡喜の光明を投げたと思つたからである。彼は甲板を獨りで歩いた、如何となれば他人との談話に依つて心の喜悦を妨げられたくなかつたからである。彼はかう無言で甲板を歩きながら、コロンブスが米陸發見の前夜に遙かに見出した燈火のことを考へた。「彼も船員に叛逆されて命を失はんとしたが、最後の際どい瞬間に大陸が顯はれて來た、詰り神樣は人間の忍耐をお試しになつてから物を與へ給ふのだ」と大河内は心の

なかで思つた。そして自分も今神樣から最後の報酬を戴くことが出來たのであると彼は喜ばざるを得なかつた。

大河内のバレーとして影のやうに彼につき纏つて後生大事の奉公を彼に捧げてゐるジョウジの喜悦は、大河内同樣に言葉で語ることが出來なかつた。彼は東京出發の咄嗟の間際に買集めて來た赤や黃や紫や白の紙テープで船の食堂を飾つた。彼は紙でいろいろの形を作つて食卓の上に置いた。かういふジョウジの小さい親切な注意がどの位大河内を喜ばしたか知れない。今日はいよいよヤクヰ到島着の日であるから午餐を記念的なものにしようとあつて、ジョウジの獻立で樣々の御馳走が出た。大河内は一番上等の葡萄酒をあけて那須、小柴、船長の加藤を初め、船の乗組員全體に飲めるだけ飲ました。食後彼は一場の挨拶をして、「よく困難を辛抱して吳れた」と一同の船員に感謝した前に、彼は感動な言葉でアコとジャボの勞に敬意を表した。加藤船長は今やアコとジャボを否定することの出來ない立場になつてゐる。恰も現實的存在だけを主張する人間が夢を信じなければならなくなつた場合のやうに、加藤はてれ隱しに頭ばかり撫でてゐた。みなの人々は彼がこれまで散々に浴せかけたアコとジャボに對する罵倒の言葉をどう始末するだらうかと、竊むやうにそつと眺めた。加藤はけろりとした顏付をして頭を撫でて、例の娘の寫眞をポケットから出して、娘自慢を連發してゐた。「船長、君の娘さんの相手が日本にないとすると、ヤクヰ島で一つ捜すことだね。」と皮肉半分に一人がいふと、彼は「ヤクヰといつた所で實際着いてみないと、何が何だか分つたものでない。」と叫んだ。

大河内は心のなかで、「まだあんな強情を吐いてゐる、ヤクキの否定を最後の間際まで維持しようとする憐れな奴だ」と思つた。

食後に大河内は那須と小柴と連れだつて甲板へ出た。そして彼等は海の波も段々小さくなりその色も青味を深めて來るのを見た。また澤山の黑い鳥がアロハ丸を取卷いて飛びながら、彼等が未だ曾て聞いたことのないやうな妙な音聲で鳴いてゐるのを見た……彼等は船がヤクキ島へ接近してゐるのを感じた。然し彼等はまだまだ島が眼前に出て來ないのを非常にもどかしく思つた。

那須は大河内にいつた。

「もう島が見えてもよささうなものだね。」

「さうだな。」と大河内は簡單に答へたが、「神樣はうんと人を焦らして置いてから大事なものを見せるといふ寸法だらうよ。」とつけ加へた。

「ああ、さうに違ひない。」

かう那須と小柴は同時にいつて大きく笑つた。

午後四時になつて到頭島が見えだして來た……あゝ、ヤクキ島は今一點の疑ふ所もない存在である。奇怪な岩石と滴るやうに青い樹木の大きな塊で、それが恰も眼を塞いで何か默想してゐる哲人であるかのやうに疊の如く平靜な海の中に體の半分を埋めてゐる、何のことはない繪に描いた蓬萊島といつたやうな感じを人に與へる。かう人間の姿や繪の蓬萊島に譬へると何だか玩具の島のやうに聞

えるが、段々接近し來ると中世紀の城を見たやうになかなか外から近寄り難い。それから一種不思議な空氣で包まれてゐて、それが晴れたり曇つたりしてその姿が刻々に變化して行くやうに思はれた。

あゝ、人間が猿か栗鼠でない限りこの島へ踏みこむことは絶對的に不可能であると思はれた……眞青な水際から聳りたつ絶壁千尺の防壘はまるで眞直に鉋で削つたやうである。誰がかういふ接近し難い一大城壁の一枚岩がこの世界に存在してゐると想像したか。正にこれ神が全力を傾注して築いた莊嚴無比の大殿堂であると言はねばならない。最初アロハ丸の人々が船からこの島を岩石と樹木の塊であると見たが、青い樹木と思つたのはその實樹木でなく眞青な大きな斑點がついてゐて、それが光つたがため五月の新綠のやうに思はれたのである。然しこの人間を恐れさせる絶壁を恰も花園であるかのやうに思つて、不思議な熱帶的色彩で色取られた鳥や蝶々や蜂が無數に群り遊んでゐる。そして大河内達を驚かしたのは、この絶壁が二三ケ所竪に裂けてそこから水が溢れるやうに落ちて瀧を作つてゐることである……眼を閉ぢてその水聲に耳を欹てると、その巧妙な自然の音律はベトウヴェンの音樂であるかの感を與へ、眼を開いてそれを眺めると、眞赤な夕日を受けて五色の虹が長い七色の三稜鏡となつて顯はれてゐる。彼等は異口同音に、「あゝ恐ろしいしかも美麗な島だな。」と叫んだのである。

それから彼等はこの自然の防壘の上を見た……土地が高く高く傾斜的に登つてゐて、なかに大きな谷が屈曲轉折して千變萬化してゐるやうに想像された。この谷には松柏科屬の青い樹木が一杯林立し

て、恐らく清らかな水が流れてその兩岸にはいろいろの岩石が直立したり横になつたり仰向いたりふんぞり返つたりしてゐるに相違ない。そしてそれよりもつと遙かを見ると正圓錐體の恰好のいゝ山がつんと立つてゐて、靄然たる煙雲で包まれてゐる。その煙雲の間から昨夜の燈火が輝いたといふことである。今アロハ丸の人々は望遠鏡を覗いて、この山の樹木の間に澤山の塔や奇怪な形をした建物が散らばつてゐるのを見た。そしてそれ等の建物が夕日を受けて眞珠のやうな紅玉のやうに光つてゐるのを見たが、こゝに人間生活が榮えてゐるといふ何等の印も見出すことが出來なかつた。それ等の建物からは一筋の煙もあがつてゐると思はれなかつた。海上から眺めたヤクキ島全體の感じが測ることの出來ないほど靜寂たるもので、人間の棲息に適するとは思はれなかつた。これは南洋の熱い熱い島であるに關らず、どうして北極の沈默を人に思はせるかといふことが、大河内初め皆の人の想像することが出來なかつた。

彼等は恐愕と心配とに捕はれて誰一人眼前の驚くべき島について批評しようとしなかつた。大河内にもともとより彼の所謂冒險がどうして展開するかについて何の豫想をも感ずることが出來なかつた。彼はいふまでもなく一六勝負の骰子をふるだけの決心は出來てゐたが、兎に角取りつく島が有らうとも思はれなかつた。彼の血は燃えてはゐたが、どこにその血の流出口を見出したらよからうかと心を苦立たせるのみであつた。

彼はジャポを捕へていつた。

「おい、何處を見ても上陸されさうにない……いつそ船を東海岸なり西海岸なりへ廻はしたらどうだね。こんな立板のやうな絶壁ではどうにも仕方がない。お前はどう思ふ……それとも何かいゝ工夫があるかね。」

ジャポは大河内に答へた。

「東へ廻つても西へ廻つても同じことです。それに廻つてゐては時間がかゝつて無駄ですから、この絶壁から上陸するより外はありません。」

「お前それが登れると思ふかね。それとも岩に登ることの出來るやうな道でも付いてゐるかね。」と大河内は尋ねた。

ジャポは答へた。

「はい、道がついて居ります……この道は島の人間だけに知れてゐるので、所謂秘密の道なのです。こゝからは勿論はつ切り見えませんが、潛水艇の入口があつてその上に刀の交叉が白く彫つてありますが、そこから秘密の道がつゞいてゐるのでが、望遠鏡を覗いたからつてそれは見えませんよ。」

今夕日は一層眞赤くなつて一層眞赤になつた海のなかに落ちてゆく……そしてそれはしばらくの間であつたが、この眞赤い燃えた夕日を下から斜に受けて、ヤクキの島は恰も赤光の殿堂であるかのやうに見えた。その莊嚴無比な情景はこの世の現象とはどうしても思はれなかつた。この驚嘆すべき色彩のカンバスへ幾千羽といふ白や黑の鳥が、風に吹きとばされた木の葉か櫻の花瓣のやうに上下左右

に亂された。然るに神様は氣まぐれな畫家だ、かういふ驚くべき見事な一幅の繪畫を段々と黑く塗りつぶされた……夕日が沈んでしまつてからのヤクサ島は沈默で包まれて行つた。勿論絕壁を落ちる瀧の音は轟々と鳴り響いたが、その聲は却つて沈默を一層深からしめるのみであるやうに感じられた。そしてそこの沈默が陰險にも兇惡にも思はれた。

ジャボは大河内にいつた。

「上陸は明日の日の出になすつてはどうですか？」

大河内は叫んだ。

「明日の日の出まで待つ……馬鹿なことをいふな、今直ぐに上陸だ、用意！」

この時眼前の島は眞黑な帳となつて暗黑のなかに溺れてしまつたが、その帳のなかから幽かに「刀の交叉」が白く光つた。

大河内はそれを認めていつた。

「上陸點はあそこだな。」

「はい、さうです。」とジャボは答へた。

ジョウジは直ぐ上陸するといつて敦圉く大河内を見て靜かな聲でいつた。

「どうか注意に注意を重ねて下さい。」

「お前は船に止まりたいか。」と大河内はジョウジに答へた。

するとジョウジは不平らしい顏付をしていつた。

「さうぢや御座いません、私もお供する覺悟で御座います、危險なんて恐れやいたしません……たゞあなたのことを心配しましただけで御座います。」

「勿論船長は船に殘つて呉れなくては。」と大河内は言ひながら加藤をじろりと眺めた。

加藤は答へた。

「冒險は私の柄ぢやありません、それに家に娘が待つてゐますので體を粗末にやされません……お察し下さい。」

この時小柴は皮肉に加藤にいつた。

「船長はゆつくりハムモックに寢ころんで、船員をぐるりに集めてさ、例の娘さんのことでも話してゐた方が安全といふものだ……それから冒險がしてみたけりや、持つて來た探偵小說を讀んでゐりやいい。」

かう言はれて加藤はたゞ苦笑するのみであつた。

那須も小柴につれて叫んだ。

「隱居役にそれがいい。」

大河内は那須や小柴が船長を冷かし過ぎると思つた。彼は彼がこのアロハ丸をつくつて以來の船長で、加藤に對して感謝すべき多くのものを持つてゐる。大河内は加藤に不愉快を感じさせまいとおも

つた。

「何しろ船長は船の支配者だ。支配者が不在をしたら船はどうなる、その秩序が保たれない。責任上船長には船に殘つて貰はなければや。」

加藤は「僕もさう思つてゐる」といつたやうな顏付で大河内を眺めた。もとより船長加藤には大河内の命令でこんな南洋まで遣つて來たもの、、最初からヤクキ島に對する何等の興味を持たなかつたのである。

アコとジャボの案内で大河内那須小柴それにジョウジを加へて四人がいよいよ上陸することになつた。上陸の用意が出來た……アロハ丸から小さい平底船が下された。彼等は一齊にそれに乘つた。彼等は間もなく上陸地點へ着いた。

そこに一枚大きな平面盤の石があつた。それが滿潮のため一尺水のなかに沈んでゐた。彼等は一人ぴとり平底船からその上へ下りた……彼等は水がお湯に近い程溫かいことを感じた。大河内は「なるほどこれが赤道直下十九度の水かな」と思つて、自分ながら不思議な所へ遣つて來たものだと今更ながら感じざるを得なかつた。大河内は頭の上におつ被さるやうに突き出した石の防壁を見上げた時、これがどうして登れるかと思つた。船の甲板上からこの絕壁を見た時まるで平面であるかのやうに思はれたが、今接近してみるとそれは鋸齒狀にでこぼこしてゐるのである。それから大河内はこゝには何も生えてゐない裸の坊主岩だと思つてゐたが、今上陸地の平面石の上に立つてゐると、どこからと

も無く甘い強い花の香氣が鼻に迫つて來るのを覺えた……所で眼をぢつと暗黑のなかへ据ゑて見詰めると、岩の割目や間あひだに何だか知れない花が一面に咲いてゐるやうに思はれた。

今先登を承るのはいふまでもなくジャボとアコである。彼等につゞいて大河内那須小柴ジョウジといふ順でこのつつ立つた絕壁攀登り始めたのであるが、最初は不可能だと思はれたがいよいよ着手して見るとさうでもないやうに思はれて來て、彼等は一安心したらしく見えた。この間に大河内は心のなかで、「これも不可能は可能になる證據だ」と思つて快心の微笑さへ洩さざるを得なかつた。

「靜に登つて下さい、決して急いではいけない、それから上の方を見ないやうにして下さい。」とジャボは二度も三度も怒鳴つた。登る道は極めて狹いのであつたが、足を踏掛けるやうに段々が出來てゐるのみならず、道の兩側に小さい柔軟ではあるが至つてねばり强い蔓みたやうな雜草が生えてゐた。みなのものはそれを手につかまへて登つて行つたのである。彼等は今船から眺めた白い刀の交叉の場所を遙に過ぎた頃、下の方を見下すと、アロハ丸で彼等を見送るために點した五つ六つの提灯の火が螢のやうに動いてゐた。

ジャボとアコの足は跳るやうに出來た子羊の足のやうに輕かつた。然し彼等はそれを得手勝手に亂用せずに、他の人々がついて來られる程度にゆつくりと歩調を合はせて動かした。ジャボとアコの手はまるで猿の手のやうに、敏捷巧妙な働きをして道ばたの草や岩を思ふやうに摑んだ。彼等は道の廻り角へ來ると、一々それを注意して「注意して歩くやうに。」と叫んだ。大河内その他三人のものは

まるで夢中歩行者のやうで、何事も考へる餘裕がなくたゞ一歩一歩上へ上へと足を運んだのである。然し不思議なことに、彼等は別に恐怖らしいものを感じなかつた。さりとて彼等が自分達が人間以上の超人であるとは勿論思はなかつた。然しかうして登つてゆけばいつか絶壁の上へ出るに相違ないといふ意識が働いて、彼等を安心させて登らした。

彼等は溫室のなかを這つてゐるやうに感じた……熱いが氣持ちのいゝ熱帶的空氣が彼等の頰を嘗めた。彼等が未だ曾て想像したことの無いやうな山登りいな岩登りをしてゐる間にも、ほんの一瞬間であつたが自分の意識にかへつて、「まるで蝸牛の這つてゐるやうだ」と思ふことがないのでもなかつた。

彼等は時々鳥の悲鳴に驚くことがあつた……巣に人つて眠つてゐた岩の間や雜草のしたの鳥が、人の襲撃して來るやうな氣色に飛びあがつたのである。それ等の鳥は外へ飛出さうとする間際に彼等の頰や額を薄氣味の惡い羽翼で拂つた。また自分達の巣へ戻らうとして間違へて彼等の首筋や背中に停つた。彼等は驚いて手で鳥共の足や嘴を摑んだ……またそれ等の鳥のなかには、手で摑まれたまゝ動きもせずにぢつとしてゐるのさへあつた。勿論これが日中であつたならば、これ等の鳥は人間を少しも恐れなかつたのである、或は人間を自分の友人位に思つたに相違ない。

大河内等は疲勞して足がすくんで一歩も前に出ないとさへ感ずることがある。さういふ場合に彼等は腰を下すことの出來る岩を見出した。その岩を暗いながらもぢつと見ると結晶した長方斑石でざら

ざらになつてゐるのを知つた。また彼等は石灰質の岩がずつと擴がつてゐて、その間に黑曜岩の大きな扁板が交つてゐるのを知り、彼等の歩いてゐる狹い道が古い溶岩のやうで、その上に石灰石が敷物になつてゐるやうに思つた。それからたゞさへ狹い道を、恐ろしい大きな岩や石の肩が出しやばつて一層に狹いものとしてゐる。實際をいふと歩く餘地のないやうな狹い道を彼等は歩いて登つたのである。ジャボとアコの兩人が以前こゝを海際の潛水艇入口から登つたことがあつたかを、誰も彼等に尋ねなかつた。恐らく彼等とても初めてであつたかは知らないが、彼等の自分を環境に適當させてゆく敏感性は驚くべきもので、その本能的機智と思慮が暗黑であるにも關らず、彼等を自由自在にこの狹い道を登らしたのではなからうかと思はれた。

「道がだんだんぬるぬるに成つて來ますから、御用心下さい、足場が恐ろしく惡くなりさうです。」とジャボは叫んだ。

大河内はいつた。

「道が廣くなつたかと喜んだらこいつは泥孱だな……水が岩から出て側面攻擊とは恐れ入るね。」

このぬるぬるした道がところに依ると水浸りしてゐる、その不安心なこと夥しかつた。小柴は叫んだ。

「かう道に叛逆されては堪らないな。」

すると那須は小柴に相槌を打つていつた。

「一寸みなさんお尋ねしますが、こゝは地獄の幾町目ですか……僕等はまるで娑婆を逃げ出した亡者だね。」

「だが那須・娑婆に借金の證文を殘して來なかつたのが僕等の自慢だ、さうぢやないか。それにしてももう少し歩きいゝ處へ來さうなものだね。」

かういつて小柴は笑つた……小柴や那須ばかりでなく、大河内もジョウジも疲勞を增したに相違はないが、大變心持は落付いて來たやうに感じた。それといふのは彼等がかういふ危險な狹い道を登るに馴れたといふことのほか、彼等は事情に順應して心を苛立たせないやうに度胸がすわつたからである。大河内は小柴にいつた。

「急いだつて周章てたつて仕方がないよ。どうだね、例の歌……何といつたつけね、『森の彼方に忍び來よ』でも唄つて元氣つけちやどうだね。」

「そいつはいゝかも知れない。」と小柴は答へた。「だが、『森の彼方に忍び來よ』ぢやなくて『地獄の穴に忍び來よ』だね。『お話すべし戀の苦み』でなくて『お話すべし滑る苦み』ぢや遣切れないね。」

那須は叫んだ。

「然し小柴はなかなか元氣だな。」

こんな無駄話に似たやうなことを彼等は苦しいうちにも喋りながら道を登つた。

するとだし抜けにジャボが叫んだ。

「みなさん飛ぶ用意ですよ。」

彼等は今道のどん詰りへ行つた……道が左へ曲つてその左側の水の無い處を歩かねばならない。事實道といふよりは小さい川が今まで辿つて來た道のどん詰りに流れてゐるのである。勿論この川がどんなに深いものかは誰も知ることが出來ないが、彼等はその水際に立つた時、その水聲からかなり深いやうに感じた。

那須はいつた。

「地獄の三途の川といふのはもつと廣いだらうね。いつたいこれは何といふ川だらう。」

「兎に角お婆さんがゐないから、これは三途の川でないことだけは確だ。」

かう那須と小柴が無駄口をたゝいてゐるうちに、ジャボは樂々と輕るさうにひらりと向側へ飛んだ……まるで獵犬の早業に讐へることが出來た。所で彼に引續いてアコ、それから大河内那須小柴ジョウジの面々が何の苦もなく向側へ飛んだ。

大河内はいつた。

「僕の體が六十ポンドしかないやうに感じたよ。無茶に輕くなつたもんだが、段々體がしなびて行くんだらうかね……」

那須は答へていつた。

「僕も同じことを考へてゐた所だ。地球の引力といふ奴がこの第四次元の國では狂つて來るのかも知

れない……それにしてもジャポの身の輕さはどうだ、飛んで上るのも下りるのも同じやうに樂さうではないか。」

大河内はまた言葉を續けた。

「月の世界へ行くと普通の人間は二十六七ポンドしか目方がないさうだ……勿論月の世界へ行つた奴はゐないが、何でもさういふことだ。この島で僕等の目方が六十ポンドあるといふのは、まだまだ地球の一部だといふ證據だ。」

大河内も那須も大きな聲で笑つた。

道はこれから漸次に平坦になつたので彼等の歩くのは大變樂に感じた。それでも道が處々に高くなつて息が切れたり、また方々に恐ろしい岩がでしゃ張つてその下を這つて歩かねばならなかつた。

「さあもう一息です急ぎませう。」とジャポは叫んで大河内の手を引張つた。大河内はジャポと竝んで歩いた……彼等は今山が岬のやうになつた處の麓をぐるりと廻つた。

ジャポは叫んだ。

「御覽下さい、御覽下さい、如何です。」

大河内は眼前いな眼下の景色を見て眼をこすつた。彼は夢を見てゐるのではないかと疑つたからである。彼は二度眼をこすつた……なほも彼は夢ではないかと思つたからである。彼は何を見たのであるか。彼は心の中で思つた、「これは現實的實景でなくて、或は自分がしばしば見た夢で知つてゐる

場所の記憶が幻となつて顯はれてゐるのかも知れない」彼は三度眼をこすつた……どうしても彼は夢を見てゐるに相違ないと思つたからである。彼はこの時バーン・ジョンズがある繪について書いた瞑想的定義の言葉を思ひだした。……これは實在しなかつた、又將來も實在しないであらうと思はれる美はしいロマンチックな夢で、これまで輝いたどんな光よりももつと良い光で包まれ、誰れも指示することの出來ない卽ちただ記憶にある思慕の繪だ……」然し彼は眼下の光景を眺めて、それが別に不思議な場所と思はなかつた、また異つた環境のものとも思はなかつた。繪はそれを眺めて古い馴染の鄕里へでも歸つたやうに感じた。如何にも昔ながらの鄕里で何一つ變化してゐない、何一つ面白くないと思はれるやうな進歩の痕跡がない處へ來たやうに思つた。彼はかういふ鄕里へ歸ると、誰も近代的科學の進歩を語らないのを嬉しく思つた、またここではすべての實在が卽ち幻であり、夢であることを喜んだ。

眼下に横たはつてゐる谷合を見ると、紫色した薄明に包まれてそれが幽かな耳語を洩して來るやうに感じた。そして谷合のずつとの下に鹹湖らしいものがあつて、眞珠から出る内光のやうに複雜ではあるが清澄明亮な微光を放つてゐた、そしてその微光が周圍の青い樹木の葉に圓くぼかした紋形をつけた。それから谷の中央部ともいふべき場所に高い山があつて、その頂に塔や櫓が壯麗な威儀を正して立つてゐる……アロハ丸がヤクヰ到着の前夜遙かな海上から見た燈火は卽ちこの山の燈火であつたのである。

今眼を轉じて山の麓を見よ……あゝ、何たる光線の集合所よ、それは光線の大伽藍だ、光線の城郭だ。ぢつと眼をそれへ集中して見てゐると、次第に中から眞白な壁や圓天井や尖塔や樓閣などがはつきりと顯はれて來る。これはヤクヰ王の都府、稱してメッドといふ町である。大河内は「あゝ、何といふ驚くべき光線の樣だ」と思つてそれを眺めた……結晶した岩から出る透明な光線であつたが、勿論現實的光線とは全く違つた種類のものであつた。大河内は「あゝ、これこそ神祕の都會だ」と叫んだ。ヤクヰ島の海岸は攀れないやうな岩石の絕壁で取卷かれてゐるが、島の心臟はどうかといふに豐饒肥沃である、荒々しい手に握られた眞珠貝と評して差支がないのである。粗末なごつごつした風呂敷で包んだ神祕な寶石といふべきものである。大河内は心のなかで自然が彼に見せて呉れた新しい美の現象に對して深い感謝を神に捧げざるを得なかつた……この新しい一面こそ最も光榮に滿ちた一面で、彼が夢に見てゐた所のものが實在して顯はれたのである。卽ち彼が憧憬てゐながら何物であるかをはつきりと了解しなかつた所のものが、眼前に顯はれたのである。

大河内は酒井不二子孃を考へるのは極めて當然である……彼女はこの谷合のいづこにゐるであらうか。山上の建物のなかにゐるとしたならば、それは塔のなかゝ、櫓のなかゝ。メッド市にゐるとしたならば、いづれの家に住んでゐるだらうか……それとも彼女は危險な目に出會つてはゐないだらうか。彼女は自分が彼女を考へてゐるやうに等しく自分のことを考へてはゐないであらうか。大河内は自分が古い物語、いふまでもなく中世紀の騎士物語であるが、そのなかに顯はれて來る武裝した愛人であ

るやうに思ふと、不二子孃は勿論芍むした寂しい塹で取卷かれた古城の奧深く幽閉された姫君であらねばならない。この憐れむべき美人を助けに出かける武士は卽ち大河内自身である。かう彼が思つて來ると彼の腕はりんりんと鳴りひゞき渡り、その心はロマンチックな飛躍を感じて一刻もぢつとして居られないやうに感ぜざるを得ないのである。彼は不二子孃を見て、初めて戀の何物たるを了解したといつていゝ。それと同時に自然の神祕に初めて觸れたのはこのヤクヰ島である……彼はヤクヰ島と不二子孃は違つた在存であるけれども、その實一つのものであるやうに感じた。卽ち戀が自然の現象となつてヤクヰ島になり、女性と顯はれて不二子孃になつたのである。もとより彼に囁やく所の神祕そのものはヤクヰ島でも不二子孃でも彼に取つて同じである。事實の上に於いて彼が不二子孃を知るに至つたのはつい近頃のことであるに相違ないが、彼は幾百年も幾千年も以前から彼女を探してゐたやうに思つた……そして彼は今初めてヤクヰ島の中心に入つたに過ぎないが、これも彼が長い年月の間探し廻つてゐた所のもので、彼が常に夢に見て忘れることの出來なかつたものだがさりとてそれが何物であるかを明瞭にしなかつた場所であつたのである。彼は今ジャボと共に絕壁の岩に立つて眼前の谷合を眺めてゐるのだが、ヤクヰ島そのものと不二子孃とが一つに合體して不思議な一つの象徵となつて彼に迫つて來るやうに感じざるを得なかつた。

彼がかういふことを心に畫いて考へてゐたのであるが、今實際の意識に返つてみると、銀のやうな色の、細い光線が足許の草を照らしてゐるのに氣が附いた。彼は頭をあげて十三夜の月が右の空から

顯はれて山の肩を覗いてゐるのを知つた。彼の心には到底言葉で語ることの出來ない天國的の香ばしさともいつてい、不思議な感じで溢れてゐたのである。彼は大きな聲を出して那須と小柴やジョウジに叫んだ。

「さあ、行かう。」

那須はそれに答へた。

「あゝ、何ともいへない美麗な景色だ……もう二三分見せて置いて呉れ。まるで蜃氣樓を見るやうだ、風でも吹いて來ると消えるかも知れない。」

小柴は那須の言葉に續いていつた。

「マッチでも落さうものなら、直に爆發してなくなりさうだね。」

大河内は無言で出發の用意をしてゐた。然し彼は自分に獨語してゐたのである。

「ここはすべての道が一つに集る處だ。ウェストミンスター大伽藍の入口は澤山あるが、何處からいつても内陣へ行けるやうなものだ……神祕の核心だ。」

大河内の一行は再び歩行を取り始め、道を島の中心へと進めた。道は必ずしも平坦ではなかつたが決して困難なものでなかつた。實際に喜ばしい感じを彼等に與へた。彼等は少し前に谷合を見下した場所と同じ程度に高い土手の上を歩いたのであるが、彼等の頭や首筋を拂つた熱帶樹木の枝はしなやかであつた。そして如何にも心持のよい馥郁たる香氣を放つた。一方の土手の下にはほそい幹の樹木

が一面に繁茂して、段々と空を登つて行く月の光線を斜に受け、その光線が樹木の間に踊つた。彼等の殊に喜ばしく思つたのは、鳥や蟲の愉快な夜樂がそこにもここにも自由に豐富に行はれてゐたことである。それ等の音樂は單純なものであつたが、無理に强ひられて義理づくで唄つてゐるのでなく、悉く地上生活に對する歡樂の歌であり禮讃の音符ならざるはなしであつた。あゝ、なんたる甘い哀愁をそゝる聲であつたか、なんたる調諧的音樂であつたか。大河内はそれを鑑賞するに足るだけの耳を持つてゐると思つた。そして彼は「如何に夏の夜の森でもこんなに妙音に滿ちてゐる」とは思はなかつた。

那須と小柴は無言で大内河の後を續いて歩いた。大河内は疲勞を忘れたかのやうに道を飛んで急いだ……道は廻つて森のなかを降つたが、下りきつてしまふと、周圍の光線がすつと明くなつた。然しそれは夜が明けて太陽が東を上り始める場合の明るさでもなく、また月光の明るさでも都會を照らす燈火の明るさでもなかつた。大河内等の見出した明るさは、これまで地上を輝かした如何なる光よりもつと良いもので、それが面紗かマントのやうに眼前の景色を包んでゐた。樹木や草花などを見ると、手品師が燃した火鉢の煙を拂ひのけてほつと一息ついたといつたやうな狀態で、靜に解放された歡喜を樂んでゐた。若し大河内が日本新聞の編輯局なり帝劇裏のアパートメントなりから、かういふ有樣を見たならば彼はこれは不自由な虛僞の生みだした結果だといつて退けてこの現象を疑つたに相違ない。然し彼は今これを信じた。なほ今日の子供が電燈を見て魔法の仕業と思はないと同じやうに

信じたのである。

大河内は依然として無言で歩いた。然し彼は心のなかで思つた。「今ある神聖な日の曙光の門に立つてゐるかも知れない、あゝ、遠い遠い國の入口にゐるのだな」彼は自分を見廻はし眼を周圍に走らした……場所はまるで少年時代に見た繪本の中にあつたやうな景色であつた……彼はその後この景色をどんなに見たいと思つたか知れないが、それがとんと實際は顯はれて來なかつたのである。今彼はこれを眼前に見出したのである。彼は少年時代に、壯麗な太陽の光線を受けて冥服を着飾つた兵隊の進軍するのを夢見た、彼は不思議な方角から流れて來る永劫の音樂を聞いて目覺めたことがあつた。彼はある朝目覺めにゐて不合理とは知りながら完全に幸福で堪らなかつた瞬間を經驗したことがあると思つた……かういふ刹那的記憶の斷片が今結晶して一つの雰圍氣を作り、大河内はそのなかに包まれるといふ感じを持つた。もとより彼は簡單に幸福であるといふことの外、詳細に合理的に他人に說明することが出來ないのであつた。

彼は今綺麗な草が一面に生えてゐる丘へ出て來た……ここに白い大理石の階段があつてそれを上ると廣い胸壁の上へ立つことが出來るのである。ジャポはこの階段を猿のやうに早く登つて行つた。そして大河内を招いていつた。

「早く、早く、メッドの町を御覽なさい。」

ジャポの聲は靜かであつたが嚴肅な誇りに滿ちたもので、この瞬間に於ける彼の樣子は風呂敷のな

かから金魚の鉢を取出した手品師のやうな樣子であつた。

大河内は階段を走り登つた、そしてジャポの指さす方角に顏を向けて胸壁の上に立つた。そして彼は眼下左右に擴がるメッドの町を眺めた……そこに明亮新鮮な光が大きな洪水のやうに漲り流れてゐる。一言でいふと水晶宮の町だ。大河内の立つてゐる胸壁から廣い石の階段がゆるやかな斜形に作られてゐて、その階段の麓から町へと續いてゐる。町には立派な步道があつてそれが大理石であるかと疑はれる位に白くつるつるしてゐる。町の兩側に櫛の齒のやうに行儀正しく並んでゐる建物を見ると、みなその美を競ひその壯を爭つてゐるやうである。寺院なり宮殿なり公會堂なり學校なり病院なりで、大きな石の積みかさねから出來てゐる。町の中心部と思はれる場所に巨大な建築の見本と言へるやうな大伽藍があつて、その前に壯麗優美な凱旋門が立つてゐる。この大伽藍に直接續いて後部から山が登り始め、それがどこまでも空へと高まつてゐる。そしてその頂上に立派な樓閣が出來てゐる、この樓閣から放射する燈火が寂しい夜の暗黑を照らすのである。

「これこそ妖術の町だ、確に人を恍惚たらしめる、確に人を魅し去つてゆく……幾千年前に偉大な魔法師の呪文から浪のやうにむくむくと立ちあがつたのがこのメッドだと人が言つても僕等は信じない譯にゆかない。全く蠱惑的の町だ、愉快な混亂の町だ、實に神祕の町だ。」

かう大河内は叫ばざるを得なかつた。然しメッドの町が單にロマンチックな詩のやうな町であるかといふに、決してさうではない……如何となれば町の設備構造が一般人間の日常生活に順應し得る程